

靈界物語 第三〇卷 海洋萬里 巳の卷

出口王仁三郎

凡例

【】……底本で傍點が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第三〇卷』愛善世界社

1999(平成11)年04月04日 第一刷發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

圖表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜變更した。
編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

2009年11月20日修正

～
～
～
～
～
～
～
～
～
～

目次

序じよ

凡例はんれい

總説そうせつ

第一篇

高砂たかさごの松まつ

第一章

主従二人しゅじゅうふたり（八四三）

第二章

乾いぬゐの瀧たき〔八四四〕

第三章

清きよめの瀧たき〔八四五〕

第四章

懷くわい舊ききうの歌うた〔八四六〕

第二篇

珍うづ野の瞰かん下か

第五章

下げ坂はんの歌うた〔八四七〕

第六章

樹じゆ下かの一いつ宿しゆく〔八四八〕

第七章

提ちやう燈ちんの光ひかり〔八四九〕

第八章

露つゆの道みち〔八五〇〕

第三篇

神しん縁えん微び妙めう

第九章

醜しこの言こと靈たま〔八五一〕

- 第一〇章 妖雲晴えうんばれ「八五二」
- 第一章 言靈ことたまの妙めう「八五三」
- 第二章 マラソン競争きやうそウ「八五四」
- 第三章 都入みやこいり「八五五」

第四篇 修理固成しうりこせい

- 第四章 靈れいとパン「八五六」
- 第五章 花はなに嵐あらし「八五七」
- 第六章 荒あしの森もり「八五八」
- 第七章 出陣しゆじん「八五九」
- 第八章 日暮ひぐらシの河かは「八六〇」
- 第九章 蜘蛛くもの兒こ「八六一」
- 第二〇章 雉きじと町まち「八六二」

第五篇 山河動亂さんかどうらん

第二一章 神王の祠しんわうほこら（八六三）

第二二章 大蜈蚣おほむかで（八六四）

第二三章 ブール酒しゆ（八六五）

第二四章 陷穽おとしあな（八六六）

附記 湯ヶ島温泉ゆがしまをんせん

天津祝詞解あまつのりとかい

デモ国民歌こくみんか

（
（
（
（
（
（
（
（
（
（

序じよ

伊豆國田方郡湯ヶ島温泉安藤唯夫氏方に於て、入浴傍隙を窺ひ、數多の訪問客に圍まれながら口述いたしました。南米（高砂島）の三十萬年前の神示の物語です。すから、その地理に於ても地名等に於ても、今日より見れば非常に違つて居ります。例へばアルゼンチンをウツと言ひ、ブラジルをハルと言ひ、ペルウをヒルと言ひ、コロンビアをカルと言ひ、チリーをテルと言ふ様に、山河の名に至るまで今日の地理學より見れば大變に名稱が違つて居りますから、そのつもりでお讀下さい。

大正十一年八月十四日 於湯ヶ島

一、本巻の末尾に收めたる『湯ヶ島温泉』は瑞月師が、伊豆滞在中實際肉體にて行きたる所を敘景したものでなく、全く靈にて遊びたる儘を描いたものであります。

これは伊豆の信者達が充分承知であらうと思ひます。

二、『天津祝詞解』は嘗て皇道大本叢書の『祝詞釋義』として出版されたものを、瑞月師が更に訂正したものであります。

大正十二年八月 編者識

本卷は主として、神素盞鳴尊の生み給へる、八乙女の中の一人末子姫が、侍女の捨子姫と共に高砂島へ漂着し、智利山峠を越え、途中戌亥の池の龍を濟度し、バラモン教の石熊といふ教主の危難を救ひ、又カールと言ふ怪しき男に出會ひ、カールを伴人と爲し、アルゼンチンの辰巳の池の龍を解脱せしめ、ウヅの都の松若彦の出迎へを受け、數多の國人に迎へられて入城したる物語を始め、三五教の教主言依別命、國依別の宣傳使と共に高砂島に安着され、テルとヒルの國境三倉山の溪谷に於てウラル教の信徒を死より救ひ、言依別命はウヅの都へ出立し、國依別はヒルの都楓別命の神館へ行かむとする途上、ウラル教の教主ブールの部下が襲來し、日暮シ川の丸木橋の畔に於て衝突したる後、アラシカ峠の上にてエリナと言ふ若き女に出會ひたる等、苦集滅道の理を平易に説いた物語であります。

第一篇 高砂の松

第一章 主従二人（八四三）

常世の國に現れませる 常世神王自在天

大國彦を主神とし バラモン教を開きたる

大國別の神司 萬里の波を乗り越えて

埃及國に出現し イホの都にバラモンの

教の射場を築き上げ 一時は旭の昇る如

教の光も四方の國 輝き渡れどバラモンの

神の教は人草の 生血を見ねば治まらぬ

殘虐無道の荒修業 入信したる信徒は

靈主體從の名の下に 釘の打ちたる足駄履き

裸となりて茨室 飛び込み體をかき破り

或は猛火の中に入り 水底潛りさまざまと

恠へ切れない苦みに 一度寄り來し信徒も

悲しみもだえ日に月に 何時とはなしに逃げ去りて

法燈いまや滅せむと 悲運に傾く折柄に

夏山彦や祝姫 行平別の神司

埃及都を根據とし 靈主體從の真相を

治く世人に宣り傳へ 仁慈無限の國の祖

國治立大神の 嚴の御靈の守ります

三五教の御教は 月日と共に榮え行く。

バラモン教の大棟梁 鬼雲彦を始めとし

鬼熊別の二夫婦 埃及の都を後にして

數多の信徒を引率し 南天王の籠りたる

由緒ゆいしよの深ふかき顯恩けんおん郷きやう

エデンエデンの河かはを打渡うちわたり

茲ここに再ふたびバラモンばらもんの

道みちの根こん據きよを築固つきかため

巖いはほを疊たたみ石いしを積つみ

難攻なんこう不落ふらくの絶壁ぜつぺきと

頼たのみて據よれる顯恩けんおん城じやう

曲まがの教をしへは再生さいせいの

機運きうんに向むかひて中津國なかつくに

メソポタミヤメソポタミヤを始はじめとし

フサフサの國くにより印度つぎの國くに

勢猛いきほひたけく宣のりて行ゆく

さはさり乍ながら世よの人ひとは

野蠻やばん極きはまる荒行あらげうに

堪たまりかねてか遠近をちこちに

怨嗟えんさの聲こゑは聞きえ來きて

蚊かの鳴なく如ごとき憐あはれさを

見みるに見兼みかねて瑞御靈みづみたま

神素かむす蓋さのをのおほかみ

バラモンバラモン教けうの神司かむつかさ

數多あまたの宣傳とりつぎ使言ことむ向むけて

天地てんちを造つくり玉たまひたる

大慈だいじ大悲だいひの大神おほかみの

大御心おほみこころを懇ねんごろに

バラモンバラモン人びとに説とき諭さとし

世界せかい揃そろうて皇神すめかみの

惠めぐみの露つゆに浴よくせしめ

五み六ろく七しちの御世みよの神政しんせいを

仰あふがしめむと思おほし召めし

八や人たり乙をとめ女をとめを使つかはして

バラモン教けうの信まめ徒ひとと

表うは面へを飾かざりて顯けん恩おん郷きやうの

教館をしへやかたに入いらしめぬ

八や人たり乙をとめ女をとめは大おほ神かみの

深ふかき心こころを麻あな柱なひて

尊たふとき御おん身みも厭いとひなく

大だい膽たん不ふ敵てきに曲まが神かみの

醜しこの砦とりでに朝あさ夕ゆふに

心こころ配くばりて仕つかへける。

神かむ素す盞さ鳴の大おほ神かみは

天あまの岩いは戸とを開ひらきたる

五いつ伴とも緒をの其その一ひとり人

太ふと玉たま神がみを遣つかはして

鬼おに雲くも彦ひこの一いち類るゐを

誠まことの道みちに言こと向むけて

メソポタミヤに神かみ國くにの

清きよき基もとを開ひらかむと

エデンの河かはを只ただ一ひとり人

渡わたりて深ふかく進すすみ入いる

後あとより追おひ來くる神かむ司つかさ

駒こまの頭かしらを竝ならべつつ

八や人たり乙をとめ女をとめの忍しのびます

顯けん恩おん城じやうの奥おくの間まに

難なんなく進すすめばバラモンの

鬼おに雲くも彦ひこは出いで迎むかへ

言こと葉は巧たくみに取とりなして

毒酒どくしゆの企たくみを始はじめける

悪あくの企たくみは忽たちまちに

徹てつ底的ていきに曝ばく露ろして

おのが住すみ家を振ふり棄すてて

雲くもを霞かすみと波フ斯サの國くに

脆もろくも姿すがた隠かくしける。

茲ここに太ふと玉たま宣せん傳でん使し

顯けん恩おん城じやうに居ゐ殘のこりて

神かみの教をしへを傳つたへまし

八や人たり乙をとめ女めいは各めい自めいに

八やし洲まの國くにに蟠わだかまる

八や岐またの大を蛇ろちの醜しこ魂だまを

言こと向むけ和やはし天あめの下した

百ももの災わざはひ拂はむと

各おの侍のし女ぢよを伴ともひて

波フ斯サの國くにをば振ふり出だしに

宣せん傳でんせむと進すすむ折をり

巴ば拉ら蒙もん教けうの殘ざん黨たうに

取とり押おさへられ別べつ々べつに

棚たな無なし舟ぶねに乗のせられて

海うな原はら遠とほく流ながされぬ

八や人たり乙をとめ女めいの末すえの子こと

生うまれましたる末すえ子こ姫ひめ

尊たふとき生いのち命のちを捨すて小を舟ぶね

波なみに浮うかびて捨すて子こ姫ひめ

主あるじ人の君きみを慰なぐさめつ

甲か斐ひ々が々がしくも艦ろをとりて

大たい西せい洋やうの中まん央なかに

散さんざい在ざいしたる大島おほしまや 小島こしまの間あひだをくぐりつつ
波なみのまにまにテルの國くに ハラの港みなとに上陸じやうりくし
宇都山峠うづやまたうげを乗越のりこえて 桃上彦ももがみひこの舊跡きうせきち地
都みやこを指さして進すすみ行ゆく あゝ惟神かむながらかむながら々々
御靈幸みたまさちはひましませよ。

末子姫すゑこひめは捨子すてこひめ姫とと共に漸やうやくハラみなとの港あんちやくに安着あしし、足あしを早はやめて珍うづの國くにに進すすまむと、
テルとウツとの國境くにざかひ、テル山峠やまたうげの麓ふもとにさしかかつた。八日やうかの月つきは高く中天ちうてんに橢圓だゑんけ
形いの姿すがたを現あらはし此愛このあいらしき二人ふたりの美女びぢよの頭かしらを覗のぞかせ玉たまふ。
末子姫すゑこひめ「大變たいへんな恐おそろしい目めに、幾度いくたびともなく出會であひましたが、神かみさまのおかげで
漸やうやく高砂島たかさじままで送おくられ、こんな嬉うれしい事ことはありませぬア。これも全まくバラモン
教けうの手てを使つかつて、妾わらひやうにん兩人かみさまを神かみさま様の深ふかき御經綸おしぐみの下もとに、お遣つかはし遊あそばしたのでせう。
此國このくには昔むかし、正鹿山まさかやま津見つみの神かみさま様さまがお治をさめ遊あそばした所ところと聞ききました、これから珍うづの
都みやこへ參まゐつて、三五教あななひけうの今日こんにちの様子やうすを探さぐり、宣傳せんでんを致いたさうぢやありませんか」

捨子姫すてこひめ「左様さやうで御座ございますなア。貴女あなたはまだお年としがお若いわかのに、此この廣ひろい國くにへお越こしになり、宣傳せんでんをせうとお考かんがへ遊あそばす其その勇氣ゆうきには妾わたしも實じつに心強こころづよく存ぞんじます。併しかし乍ながら、バラモン教けうやウラル教けうの勢せい力りよくも混入こんにふし、侮あなどる可べからざる潛せん勢せい力りよくがあると云いふことをハラみなとの港つに着つきいた時とき、人々ひとびとが話はなして居をりましたから、決けつして油斷ゆだんはなりますまい。併しかし乍ながら斯こう夜分やぶんになつては、山路やまみちを行ゆくのも何なんとなく心許こころもとなく、又大また變へんに體からだも草疲くたびれましたから、此この芝生しばふの上うへにて久ひさし振ぶりで、お土つちに體からだを親したしみ、夜よ明けを待まつて、此この峠たうげを越こすことに致いたしませうか」

末子姫すゑこひめ「それが宜よろしう御座ございませう」
と兩人りやうにんは肱ひぢを枕まくらに眠ねむりに就ついた。

テル山峠やまたうげをシトシトと降くだつて來きた四五人しごにんの男をとこ、二人ふたりが木蔭こかげの芝生しばふに他愛たあいもなく草疲くたびれ果はてて眠ねむつてゐるのも知しらず、茲ここに現あらはれ來きたり、
甲あ「オイ、大分だいぶん足あしも草臥くたびれて來きたやうだ。こゝらで一ひとつ休息きうそくをしたら如何どうだ」
乙お「膝栗毛ひざくりげの停電ていでんかなア。ヨシヨシ休やすんで行ゆかう」
丙お「そんな氣樂きらくな事ことを言いうてをれまいぞ。石熊いしくまの大將たいしやうから今夜頃こんやごろ三あな五な教けうの女宣傳をんなせんでん

が低下する位なものだ。チールやネ口の云ふ通り、今晚はここでグツスリと休暇を賜はつて行くことにせう。なア……イサクの大將……」

イサク「イサクさ言はずに、仕方がない、休んで行け。黙つてねるのだよ」

チール「俺はお前の様に寝てもものを言つたり、そんな器用な事は出来ないから、安心してくれ。お前こそズイ分能く寝言を云ふ男だよ。あんな寝言を云ひよると、見つともなくて、そばに安閑として居れない様な気分になるワ」

シーナ「俺の寝言を貴様聞いたかい。天下萬民を安堵せしむる爲の一心が凝り固まつて居るから、寝ても覺めても、天下を憂ふる至誠の言葉に充たされて居るのだ。貴様はあまり學問がないから、俺の言葉が分らないのだろ」

チール「天下の事を思つてゐるなんぞと馬鹿にするない。何時とても貴様の宅は嬢天下ぢやから、餘程下鶏になつとると見えて、ねると直ぐ、アア アア アア

アアと大きな口あけて、鼾をかきやがつて、痛い痛いとか、重たい重たいとか、言ひよるのだ。……なア、ネ口、何時も此奴の寝言は活版で押した様なものだろ

『よ』

ネ口「此奴アな、何でも高照山の谷間で通りがかりの旅人をひつとらまへ、何々した上、何々しやがった事があるに違ひない。何時とても妙な寢言を言ひよるぢやないか。……オイ、シーナ、貴様も餘程今こそバラモン教の宣傳使ぢやと云うて威張つて居るが、悪い事をやつたと見えるなア」

シーナ「知らぬワイ。そんなうるさいことを、夜の夜中に云つて呉れるな、氣分が悪くなつた。知らぬ神に祟りなしだ」

チール「アツハ、々々、夜分になると、高照山の話が大變に怖がる男だなア」

ネ口「きまつた事よ。ズイ分えらい事があるのだ。其秘密の鍵を握つて居るのはネ口さま丈だ。此奴の後を何時もつけ、ネ口さんと云ふ亡靈が、たつた二人計りついてゐるのだから、エラ相に云つても夜分になると門口一つ出るのもビリビリものだからな。こんなこと話して居ると、あの亡靈がやつて来て、又ヒュー、ドロドロだ」

シーナ「頼みぢやから、どうぞ言うてくれな」

ネ口「モウ是れで云ひ納めだから、半分丈云つて止めたらう。高照山の谷間に於

て、妙齡の美人二人に對し何々を致し、遂には何々をして、谷底へ何々し、其亡靈が何時も此奴の生首引抜かむと、夢幻に立つのだよ。……オイ皆の奴、こんなシーナ、オットドツコイ代物と一緒に歩いて居ると、何時かおかしナ手附をして、ヒューと御出現遊ばすかも知れやしないぞ。ア、何だかそこらがゾクゾクし出した。モウ此話は止めとこかい

イサク「オイ、シーナ、お前そんな覺えがあるのか。何だかネ口の物語を聞いて、俺も氣分が悪くなつて來たワイ。サアもう、こんな話を止めにして行かうぢやないか」

ネ口「俺やモウ何うしても動けないから、ここでチール計りネ口とせう、グウグウグウ」

カール「ハツハ、ハツハ、【らつち】もない事を言やがつて、シーナにからかつて居たが、早モウ寢て了ひよつた。罪のない男だなア。サア一層のこと休んで行かう」

とカールは又もやグレンと肱を枕に路の傍に横はつた。イサクもチールも亦眠り

に就いた。シーナは後に一人何だか首筋元がオゾオゾするので、眠りも得せず、イサクの腰に喰ひついて慄ひ戦いてゐる。

(大正一一・八・一四 舊六・二二 松村眞澄録)

(昭和一〇・六・九 王仁校正)

第二章 乾の瀧(八四四)

シーナは何となく恐怖心に驅られて、慄ひ戦いて居た。最前から五人の話を寝乍ら私かに聞いて居た末子姫、捨子姫は、バラモン教の石熊の部下、自分等を捉へむとしてここに來りし者なる事を悟り、上衣を脱ぎ、兩人はひそかに謀し合せて白衣となり、髪をおどろに亂して、ダラリと下げ乍ら、二人一度に白い手を前に出し、

「恨めしやなア、高照山の谷間に於て……」

と細い悲しい聲でやりかけた。シーナは此姿をチラリと見て、イサクを揺り起し、シーナ「オイオイ……イサク起きてくれ……皆の奴、タツタツ大變だー、出た出た、出たワイのう」

と慄ひおののいて居る。チールは此聲に驚き、あたりを見れば、木の茂みの中よりいやらしき姿の白衣を着けた幽霊、ボーツと浮いた様に現はれて居る。

チール「ヤア此奴ア大變だー。逃げる逃げる」

と先を争ひ、イサク、シーナ、チールの三人は轉けつ、まるびつ、命カラガラ何處ともなく逃げ散つて了つた。カール、ネ口の兩人は少しも騒がず泰然として、二つの怪しき姿を暫く見守つて居た。

カール「失禮乍ら……貴女様は顯恩城を立出て、固彦の爲に捉へられ、ここへ漂着遊ばした、神素盞鳴大神様の末子、末子姫様、侍女の捨子姫様の御兩所では御座いませぬか？ 私は實の所は珍の都の松若彦様に仕へて居ります三五教のプロパガンデースト（宣傳使）で御座います、一人の男はネ口と申しまして、これもヤツパリ三五の道の信者で御座いますが、此頃高照山にバラモン教の一派石熊

なる者現はれ、珍の都へいろいろと間者を入り込ませ、轉覆の計畫をめぐらして居りますれば、吾々は教主松若彦様の内命を奉じ、バラモン教の様子を探るべく、バラモンの信者となつて、今日迄暮れて來ました。然るに石熊の大將の言葉に、貴女方が今明日の内に、海原を渡りハラの港へ御上陸遊ばし、珍の國へお越しになるに相違ない。もしも珍の都へ兩人が乗込んだが最後バラモン教に對し、大變なる強敵が出来るやうなものだから、テル山峠に見張りをして、兩人を引捉へ、高照山に連れ歸れとの命令、日頃の吾々兩人が神様に御奉公するのは、今此時と喜び勇んで、一行の中に加はり此處迄やつて來ました者で御座います」

ネ口「私も貴女方御一行の此處にお休みと云ふことを、ゆくりなくも月にてらして悟りました故、ワザとシーナの舊惡を知悉してゐるのを幸ひ、おどして逃がさむかと考へ、いろいろの話を貴女様に聞えよがしに申上げました。早速の貴女様の頓智によりて、三人の者共は、あの通り逃げ失せまして御座います。最早一安心で御座います。サア是からカールさまと此峠を今の内に、お疲勞でせうが、假令少しでも構ひませぬから、御登り下さいませ。私は今逃げ去つた三人の男が、

もしや後返りをして来ましては、都合が悪う御座いますから、是から彼等の後を追ひ、無事にお二人様が珍の都へ御到着遊ばす様に、牽制運動を致しませう」

末子「あゝ、あなたは三五教の御方で御座いますか？ 能うマア御親切に有難う

御座います。假令十人や二十人、押寄せ来る共、妾に於ては別に心配でも御座い

ませぬが、いらぬ殺生を致すよりも、無事に目的地へ参れましたならば自他共に

是程結構な事は御座いませぬ」

捨子「私は姫様の侍女捨子姫で御座います。何分不束な者故、宜しく御指導を御

願申します」

ネ口「左様ならばこれで暫く御別れ致し、後日改めて御目にかかりませう」

と云ふより早く此場を立去つた。

カール「お二方様、モウ大丈夫です。サア私が御案内を致しませう」

二女「ハイ有難う」

と茲に三人は足を早めて、夜露したたるテル山峠を、足に任せて登り行く。

登り八里、降り八里のテル山峠の中央にまで登り着いた。夜は漸く明け放れた

と見え、小鳥の聲盛に聞えて来る。太陽はすでに地平線下を出でて、稍高く昇り玉へ共、東にテル山の峰を控へたることとて、其圓満な御姿を拜むことは出来なかつた。風の吹きまはしに依つて、轟々と響き来る瀧の音に、末子姫は耳を欬て、末子「カールさま、大變な涼し相な音が聞えて来たぢやありませんか？ どこぞ此近くに瀑布でも懸つて居るのではありますまいか」

カール「ハイ、二三丁計り北へ寄りますと、乾の瀧と云つて、テル山の谷々から集まる、大なる池が山の中央に在り、其瀧から落下する大瀑布が布を曬したる如くに懸つて居ります」

末子「ズイ分長らく潮風に吹かれ、又大變な汗を掻きましたから、一つ道寄をして、お瀑にかかつて見たら如何でせう？ なア捨子姫さま」

捨子「サ、それは願うてもない事で御座います。カール様に御案内を願ひませうか」

カール「サア……一寸考へ物で御座いますなア。あの乾の瀧の上の戌亥の池には、大變な大蛇が潜んで居ります。さうして大蛇の子が始終瀧の邊りに徘徊を致し、

人に憑いたり、或は咬付いたり致しますので、三五教の信者は、彼處を魔神の瀧と申し、誰も立寄つた者は御座いませぬ。時々バラモン教の教主石熊宣傳使が私かに一人、伴をも連れず、瀧にかかりに行かされると云ふ大評判で御座います。バラモン教は一時、火の消えた様な寂寥を來して居りましたが、石熊の教主が時々乾の瀧に御修行にお出でになると云ふのが呼物になつて、數多の人々が其神徳に感じ、此頃は餘程勢力を盛り返し、進んで珍の都近く迄、教館を張り、數多の間者を都に入れ、珍の館の松若彦様を往生させ、自教の勢力範圍に入れようとして、いろいろの計畫をして居るので御座いますから、もしや石熊の大將が瀧に浸るべく來て居つたならば、却て面倒が起りますから、今度は兔も角も此儘道寄りをせず、珍の都迄直行なさつたら、どんなもので御座いませう。その方が第一に安全で御座いませう」

末子「それもさうで御座いませうが、妾は何となくあの瀧の音が耳に入つてから、どうしても一度瀧が見たくなつてたまりませぬ。一寸見る丈でも宜しいから、立寄らうぢやありませんか」

捨子「カール様、何と云つても神力無雙の神素盞鳴尊様の御血の流れの末子姫様の事ですから、決して御案じには及びますまい。どうぞ案内して下さいませぬか」

カール「さう強つて仰有るならば、これも惟神でせう。……サア御案内申します」と先に立つて、大木の茂る林の中を斜に北へ北へと進んで行く。見れば幾十丈とも知れぬ大岩石の中央を銀河を縦にした様な大瀑布が眞直に懸り、青み立つた瀧壺には白い泡が濛々として浮き立ち、實に涼味津津々として夏の暑さはどこへやら、俄に身體緊張し爽快の思ひに充たされた。能く能く見れば、瀧の傍に大の男只一人、兩手を合せた儘、顔は眞青になり、唇は紫色に變り、目計りキヨロつかせ、直立不動の姿勢を執つて居る。カールは目敏くも之を見て、「アツ」と計りに驚いたが、轟く胸を自ら抑へ、末子姫の耳に口を寄せ、

カール「モシ、あれを御覽なさいませ。あそこに直立不動の姿勢をとつてる大の男が居りませう。あれが最前申した、高照山のバラモンの教主、石熊の大將で御座います。あの瀧の上から瞰下してゐる大蛇の恐ろしい眼……キツと大蛇に魅入れられ、身體が動けなくなつて居るのでせう。こんな所に長居は恐れです。吾々

もあのやうな目に會はされては大變ですから、足許の明るい内にここを立去らう
ぢやありませんか？ 又魅入れられたら大變ですよ！

末子姫は頭を左右に振り乍ら、

末子「イエイエ、妾も神素盞鳴尊の娘、敵を見て退却すると云ふ事は到底忍びま

せぬ。最早乗かけた船、大蛇を言向和し、石熊さまとやらを助けて上げたら、如

何でせう。是が吾々宣傳使の職務だと思ひます」

捨子「素盞鳴尊様は八岐の大蛇を退治の爲、世界中を御廻り遊ばす御神務、就

てはお一人にては此廣い世界、お手が廻らないから、自分のいたいけな御娘子を、

世界へお遣はし遊ばす御經綸を惟神的に御始めなさつて居られるのですから、た

かが知れたあれ位の大蛇を恐れるやうな事では、到底アマゾン河のモールバンド

や、醜大蛇を言靈を以て退治することは出来ません。斯様な所へ吾々がお伴を

して参つたのも、神様の御引合せ……三五教には敵を見て、退却すると云ふ事は

許されませぬ。ひとつ誠一つの言靈を以て戦つて見やうぢやありませんか？」

カール「ぢやと申してそれは餘り無謀では御座いますまいか？ 何程御神力があ

ればとて、こちらは人間の身體……向うは畜生、人間の言葉が分る道理もありま
すまい。又外の人ならば兔も角も、極悪無道のバラモン教の石熊の如き者をお助
けになつた所で何の功能もありません。天下に害毒を流し、人民を虐げる悪人
を助けようものなら、それこそ天下は紛亂の止む時なく、遂には珍の都まで蹂躪
し、良民を虐げ苦しむるは目のあたり、今大蛇に魅せられて、あの通り身體強直
し、今や蛇腹に葬られむとしてゐるのも神の御心で御座いませう。サアサア、早
く此場を立去らうぢやありませんか？」
末子「如何なる悪人と雖も元は同じ神様の分心分體、天が下に敵もなければ、吾々
は仇もないと深く存じて居ります。此惨状を見棄てて、如何して吾々宣傳使が歸
ることが出来ませう。神様に對しても恥かしくてなりませぬ。是より言靈を發射
し、大蛇を歸順させ、石熊の命を助けてやつたら、キツと善道に立返るでせう。
情は人の爲ならずとか申しまして、人を助けておけば、又自分も神様の御恵に依
つて、九死一生の場合、誰かの手を通して助けられるものです。吾々が幸ひ、此
處に立現はれたのも全く仁慈無限の神様の御攝理でせう」

捨子すてこ「姫様ひめさまの仰せあひ御尤ごもつとも……カールさま！ 決して御心配ごしんぱいは要いりませぬ。キツと御安心ごあんしんさせますから、此場このばは妾等わたしらにお任まかし下くださいませ」

カール「左様さやうなればお言葉ことばに従したがひませう」

茲ここに末子姫すゑこひめは瀧たきに横よこたはつて、崖下がいかの石熊いしくまの身體からだを睨にらみつめ、今いまや大口おほぐちを開あけて一呑ひとのみにせむとする勢いきほひを示しめしてゐる大蛇をろちに向むかつて、宣傳歌せんでんかを歌うたひ聞きかした。

末子姫すゑこひめ「神かみが表おもてに現あらはれて 善ぜんと悪あくとを立たて分わける

此世このよを造つくりし神直日かむなほひ 心こころも廣ひろき大直日おほなほひ

只何物ただなにものも天地あめつちの 神かみの尊たふとき御水みいき火きより

現あらはれ出いでし者ものなれば 四方よもの神人しんじん始はじめとし

山河草木さんかさうもく云いふも更さら 禽獸きんじう蟲魚ちうぎよに至いたる迄まで

切きつても切きれぬ同胞はらからよ 數多あまた同胞はらからある中なかに

天地てんちの神かみの經綸けいりんを 受うけて生うまれし人ひとの身みは

秀すぐれて尊たふときものぞかし あゝ惟かむながらかむながら神々かみ

御靈幸はひましまして 乾の池に潛むなる
これの大蛇の魂に 尊き神の御水火をば
かけさせ玉ひて天地の 守りの神と逸早く
神徳充たせ玉はれよ 瑞の御靈と現れませる
神素盞鳴大神は 豊葦原の國中に
さやれる八岐の大蛇をば 誠の劍拔き持たし
恵の玉を光らせて 大蛇の靈を悉く
服従ひ和し玉ふなり 瑞の御靈の末の子と
現はれ出でたる末子姫 顯恩郷を立出でて
大海原を漕ぎ渡り 漸くここに來て見れば
バラモン教の神司 御稜威も高き高照の
山の麓に宮柱 太しく立てて神の道
傳へ玉へる石熊の 尊き清き神の宮
假令教理は變る共 世人を思ふ眞心は

吾等の胸に違ふまじ

旭は照る共曇る共

月は盈つ共虧くる共

假令大地は沈む共

世界を思ふ真心に

いかでか差別あらざらむ

萬の物の靈長と

生れ出でたる人の身を

大蛇の神の現はれて

呑まむとするは何事ぞ

森羅萬象悉く

完美に委曲に守ります

皇大神の御心に

叶はぬ汝が振舞を

わが言靈を聞分けて

一時も早く改めよ

神は汝の身邊を

朝な夕なに守ります

其神恩を知らずして

神の宮居の石熊を

只一口に呑まむとは

天地許さぬ醜業ぞ

大蛇の神よ長神よ

今日は汝の玉の緒の

生命の亡ぶ瀬戸際ぞ

吾言靈に服従ひて

天地の道理を正覺し

醜の身體を脱出し

うつしき女神の體となり
高天原に昇りませ

吾れは神の子末子姫
天に代りて天津神

依さし玉ひし言靈を
汝の爲に宣り傳ふ

あゝ惟神々々
御靈幸はひまませよ

と歌ひ終れば、今迄形相凄じく、石熊を一呑みにせむと身構へ居たりし大蛇は、

兩眼より玉の如き涙を流し、幾度となく末子姫に向つて頭を下げ、感謝の意を表

しつ、巨大なる姿を瀧の中に隠して了つた。

今迄大蛇に魅入れられ、身體強直して身動きもならなかつた石熊は直に身體の

自由を得、嬉し涙を兩眼に垂らしつつ、三人の前に手をついて救命の大恩を感謝

するのであつた。

(大正一一・八・一四 舊六・二二 松村眞澄録)

第三章 清めの瀧（八四五）

高照山に本據を固めたるバラモン教の石熊は、
末子姫、其他に感謝の意を表し、
歌を以て所感を述べたり。その歌、

常世の國に現れませる 常世神王自在天

大國彦の樹てられし バラモン教の神司

深き恵も高砂の 寶の島に現はれて

高照山を根據とし 心も固き石熊が

信心堅固に守りつつ 教の法を遵奉し

服従ひ來る信徒に 何の容赦も荒行の

火渡り劍の橋を越え 水底くぐり茨室

赤裸にて飛び込ませ 釘の打ちたる足駄はき

神より受けし肉體を 損ひ破りて血を出し

神に對する贄と
思ひ詰めたる神司

神の怒りを和げて
天國淨土に助けられ

未來の苦をば逃れむと
迷ひ切つたるバラモンの

誠の道に違へるを
今や漸く悟りけり

あゝ惟神々々
仁慈無限の大神は

靑人草を始めとし
禽獸蟲魚造らしし

誠の親と三五の
神の教の末子姫

宣らせ玉ひし言の葉を
聞くより吾等は村肝の

心の空は冴えわたり
げにも尊き言靈の

御稜威に魂をてらしつつ
大蛇の魔神に魅せられて

動きもならぬ身體を
かばひ乍らも胸の内

悔悟の言靈宣りつれば
忽ち開く胸の暗

末子の姫の言靈に
流石の大蛇も感歎し

熱き涙をこぼしつつ
吾を吞まむと狙ひたる

心の駒を立直し

修羅の亡執忽ちに

晴れて姿を水煙

心の垢もおち瀧津

速川の瀬に現れませる

瀬織津姫の幸はひて

仇悉く消えにける

あゝ惟神々々

御靈の幸を蒙ぶりて

心佞けし石熊も

末子の姫の御恵に

救ひ出され今は早

三五教の皇神の

光に深く照されぬ

神が表に現はれて

善と悪とを立わけ

此世を造りし神直日

心も廣き大直日

只何事も人の世は

直日に見直せ聞直せ

身の過は宣り直せ

誠一つの言靈に

世人を救ふ三五の

神の教の尊とさよ

假令天地は變る共

神に誓ひし吾心

いかで變らむ高砂の

國に鎮まる龍世姫

國魂神の御前に 眞心こめて只管に

誓ひまつらむバラモンの 神に仕へし宣傳使

高照山に築きたる 教館を今日よりは

三五教に獻り 此世を造り玉ひたる

世の大本の皇神に 麻柱まつり世の爲に

力の限り身の限り 仕へまつらむ惟神

神の御末の末子姫 曲も穢れも捨子姫

罪もカールの御前に 罪科重き石熊が

心を盡し祈ぎ奉る あゝ惟神々々

神の心に見直して 珍の都にこれよりは

吾等を伴ひ給へかし 珍の館の人々に

今迄與へし虐げの 罪を陳謝し奉り

従僕となりて永久に 珍の都の門番に

仕へまつりて赤誠を 現はしまつる吾心

許ゆるさせ給たまへ瑞御靈みづみたま

嚴いづの御靈みたまの御前おんまへに

謹つしみ敬うやまひ願ねぎ奉まつる

あゝ惟かむながらかむながら神々々

御靈みたま幸さちはひましませよ

捨子姫すてこひめは又また歌うたひ出だしたり。其歌そのうた、

天あめの河原かはらを縦たてとして

眺ながめし如ごとき此この瀑布ばくふ

瑞みづの御靈みたまの珍うづの子こと

現あれ出いでませる末子姫すゑこひめ

此この世よの泥どろを滌すすがむと

流ながれも清きよきエデン河がは

身み魂たまを清きよめ足あし洗あらひ

心こころの垢あかを捨子姫すてこひめ

從みとも僕もの神かみを召めしつ

汐しほの八や百ほ路ぢの八や汐しほ路ぢを

秋津あきつの姫ひめの御守みまもりに

漸やつやう渡わたりテルの國くに

ハラの港みなとに上じやうりく陸し

テルの國くにをば横斷わうだんし

テル山やまた嶽たけの山麓さんろくに

進すすみ來きたりて月げつの宵よひ

芝生の上しばふ うへに横よこたはり
来こし方かた行ゆく未案すゑあんじつつ
眠ねむりにつきし折柄をりからに
俄にはかに聞きゆる人ひとの聲こゑ
何人なにびとなるかと目めを醒さまし
話はなしの様子やうすを伺うかがへば
バラモン教けうの神司かむづかさ
信徒まめひと共に五人ごにん連れ
妾わたしのいねし傍かたはらに
腰打こしうちかけて無駄話むだばなし
高たか照山てるやまの石熊いしくまが
神かみの言葉ことばに従したがひて
顯恩郷けんおんきやうより渡わたり來く
三あ五な教なひけうの宣傳使せんでんし
末子すゑこの姫ひめや捨子すてこ姫ひめ
ハラみなとの港みなとに上陸じやうりくし
テやル山またうげ峠のりこを乗越のりこえて
珍うづの都みやこに進すすみ行ゆく
それとちうの途とちう中ちゆうを待伏まちぶせて
二人ふたりの女め神かみ引ひつ捉とらへ
高たか照山てるやまの館やかたまで
連つれ歸かへれよとの石熊いしくまの
お指圖さしづなれど連日れんじつの
疲つかれに足あしも早痛はやいたみ
歩行ほかうも自由じゆうにならざれば
こここゝに一夜いちやを明あかさむと
語かたり合あふこそ不思議ふしぎなれ
吾等われら二人ふたりは耳みみさとく

一伍一什を聞終り

靜に上衣をぬぎ捨てて

髪ふり亂し聲を變へ

珍姿怪體現はせば

さて恐ろしや幽靈が

現はれたりと吾れ先に

雪崩を打つて逃て行く

カールとネ口の兩人は

少しも騒がず吾々に

向つて言葉をかけて言ふ

(これよりカール引繼いで歌ふ)

珍の都に現ませる

松若彦が神館

教に習ふカールなり

二人の女神が今茲に

現はれますとバラモンの

神の司や信徒が

中に交はり吾れも亦

一味の中に加はりて

様子を伺ひ助けむと

權謀術數皇神の

心に合はぬか知らね共

二人を助けてやうやうに

乾の瀧に來て見れば

豈計らむや石熊の

教司は瀧の邊に

大蛇の魂に魅せられて

石の如くに立ち給ふ
 神の冥罰忽ちに
 知死期の幕の下りしかと
 見棄ててゆかむと兩人の
 末子の姫は首をふり
 心の中を説き諭し
 御心持ちて天地の
 宣らせ給へば此は如何に
 慈愛の言葉に感歎し
 さも凄まじき形相は
 解脱の瀧に身を投じ
 あゝ惟神々々
 神の御徳ぞ畏けれ
 現はれ來りて石熊の
 心の中に喜びつ
 神の司に述べつれば
 仁慈無限の大神の
 四海同胞博愛の
 神に叶ひし太祝詞
 惡虐無道の大蛇まで
 熱き涙を流しつつ
 追つて優しく成り行きて
 後白雲と消えて行く
 神の御稜威ぞ尊けれ

かく歌ひ終り、石熊の請ひを容れて、一行五人は、テル山峠を登り、珍の都を指して進み行く。

(大正一一・八・一四 舊六・二二 松村眞澄録)

第四章 懷舊の歌(八四六)

末子姫は新にバラモン教の石熊の歸順を許し、捨子姫、カールの四人連れ、漸くにしてテル山峠の頂上に辿り着いた。

石熊「サア此處が有名なテル山峠の頂上で御座います。黄泉比良坂の大戦以前に、珍の都の正鹿山津見の神様の御娘、松竹梅の宣傳使が始めて宣傳の初陣に此處を、蚊々虎と云ふ天教山の木の花姫の神様の化神に導かれて、お通り遊ばし、松竹梅の宣傳使は遙々と珍の都を振り返り、兩親に訣別の歌を歌はれた所です。随分連山重疊として四方に擴がり、大西洋の波は霞の如く棚引き、何とも云へぬ絶景の地

點で御座います。茲で一つ汗を入れて、ボツボツ降る事に致しませうか」
末子「何とも云へぬ涼しい風が御座いますなア。勿體ない事乍ら、此處で少時休息して參る事に致しませう。どうせ二日や三日歩いたつて珍の都へは容易に行けませぬから……」

捨子「つい目の下に見えて居るようですが、随分里程があると見えますなア」
カール「モシ、末子姫様、松竹梅の宣傳使がここで懷郷の念に驅られて訣別の歌をよまれた舊蹟ですから、貴女も一つテルの國を別れるに臨み、得意の御言靈を以てお歌ひ下さつては如何でせう」

末子「オホ、お恥かしい事ですが、左様な結構な宣傳使の御歌ひになつた由緒ある地點と聞けば、歌はずには居られますまい。……捨子姫さま、あなたも一つ御歌ひになつたら如何でせう」
捨子「先づ貴女から先にお口を切つて下さいませ。私も驥尾に附して蛇足を添へますから……」

末子姫は山上の涼しき風に吹かれつつ、聲調ゆるやかに歌ひ始めたり。

神かみの都みやこのエルサレム 天使てんしの長をさと現あれませる

桃上彦ももがみひこの大神おほかみは 松竹梅まつたけうめの三柱みはしらの

いたいけ盛さかの娘むすめ子を 珍うづの館やかたに殘のこしおき

聖地せいちの混亂こんらん後あとにして 見みるもいぶせき船ふねに乘のり

命いのちからがら和田わだの原はら 漕こぎ出いで玉たまふ折柄をりからに

尊たふとき神かみの御惠みめぐみに 一いち度は龍宮りうぐうの金門かなど守もり

乙米姫おとよねひめに助たすけられ 悲かなしき月日つきひを送おくる折をり

天教山てんけうざんに現あれませる 神伊邪諾大神かむいざなぎのおほかみの

珍うづの御子おんこと現あれませる 日ひの出神でのかみに助たすけられ

琴平別ことひらわけの龜かめに乘のり 淤おど藤山津見やまづみと諸もろとも共に

此高砂このたかさこに安着あんちやくし 珍うづの都みやこに出いでまして

三五教あななひけうを廣ひろめまし 珍山峠うづやまたうげを乗越のりこえて

心こころの空そらもハルの國くに 鷹取別たかとりわけの守まもりたる

ハルの城下じやうかに出いでまして 數多あまたの敵てきに取卷とりまかれ

所構はず突き刺され
沙漠の中に埋められ

命カラガラハルの國
逃げ出でまして珍山の

谷間に湧き出る温泉に
病を養ひゐます折

淤滕山津見や蚊々虎の
神の司に巡り會ひ

駒山彦や五月姫
一行五人は天雲の

山の尾の上を打渉り
大蛇の船に乗せられて

やうやうウツの都まで
歸らせ玉ひて五月姫

珍山彦の媒酌に
鴛鴦の衾の契をば

結び玉ひし芽出たさよ
五月五日の夕間暮

聖地を後に三人の
松竹梅の愛娘

訪ね來りて親と子の
嬉しき對面遊ばせし

珍の都は白雲の
彼方に幽かに見えにけり

茲に三人の姉妹は
神の教を傳へむと

草鞋脚絆に身をかため
父の命や母命

ふたり 二人に暇を告げ乍ら

みたり 三人の司に伴はれ

この 此れの峠に登りまし

ちち はは 父と母とに訣別の

なご 名残を惜しみ玉ひたる

こころ 心の色もテル山の

むかしおも 昔思へばなつかしや

わらは おな やをとめ 妾も同じ八乙女の

よわ 弱き身にて齋苑館

しづ 鎮まりゐます父上の

ひざもと はな 膝元離れて遙々と

メソポタミヤの顯恩郷

それより進んで波斯の國

をしへ ひら をりから 教を開く折柄に

バラモン教の人々に

とら 捉まへられて和田の原

たよ 便り渚の捨小舟

やたりをとめ 八人乙女はちりぢりに

かみ 神の仕組か白波の

うへこ 上漕ぎ渡る悲しさよ

かみ 神の恵の幸はひて

しほ や 汐の八百路も恙なく

まがみ 魔神を拂ふハラ港

く に テルの國をばスタスタと

ひがし 東を指して進み来る

やまたうげ テル山峠の山麓に

あななひけつ 三五教の神司

つみ 罪もカールの神人に

思ひ掛けなく巡り合ひ

乾の瀧に立寄りて

其壯大を賞めたる

時しもあれや瀧の上に

さも凄じき目を見はり

大口開けて睨み居る

醜の大蛇に魅せられて

巖の片方に石熊の

神の司が直立し

苦み玉ふ憐れさよ

直日に見直し聞き直す

神の御前に村肝の

心を捧げて願ぎ奉る

吾言靈は天地に

忽ち通ひて石熊の

神の宮居は自由自在

大蛇は直に解脱して

雲を霞と消え失せぬ

心も固き石熊が

赤き心を推し測り

神の大道を共々に

傳へ行かむと宣傳歌

歌ひて漸く山頂に

登りて後を眺むれば

山河草木麗しく

神の恵の充ち足らひ

天國浄土の有様を

隈なく現し玉ひける

あゝ惟神々々 神の恵の著じるく

教の花のいと清く 吾等は茲にやすやすと

珍とテルとの國境 四方を見おろす雲の上へ

立ちしは神の御恵みぞ さは去り乍ら吾父の

神の尊は今何處 あが姉妹の五十子姫

愛子の姫を始めとし 五人の姉は如何にして

此世を過ぐさせ玉ふらむ 行方も知らぬ波の上

雲の彼方を打眺め 朝な夕なにあが父や

姉の命の消息を 思ひ煩ふあが心

いつしか晴れむ常暗の 帳は開けて天津空

月日も清くテル山の 山の尾の上の風清く

心樂き松の世の 親子姉妹一時に 神のまにまに高砂の

嬉しき顔を五六七の世 神の教に仕へなむ

此神島に身を忍び

あゝ惟神々々
かむながらかむながら

御靈幸はひましませよ
みたまさち

と述懐の歌を歌ひ、恰好な腰掛岩の上に身を托し、汗を拭ふ。捨子姫は風に面を吹かれつつ、さも愉快げに四方を見晴らし乍ら、體を東西南北に回轉しつつ、歌ひ始めたり。

東や西や北南
ひがしにしきたみなみ

四方の國型眺むれば
よものくにがたなが

大海原に浮びたる
おほつなばらうか

高砂島の名に恥ぢず
たかさごしまな

太平松や楠堅木
たいへいまつくすかたぎ

槻の大木は青々と
つきのおほきはあをあを

見わたす限り山々に
みかぎやまやま

茂り合ひたる麗しさ
しげあはうるは

天國淨土も目のあたり
てんごくじやうどま

眺めて暮す心地して
ながくらこち

旅のうさをも打忘れ
たびうちわす

神素盞鳴大神の
かむすさのをのおほかみ

珍の御子と現れませる
うづおんこあ

姿優しき末子姫
すがたやさすゑこひめ

主人の君と仰ぎつつ
あるじきみあひ

何れの里か白雲の
いづさとしらくも

空を眺めて海の上

やうやうここに渡り来て

月日も清くテル山の

尾の上に登りて眺むれば

吹來る風も芳ばしく

木々の梢は花盛り

味よき木實は限りなく

枝もたわわに充ち足らひ

飢ゆる事なく吾々は

喉も乾かず樂みて

常世の春に會ふ心地

天地を造り玉ひたる

元つ御祖の大神の

開き玉ひし三五の

教の司と任けられて

何處を果てとも長の旅

進み來るぞ樂けれ

あゝ惟神々々

神の御靈の幸はひて

世人の爲に玉の緒の

生命を捨子の神司

末子の姫の側近く

仕へ奉りて永久に

太き功績を立てまつり

神の御子と生れたる

あが天職をまつぶさに

盡させ玉へ天津神

國津神たち八百萬

殊ことに尊たふとき國くに治立はるたちの
嚴いづの尊みことや豐國とよくに姫ひめの

瑞みづの尊みことの御前おんまへに
誠まことをこめて願ねぎまつる

あゝ惟かむながら神かみ々々
神かみの御靈みたまの幸さちはひて

天教てんけうざん山さんに現あれませる
天照あまてらします大神おほかみの

珍うづの御前みまへに逸いちはや早く
八岐やまた大蛇をろちを言こと向むけて

神素かむすさ盞の鳴を大神おほかみが
一ひと日ひも早はやく功績いさをしを

高天原たかあまはらに參まゐり上のり
大蛇をろちの吞のみたる村雲むらくもの

劍つるぎを手て早はやく大神おほかみの
御前みまへに奉まつらせ玉たまへかし

瑞みづの御靈みたまの大神おほかみの
八人やたりを乙女をとめの末すゑの子こと

現あれ出いでませる末子すゑこひめ姫ひめ
かしづき奉まつる捨子すてこひめ姫ひめ

新あらたに仕つかへし石熊いしくまの
神かみの司つかさや三五あななひの

道みちを歩あゆめるカール迄まで
厚あつく守まもらせ玉たまひつつ

五み六ろ七くの御世みよの神政しんせいに
清きよく使つかはせ玉たまへかし

神かみは吾等われらと俱ともにます
吾等われらは神かみの子こ神かみの宮みや

雲井くもゐの上うへに千木ちぎ高たかく

仕つかへまつりて宮柱みやばしら

太ふとしく立たてて大神おほかみの

御前みまへに清きよく復かへり言こと

詳つぶさに申まをさせ玉たまへかし

旭あさひは照てるとも曇くもるとも

月つきは盈みつとも虧かくるとも

高砂島たかさごしまは沈しづむとも

曲津まがつは猛たけく攻せめ來くとも

神かみに仕つかへし吾身わがみたま魂たま

五み六ろ七くの御世みよの末迄すゑまでも

變かはらざらまし神かみの前まへ

慎つしみ誓ちかひ奉たてまつる

さはさり乍ながらコーカスの

山やまにゐませし素盞すさのを鳴なの

神かみの尊みことは今何處いまいづこ

日ひの出別でのわけや言依別ことよりわけの

神かみの命みことは如何いかにして

道みちに盡つくさせ玉たまふらむ

五い十そ子の姫ひめや愛あい子こ姫ひめ

英子ひでこの姫ひめは今何處いまいづこ

別わかれて程ほど經へし吾々われわれは

音おとづる由よしも波なみの上うへ

清きよく泛うかべる高砂たかさごの

テやル山やまたうげ峯ちやうじやうの頂上ちやうじやうに

後あと振ふり返かへり振ふり返かへり

哀別離あいべつりく苦くの感深かんふかし

あゝ皇神すめかみよ皇神すめかみよ

御靈みたまのふゆを幸さちはひて 一日ひとひも早くはや大神おほかみに
吾等われらを會あはせ玉たまへかし 女心をんなこころの一筋ひとすぢに
遙はるかに拜をがみ奉たてまつる あゝ惟かむながらかむながら神々々
御靈みたま幸さちはひましせよ〆

と歌うたひ終をはり、これより末子すゑこひめ姫ひめを先頭せんとうに一行いっかう四人よにんはテル山やまたつげ峠つげを東ひがしに降くだり行ゆく。

(大正一一・八・一四 舊六・二二 松村眞澄録)

(昭和一〇・六・九 王仁校正)

第二篇

珍野うづのかんか瞰下

第五章 下坂の歌（八四七）

一行四人は初夏の炎天に曝され乍ら、吹き来る涼風に衣の袖を翻しつつ、岩石起伏の急坂を、アプト式に一足々々爪先に力を入れ乍ら降り行く。

少しく緩勾配の山路に差かかった。新に歸順したる石熊はテル山峠の山上にて末子姫、捨子姫の驥尾に附し述懐歌を歌はむと、心中深く期する所ありしが、意外にも末子姫の休息を早く切り上げて坂を降り始めしより、止むを得ず沈黙を守り、急坂を降りつつあつた。今しも稍緩勾配の安全なる坂道に差かかりたるを機會に、歩み乍ら足拍子を取り、石熊は述懐の歌を唄ひ始めたり。

あゝ面白い面白い テル山峠の頂上に

古今無雙の二人のナイス 天津乙女の降來か

木の花姫の出現か 木石ならぬ石熊も

バラモン教の御教を 固く守りて今迄は

巖いはほの如ごとく頑強ぐわんきやうに
 神かみの教をしへの信徒しんとら等に
 此この堅藏かたざつも三五あななひの
 優やさしき姿顔すがたかんばせ容に
 さはさり乍ながら吾々われわれは
 高根たかねに咲さける松まつの花はな
 天津御空あまつみそらの星影ほしかげを
 極きはめて至難しなんの事ことである
 御靈みたまの頼たよりを蒙かづむりて
 此この石熊いしくまが心根こころねを
 怪けしき怪あやしき戀こひの暗やみ
 早はやく征服せいふくさせ玉たまへ
 別べつに變かはりしこともなし
 神かみの教をしへに比くらぶれば
 教をしへを楯たてにバラモンの
 化石くわせきしたかと笑わらはれた
 神かみの教をしへに入信にふしんし
 心こころの動うごいた恥はづかしさ
 素もとより賤いやしき身みの上うへぞ
 如何いかに憔あこがれ慕したうとも
 竿さきの先さきにてがらつよな
 あゝ惟神かむながらかむながら々々
 三五あななひけう教まっろに服従まつろひし
 嚴きびしく鞭撻べんたつなし玉たまひ
 忍しのびて來きたる曲鬼まがおにを
 バラモン教けうの神かみの法のり
 さは去さり乍ながら三五あななひの
 どこやら一ひとつ物もの足たらぬ

吾がバラモンの主唱する 靈主體從の御教は

神に貰うた肉體を 損ひ破ること許り

普く世界の人々を 大事の大事の神徳に

助くる道に缺けてゐる あゝ惟神々々

神の教は皆一つ 只實行と不實行の

差別に依りて變るのみ 高天原を退らはれし

此世を救ふ生神の 尊き御子と現れませる

心も澄める末子姫 世人の爲に身を捨てて

教を開く捨子姫 か弱き女の身乍らに

遠き山河踏みさくみ 長き潮路を打渡り

はるばるここにテル山の 雲突く峰に現はれて

神の御爲世の爲に 盡させ玉ふ尊さよ

吾は常世の目の國に 生れて茲にバラモンの

神の教に入信し 鬼熊別に導かれ

バラモン教の御教を
誹り走りに聞き覚え

高照山の山麓に
教の館を造りつつ

天地の間此道に
優りし教はあらざらむ

實にも尊き教ぞと
心も身をも打任せ

身もたなしらに朝夕に
沐雨櫛風の勞を積み

教は日々に天津日の
豊榮昇ります如く

月日と共に榮えけり
さはさり乍らバラモンの

教に一つ疵がある
生血を出して大神の

御目に示し犠牲の
誠と思ひ謬りし

其醜業に信徒は
朝日に氷の解くる如

次第々々に衰へて
法燈消えむとなしければ

茲に一計案出し
テル山峠に名も高き

大蛇の棲處と聞えたる
さも恐ろしき大瀑布

人の恐れて近よらぬ
乾の瀑に朝夕に

しげしげ通ひて水垢離 取りて身魂を清めつつ

二年計り荒行を 勵み居たるを何時しかに

四方の國々知れ渡り 吾熱誠に感歎し

又もや枯木に花咲きて 教は高く照りわたる

高照山の聖場は 殘枝忽ち花開き

いと賑はしくなりにけり 此機を逸せずバラモンの

教を四方に傳へむと 珍の國まで教線を

張らむとすれば國彦の 御子と生れし神司

松若彦の熱誠に 三五教の信仰は

雷の如鳴り渡り バラモン教に相對し

侮り難き教敵と 今は全くなりけり

三五教が倒れるか バラモン教が倒れるか

生死の境と肝膽を 碎いて茲に一計を

ひねり出して神司 ウヅの都の三五の

をしへ やかた
教の館にさし廻し

あななひけう
三五教の信徒と

いつは
伴らせつつ日に夜に

うちと やうす
内外の様子を窺ひつ

よか
善らぬ事と知り乍ら

けんぼうじゆつすう
権謀術數の有り丈を

いままでつく
今迄盡し來りける

かむすさのをのおほかみ
神素盞鳴大神の

うづ
珍の御子と現れませる

すゑこ ひめ
末子の姫の主従が

テルの國へと出でまして

やまたうげ
テル山峠を打渉り

すす
進み來ますとバラモンの

みち
道の根本靈場より

むげんれいわ
無言靈話をかけ來る

よついで
容易ならざる出來事と

しんにんあつ
信任厚き神司

いさく、カールを始めとし

シーナ、チールやネ口五人

やまたうげ
テル山峠の西麓に

さしつか
差遣はして兩人の

みち
道を遮り高照の

やま やかた
山の館に連れ歸り

そのもくてき
其目的を達せむと

いぬぬ たぎ
乾の瀧に現はれて

いつ な
何時も慣れたる水垢離

いっしんふらん
一心不亂に祈る折

たちま
忽ち身體強直し

ビクともならぬ苦さに

空を仰いで瀧の上

見上ぐる途端に恐ろしき

醜の大蛇が口を開け

目を怒らして眺めゐる

心戦き體縮み

進退維に谷まりて

覺悟の臍を固めたる

時しもあれや末子姫

二人の伴を引連れて

現はれ來まし三五の

清き尊き言靈を

宣らせ玉へば曲神は

雲を霞と消え失せぬ

あゝ惟神々々

末子の姫の來らずば

吾れは蛇腹に葬られ

漸く茲まで築きたる

バラモン教は忽ちに

嵐に木葉の散る如く

崩壊せむは目のあたり

吾は尊き生命を

實にも畏き大神の

珍の御子に助けられ

天下無二なる果報者

思へば思へば三五の

神の教は大空に

輝き亘る日月の

相當したる、聲調も碌に整はぬ歌を唄ひ乍ら、三人の後に従ひ下り行く。

ドツコイシヨウ ドツコイシヨウ テル山峠は高い山

岩石起伏の谷道を 危ない危ないアプト式

力を入れる指の先 まかり違へば轉倒し

虻蜂取らずになるだらう 皆さま氣をつけなさりませ

敵の中にもドツコイシヨ 味方が隠れて居りまする

オツトにた危ないぞ 味方の中にもドツコイシヨ

敵が隠れて居るである 人間萬事塞翁の

馬と聞いたがドツコイシヨ コラ又危い石車

乗つて怪我をばなさるなや ドツコイドツコイ災の

後にはキツと福が来る 福が來たとて油斷すな

油斷をすれば此通り キツい坂道ドツコイシヨ

下つて行くよな者ぢやぞえ 三五教の神司

松若彦の命令で
高照山の神館

飛ぶ鳥までも落すよな
勢強き石熊の

ドッコイドッコイ ドッコイシヨ
オット危い石車

お側仕ひとなりすまし
一伍一什を偵察し

隙行く駒のドッコイシヨ
悪の企みを細々と

珍の館に報告し
今迄来たのはドッコイシヨ

天の與へに違ひない
罷り違へばバラモンの

石熊さまに嗅出され
五體も何もグタグタに

バラモン教とバラされて
惜しき命の安賣りを

やつて居つたか分らない
ドッコイシヨウ ドッコイシヨウ

知らぬが佛の石熊さま
バラモン教に一心に

なつて御座つた其爲か
間者となつて入り込みし

カールとネ口の兩人を
オット危い、又迂る

此上なき者と愛しつ
重く用ゐて下さつた

深い情に絆されて
三五教の信仰も

時々怪しくなつて来た
一向私もバラモンの

神の教に入信し
一つ腕をば研き上げ

珍の都の人々を
アフンとさしてやらうかと

副守護神が囁いて
ドツコイシヨ ドツコイシヨ

危い危い誘惑の
手を伸ばしたる事もある

あゝ惟神々々
神に貰うたドツコイシヨ

直日の靈魂が輝いて
オツトドツコイそりや悪い

誠の神の御教と
偽り神の教とを

神に貰うたドツコイシヨ
稜威の靈に省みて

必ず迷ふこと勿れ
天國地獄の國境

胸に手を當て思案せと
何か知らぬが囁いた

アイタタ、ドツコイ躓いた
拇指小指をしたたかに

尖つた岩に突きあてて
千尋の谷間に危くも

すべ 迂りおちむとドッコイシヨ ドッコイドッコイ ドッコイシヨ

かたむ 傾く身體を手を廣げ 中心取つてドッコイシヨ

からだ たてなほ おかげで體が立直り ヤツと命を取り止めた

かむながらかむながら あゝ惟神々々 神程尊い方はない

すゑこ モウシ末子のお姫さま 捨子姫さまお二方

あしもと ようじん 足許用心なさりませ ズイ分高い石熊が

さかみち ゴロゴロゴロと坂道に 轉かしてやらうと待つてゐる

ゆだん ドッコイ油斷は大敵ぢや 人の心は分らない

い とは云ふものの石熊さま お前の事ではない程に

わる き 氣を悪なさつて下さるな 躓く石も縁の端

いぢしゆ 一樹の蔭の雨宿り 一河の流れを汲むさへも

いんねん 深い因縁あればこそ お前の館に住み込んで

あさばん おな 朝晩同じ物を食ひ 水も洩らさぬ親切を

つく 盡して貰うた其時の 私心の苦しきは

口くちで言いふよな事ことでない

一層いっそうお前まへに眞實しんじつを

心こころの底そこから打明うちあけて

白状はくじやうせうかと思おもうたが

ドッコイドッコイ待まて暫しばし

松若彦まつわかひこの神司かむつかさ

私わたしを男をとこと見込みこんでの

最上破格さいじやうはかくの御信任ごしんにん

無むにしちやならぬとドッコイシヨ

再ふたび心こころを立直たてなし

猫ねこを被かぶつてやつて來きた

カールは腹はらのドッコイシヨ

汚きたい奴やつぢやと思おもはずに

今迄いままでお前まへを詐いつはつた

心こころの罪つみを赦ゆるしてよ

ドッコイドッコイ其代そのかはり

お前まへの深ふかい計はからひで

ウヅの都みやこに遣つかはした

間者かんじやは幾人いくにんあるとても

末子すゑこの姫ひめの御前おんまへに

俺おれが代かはつてお詫わびして

綺麗きれいに綺麗きれいに帳消てうけしと

流れ勘定かんぢやうにして貰もらふ

皆みなさま危あぶない足許あしもとに

氣きをつけなされよ坂路さかみちは

ますます急きふになつて來きた

ウツカリすべにたにそこつて谷底たにそこへ

轉落てんらくしたら大變たいへんだ

胸むねがドキドキ騒さわぎ出す
三五教あななひけうの神様かみさまよ

どうぞ一行いつかう四人よにん連れ
此急坂このきふはんを恙つつがなく

あなたの厚あつき御守みまもりに
通過つうくわをさせて下くださんせ

偏ひとへに御願おねがひ申まをします
ドッコイドッコイドッコイシヨ

アイタタ、ドッコイ又また轉こけた
あんまり調子てうしに乘のり過ぎて

知らずに乗のつた石車いしぐるま
背せ中は少すこし打うつたれど

生命いのちは別状べつじやうはない程ほどに
皆みなさま安心あんしんしておくれ

ウントコ、ドッコイドッコイシヨ
降くだれば廣ひろきウツの國くに

青野ケ原あをのがはらの右左みぎひだり
青葉あをばの蔭かげに身みを休やすめ

ゆつくり一服いっぶく致いたしませう
ホントに長ながい峠たうげぢやなア

グツグツしてると日ひが暮くれる
さうだと云いつて無茶苦茶むちやくちやに

走はしつて降くだれば又また轉こける
坊主ぼうずと尼あまならケがないが

俺等おいらの様な長髪ちやうはつは
中々なかなか此道このみちや物騒ぶつそうな

あゝ惟神かむなドッコイシヨ
御靈みたま幸さちはひましませよ

旭あさひは照てる共とも曇くもる共とも

月つきは盈みつ共とも虧かくる共とも

假たとへ令だい大地いちは沈しづむとも

再ふたびたこんな山路やまみちを

私わたしは通とほろと思おもはない

本ほん當たうに危あぶない坂さか道みちぢや

神かみの御おん爲ため世よの人ひとを

助たすける道みちと思おもやこそ

音おとに名な高たかき此この坂さかを

登のぼりつ下くだりつ致いたすのだ

天てん地ちの神かみも吾われ々われが

此この眞ま心こころを御ご照せう覽らん

遊あそばしまして世よに高たかく

譽ほまれを殘のこさせ玉たまへかし

淤おど滕やま山づみ見みや駒こま山やまの

彦ひこ命のみことや珍うづ山やまの

神かみの司つかさの通とほりたる

此この山やま坂さかを改あらためて

二ふ人たりの美び人じんに導みちかれ

黄こ金かねの橋はしを渡わたるよな

危あぶない氣き分ぶんで下くだりゆく

天てん教けう山ざんではなけれ共ども

木この花はな匂におほふウうヅづの國くに

花はなの都みやこにドどツつコこイいシしヨよ

ドどツつコこイいドどツつコこイい

ドどツつコこイいシしヨよ

上のほり行ゆくこそ樂たのしけれ

あゝ惟かむ神ながら々かむ々ながら

早はや言こと靈たまの油あぶらきれ

停電するより仕様が
ない 二人の親が
遣みとて

残して呉れた膝栗毛
どうやら怪しくな
つて来た

そこには丁度恰好な
腰掛岩が竝んで
る

皆さま一服せうぢや
ないか 叔母が死
んでも直休み

暑中休暇の避暑旅行
青葉の蔭に横たは
り

息をついたら如何
である あゝ惟神
々々

御靈幸はひましま
せよ

と一歩々々、九十九折りの石だらけの危なき急坂を下つて来たが、
勾配の坂の左側に腰掛の如く竝んでゐる天然椅子に一行四人は腰を
卸し息をつぎ、汗を涼風に拭ふ。

(大正一一・八・一四 舊六・二二 松村眞澄録)

第六章 樹下の一宿（八四八）

四人は天然椅子の岩の上に端座し、稍少時息を休めた。捨子姫は、

「カールさま、随分偉いメートルを上げましたねえ。おかげで面白く急坂を知らぬ間にここまで下つて来ました。歌と云ふものは本當に旅には缺く可からざるものだと感じました。面白く節をつけて歌つて下さつたおかげで、重たい足も體も躍動致しまして大變に愉快でしたワ」

「ハイ私のカールい口で出鱈目を喋りました。其御神徳で貴女の御足がカール動きましただらう、アハ、ハ、ハ、併し石熊がゴロゴロして居るので、邪魔になつて、随分目を使はれたでせう」

石熊「何だか知らぬが、此急坂に團子石かカール石のやうな物がゴロゴロしてをつて、カールはづみには足も運べず、あまり可笑しい歌で、膝坊主まで笑つて居ましたよ、石原に藥罐を引摺る様な聲で、ズイ分有難迷惑を感じました。アハ、ハ、ハ、」

カール「有難迷惑とはチツと口が悪いぢやありませんか。お前さまはヤツパリ意地苦根が……オツトドッコイ 石熊が善くないと見えますなア」

石熊「サア皆さま、又ボツボツとテクリませうか」

末子「ハイそろそろと参りませう。……カールさま、どうぞ又頼みますよ」

カール「オイ石熊さま、如何だい、能く持てたものだろ。お前の歌はどうだったい、見つともない、二人のナイスに一寸ホの字とレの字だったなどと、亡國の哀音を駄句つたぢやないか。チツとしつかりして貰ひませうかい」

石熊「やかましう云ふな、佯らざる情の執着だ」

カール「兔も角石熊さまの改心歸順で、此カール大宣傳使も心の底より祝着に存ずるワイ、アツハ、。サア又言靈車を運轉しますから、……一二三、全體進

めツ

石熊「アハ、、、仕方のない男だなア……サア姫様、御立ち遊ばせ、お伴を致しませう」

カール「アハ、、、變ればカール世の中だなア。今迄は石の様な無情漢で女を

見れば苦蟲をかみ潰したやうな面構へをして御座つた、バラモン教の教主様が鰐口を俄におチヨボ口にしたり、團栗目を細うしたり遊ばして……サア姫様お立ち遊ばせ、お伴を致しませう……ナンノカンノつて、抱腹絶倒の至りだ。餘り姫様のスタイル許りに氣を取られてみると、それこそ坂路で轉覆絶倒せなくてはならなくなるよ。困つた唐變木が道伴れになつたものだ。併し枯木も山の賑ひだ、ないよりましかい」

末子「あのマア、カールさまのお口の悪いこと」

石熊「いゝえ、此カールは口が善過ぎて、よく轉るのですよ。百舌といふ鳥の様な男ですから、何れ地獄へ往つたら、釘抜の御厄介になる代物ですよ。ア

ハ、ハ、ハ、ハ」

捨子「オホ、ハ、ハ、ハ、サアいよいよ發足致しませう。今度は妾が猿田彦となつて、お先へ参ります」

と先に立ち、急坂を下り行く。調子に乗つてカールは又もや一歩々々拍子を取り、ヤツコス神が六方を踏むやうなスタイルで唄ひ出した。

カール^{カール} ウントコドツコイ、ドツコイシヨ 石熊^{いしくま}だらけの山路^{やまみち}を

末子^{すゑこ}の姫^{ひめ}や捨子^{すてこ}姫^{ひめ} 二人^{ふたり}のお方^{かた}の御伴^{おとも}して

崎^き嶮^くたる坂路^{さかみち}下^{くだ}り行く^{ゆく} 日輪^{にちりん}様^{さま}はカンカんと

頭^{あたま}の上^{うへ}にテルの國^{くに} テル山^{やまたうげ}峠^{つげ}の急坂^{きふはん}を

オツトドツコイ危^{あぶな}いぞ 又^{また}石熊^{いしくま}に乘^のりました

ゴウゴウ云^いふのは谷川^{たにがは}か ジヤンジヤン吐^{ぬか}すな油^{あぶら}蝉^{せみ}

ドツコイシヨウ ドツコイシヨウ 汗^{あせ}も脂^{あぶら}も一^{ひと}絞^{しぼ}り

うちのお嬢^{かか}がドツコイシヨ 夜^よの目^めもねずに親^{しん}切^{せつ}に

縫^ぬうてくれたる單衣^{ひとへもの} ドツコイドツコイびしよ濡^ぬれに

なつて了^{しま}うたドツコイシヨ 二人^{ふたり}のナイスが此^{この}通^{とほ}り

お先^{さき}に立^たつてドシドシと お下^{くだ}り遊^{あそ}ばすスタイルは

天^{あめ}の八重^{やへ}雲^{くも}かき分^わけて 棚^{たな}機^{ばた}姫^{ひめ}の天^{あま}降^{くだ}り

遊^{あそ}ばす様^{やう}ないさぎよさ 鼻^{はな}息^{いき}荒^{あら}くフウフウと

弱^{よわ}り切^きつたる石熊^{いしくま}の 其^{その}足^{あし}竝^{なみ}は何^{なん}のザマ

一丈二尺の禪を かいた手前もあらうぞよ

昔の神代にウツの國 桃上彦の御娘

松竹梅のドッコイシヨ オット危い躓いた

花を欺く宣傳使 淤滕山津見や駒山彦の

ドッコイドッコイすさび男の お先に立つて蚊々虎の

神の化身と諸共に 此急坂をドシドシと

登つてハラの港まで お出でなさつた事思や

きついと云つても下り坂 何の苦い事あるか

ウントコドッコイ、ドッコイシヨ 意地くね悪い石熊が

そこらにゴロゴロ轉げてる 皆さま氣をつけなされませ

若し過つて仰向けに 玉の御舟を坂道に

ドッコイ ドッコイ ドッコイシヨ オット失禮コリヤ失敗うた

調子に乗つて舟のこと 車の梶を取り外し

知らず知らずにドッコイシヨ 脱線振を發揮した

それに付けてもネ口の奴やつ 何處どこに如何どうして居ゐるだるか
 シーナ、チールやイサクをば 甘うまくドツコイ、チヨ口まかし
 二人ふたりのナイスを助けむと 従ついて行いたのは氣きの毒どくぢや
 石熊いしくまさまが三五あななひの 神かみのお道みちに歸順きじゆんして
 當たうの仇敵かたきと狙ねらひたる 二人ふたりのナイスの從者ともとなり
 ウヅの都みやこへドツコイシヨ お伴ともをしたと聞きいたなら
 イサク、シーナ、チールの奴やつ どれ丈だけビツクリするであらう
 あゝ面白おもしろい面白おもしろい 昨日きのふに變かはる今日けふの空そら
 晴天せいいてん忽たちまち雨あめとなり 蒼海さうかい變へんじて土つちとなる
 天候てんこう忽たちまち激變げきへんし 敵てきの陣地ぢんちに降參かうさんし
 鉾ほこをおさめて旗はたを卷まき ドツコイ ドツコイ瘦犬やせいぬが
 甘あまい顔かほした旅人たびびとに 尻尾しつぽをふつてドツコイシヨ
 従ついて來くるよなスタイルで バラモン教けうの神司かむつかさ
 お伴ともをしたと聞きいたなら さぞやビツクリ仰天ぎやうてんし

肝玉きもたま天てんに飛とびあがり
ドッコイ ドッコイ 辜丸きんたまは

忽たちまち洋行やうかうするである
ドッコイ、辻すべつたアイタ、

圓轉ゑんてん滑脱かつだつ遲滞ちたいなく
甘うまく轉ころんだ口車くちぐるま

序ついでにモ一ひとつ石車いしぐるま
油斷ゆだんのならぬ下くだり坂ざか

皆みなさま確しつかり頼たのみます
ウントコドッコイ、危あぶないぞ

これから少すこし下くだつたら
八岐やまたの大蛇をろちの乾兒こぶん等らが

潛ひそんで居ゐると聞きこえたる
巽たつみの池いけが青々あをあをと

鏡かがみの様やうに光ひかつてる
噂うはさにきけばドッコイシヨ

乾いぬぬの池いけの大蛇をろち奴めが
片割かたわれなりと云いふ事ことだ

モウシ末子すゑこのお姫様ひめさま
一層序いつそうついでに立寄たちよりて

大蛇をろちの靈みたまを言靈ことたまの
威力ゐりよくに征服せいふく遊あそばして

ドッコイ ドッコイ 行掛ゆきがけの
功名手柄こうみやうてがらを遊あそばせよ

私わたしが案内あんない致いたします
臆病風おくびやうかせに襲おそはれた

石熊いしくまさまは何どうか知しら
私わたしはどしても行いて見みたい

あなたの清き言靈は 邪神惡鬼も忽ちに

ドツコイ ドツコイ危ないぞ 危ないきつい道だなア

キツと歸順をするである 又と得られぬ此機會

平に御願申します アルゼンチンの國人が

日夜に悩む惡神の 災除かせ玉ひなば

貴女はウツの神柱 國民一同悦服し

宏大無邊の神徳を 仰ぎまつつて三五の

神の御徳になづくだろ あゝ惟神々々

神の心を發揮して 必ず斷行願ひます

これぞカールが一生の 生命かけての御願ひ

謹み畏み御二方 珍の御前に願ぎまつる

あゝ惟神々々 御靈幸はひましませよ

と歌ひ了り、三人の後から蚤取眼で、一歩々々、氣を付け乍ら、馬の背を立てた

様な、細き険しき石原路を、右に左に體をかはし、千鳥が坂を下る様なスタイルで跟いて行く。元來此男は少しく兩足に、生れ乍ら長短があるので、下り坂には非常に困難を感じ、一歩々々拍子を取らねば容易に歩めないのであつた。

漸くにして下り八里の急坂を黄昏る頃、麓に下り、樟の森に、夜露を凌ぎ、一行四人息を休めて、又もや話に耽る。

末子「おかげ様で樂に難關を越えて参りました。言靈の徳と云ふものは、本當に結構なものですなア」

カール「御尤も千萬です。特に私の言靈はハーモニーがよく取れますから、天地神明も感動遊ばし、焼きつく様な日輪様もとうとう、吾々を可愛がつて、地平線下にお隠れになつたでせう」

石熊「アハ、何を吐すのだ。暮れる時が來れば、貴様の言靈がなく共、日輪様は勝手にお入り遊ばすのだ。餘り調子に乗つて自惚をすな」

カール「コリヤ一寸景物だ。餘つ程融通の利かぬ馬鹿正直な男だなア。長短宜しきを得て社會に處するのが人生の最も貴ぶべき手段だ。これではバラモン教の教

主も駄目だなア

石熊「お前の如うに、片つ方の足が短く出来て居る人間は、それや又採長補短がないのだから、到底お前の眞似は出来ないよ」

カール「馬鹿言うな。片足が短いのだない、片足がお前達よりは長いのだ、ア

ハ、ハ、ハ、

石熊「負ん氣の強い、跛理窟を云ふ男だなア。コーカス山だないが、ビツコス神がヤツコスの六方を踏むと云ふスタイルで、急坂を下るのだから、ズイ分見てゐると滑稽だつた」

捨子「ホ、ハ、ハ、ハ、あなた方と旅行して居ると、随分愉快ですなア」

カール「そら其筈ですよ。【ゆかい】も現界も神界も一目に見すかしたチーチャーだから、當然の歸結ですワ。アハ、ハ、ハ、」

石熊「歸結も轉けつもあつたものかい。コレつぱかしの急坂に、こけつ轆びつと云ふ豪傑だからなア」

カール「ケツはケツだが、ジャンチャヒエールの英傑だ。人民の分際として、ケ

ツケツ云ふない」

末子「オホ、、、顯恩郷を出發以來、今日位愉快な思ひをした事はありませぬ。

……併しカールさま、あなた最前巽の池とかに、乾の池の大蛇の片割れが潜んでゐて、國民に害を與へるとか仰有いましたねえ」

カール「ハイ、是から三里許り南へ参りますと、大變な深い廣い池が御座います。そこに大蛇の魔神が何時の程にか棲處を致し、通りかかりの若い男を見ると、直に妙齡の美人と變化し、甘く偽つて池の中へ連れ込み呑んで了ふのです。大蛇の爲に生命を取られた者は幾百人あるか分りませぬ。それで貴女に一つ御願したいと思ふので御座います」

末子「それは面白う御座いませう。今晚はここで雨宿りを致しまして、明朝早々巽の池へ立寄り、言靈戦を始めて見ませう。……捨子姫さま、あなた如何思ひま

すか？」

捨子「至極贊成です。明日の日を樂しんで、今宵は此處で待つことに致しませう」
カール「早速の御承知、有難う御座います。……オイ石熊さま、お前は又強直状

態たいになつて了しまうと、氣きの毒どくだから、免除めんぢよする事ことにしてやらう」

石熊いしくま「モシ、お二方様ふたかたさま……どうぞ私わたくしも見學けんがくの爲ため、隨行ずゐかうさして下くださいませぬか」

末子すゑこ「どうぞ跟ついて來きて下ください」

石熊いしくま「有難ありがたう御座ございます。私わたくしも明日あすは千騎せんき一騎いつきの活動くわつどうを致いたしまして、カールさま

に一つビツクリさしてやらねばなりませんア」

捨子すてこ「さうなさいませ」

茲ここに四人よにんは楠くすのきの空そらを封ふうじたる密林みつりんに雨露うろを凌しのぎ夜よを明あかすこととなりける。

(大正一一・八・一四 舊六・二二 松村眞澄録)

第七章 提燈ちやうちんの光ひかり (八四九)

楠くすのきの森もりのこかげに蓑みのを布しき、木この間まをもるる九日ここのかの月つきの光ひかりを浴あび乍ながら、早速さつそく眠ねむりもならず、今日けふ一日いちにちに起おこりし不思議ふしぎの運命うんめいを物語ものがたりつつ、夜よを更ふかした。はし

やぎ切つたカールは末子姫、捨子姫の渡來に何となく心欣々として勇み立ち、又
バラモン教の石熊教主が苦もなく、三五教に歸順した嬉しさに心氣興奮して眠ら
れぬ儘に、日頃の饒舌車を運轉し始めた。
空に飛ぶ天狗の鼻の高照山の谷底に、教の館を構へつつ、バラモン教を遠近に、
開いて人を導きし、心も固き石熊が、館に仕へし神司、中にも分けて男振り、人
に優れたカールさま、あまたの女にチャホヤと、持離されて朝夕に、姿をうつす
水鏡、心の波も静まりて、教の庭に穿ちたる、鏡の池に立向ひ、イ、、、、吾れ
と吾手にすかし見て、呆れ果てたる色男、田舎娘がガヤガヤとカールさまよと取
り巻いて、騒ぐは強ち無理でない、げにも五月蠅き人の世や。何の因果で此様に、
玉子に目鼻を付けたような、お色の白い好い男、惚られる男は見目よしと、立派
に生れた身の因果、宅の女房が氣を揉んで、恪氣するのも無理でない。うるさの
娑婆に永らへて、惚れた女の顔を見る、私の心のうるささよ。思へば思へば先の
世に、如何なる善事を盡せしか、今更云ふも野暮乍ら、なぜにモ少しヒヨットコ
に、生れて來なんだであらう、朝な夕なに神の前、どうぞ煩雜いナイス奴が私の

事を思ひ切り、後足で砂でもかけて唾吐いて、肱鐵砲の數々を喰はして呉れる醜
男に、造り直して下さんせ、シーナの様なヒヨッコが、去年の秋の末頃、見
目容よき二人の女、高照山の麓まで、漸う漸う進み來るのを、目敏く眺めて涎く
り、目を細くしてにじり寄り、コレコレモウシ旅の人、どこの何方か知らね共、
私はシーナと申す者、假令姿は此様に、蜥蜴の様な顔なれど、心の中のドン底に、
誠の花は咲き亂れ、實に芳ばしき男ぞや、馬には乗つて見よ、人には添うて見よ、
世の諺もあるなれば、バラモン教の神司、中にも分けて神徳の、備はりぬます此
わしに、秋波を送り一時も、早く私の側に寄り、麝香の様な男の匂、一度は嗅い
で見やしやんせ、男ひでりもない世の中に、お前の様な鯁面男、いかに男にかつ
えたとて、どうしてこれが忍ばれよう、なんぞと野暮な撥ね言葉、言はしやんす
かは知らね共、人は見かけに寄らぬ者、假令南瓜と言はれても、色好い茄子に比
ぶれば、天地隔つる味がある。【いが】で包んだ柴栗も、恐いようには見ゆれ共、
開いて見れば芳ばしき、三つの御靈が御座るぞえ。澁皮一つ剥いだなら、女の好
きな薩摩芋、芝居蒟蒻南瓜より、百倍千倍いやまさる、云ふに言はれぬ味がある。

私の願を一通り、聞いてお呉れとすり寄つて、口説けば二人は立止まり、どこの何方か知らね共、砂原夕立か土手南瓜、薬罐頭に瓢箪面、萬金丹を計るよな、デコボコだらけの其顔に、何程醜い女ぢやとて、どうして、どうして秋波が送られう。是ばかりはシーナさま、お許しなされて下さりませと、態能く打出す肱鐵砲、此方は中々屈せばこそ、情火の光炎々と、天に冲する凄まじさ、一旦男の言ひ出した、言葉をお前に反古にされ、如何して男が立つ者か、破れかぶれの此私、ウンと言はさにやおきませぬと、又も執拗う摺寄つて、戀の涙の一雫、落せば二人はあざ笑ひ、コレコレシーナの爺さまへ、お前の顔と御相談、遊ばしませよ餘りぢや、私の好なはカールさま、あんなお方と末永う、添はれる事はさて置いて、假令一夜の假枕、それも叶はぬ事なれば、せめてお側にさぶらうて、水仕事門掃きや、禪の洗濯喜んで、致しませうと朝夕に、頼む神様佛様、妙見様もチヨ口臭い、ガラク夕國の法螺貝山に、止まり給ふ天狗様に、お願を朝夕かけ巻も、畏き神の御利益で、どうぞ會はして會はしてと、思ふ女の眞心を、仇になされたカールさま、恨めしいわいなと、目を拭ひイ、悔み歎けばシーナさま、ハツと計

りに腹を立て、男の意地は此通り百里二百里三百里、筑紫の國の果までもお前の後を付け狙ひ、思ひ通さでおくものか、厭なら厭でシーナにも、覺悟があると云ひ乍ら、無残や二人を谷川に、力限りに突落し、人の花と眺めむよりは一層殺して了うたら、戀の亡執は晴れるだと、無法を盡した其酬い、二人の女の怨靈は、夜な夜な青い火玉となり、或は髪を振亂し、あゝ恨めしや恨めしや、お前は氣強いシーナさま、私は深い谷底に、突落されて死にました。恨みを晴らさでおくものかと、夜な夜な出づる幽霊姿、さすがのシーナも弱り果て、カールの館に尋ね来て、コレコレモウシ、カールさま、お前に濟まぬ事乍ら、テルとハルとの亡靈を、どうぞ鎮めて下さんせ、お前の様な好い男、テルとハルとの亡靈に、たつた一言鎮まれと、云うて呉れたら俺達が、千言萬語を費して、言譯するより效がある。バラモン教のお經をば、千僧萬僧寄り合うて、唱へるよりも喜んで、一度に成佛するである、一人の男のあつたら生命、助けてやらうと思ふなら、慈悲ぢや情ぢや聞いてたべ、などと五月蠅い矢の使、お門の廣い此男、どうして死んだ女にまで、應對してやる暇があらう。あちら此方の女奴に、袖を引かれて何時とて

も、女房にやうぼうの小言こごとを聞きく計ばかり、こんな詰つまらぬ事ことあるか、どうぞ此この苦くが逃のがれたさ、珍うづの都みやこに現あれませる、松若彦まつわかひこの神司かむつかさに、一伍一什いちぶしじふを打うちあけて、神かみの司つかさに助たすけられ、やうやう此處ここまで安樂あんらくに、女難ぢよなんに逃のがれて來きた男をとこ、思おもへば思おもへば夢ゆめぢやつた……アハ、ハ、ハ、ハ、

石熊いしくま「アハ、ハ、ハ、喧やかましい奴やつだなア。丸まるで蜂はちの巢すを側そばにおいた様やうなものだ。モウいい加減かげんに沈黙ちんもくせぬか」

カール「ハイ、ハイ、沈黙ちんもく致いたすで御座ございませう。時ときは早子はやねの正刻しやうこく何いづれも様さまも、早はやくお休やすみなされませい。某それがしは少すこし用事ようじも御座ござらば、後程のちほど寢所しんじよに參まゐりませう」

石熊いしくま「馬鹿ばかツ」
と大喝だいかつする。

末子姫すゑこひめ「カールさま能よく滑車かつしやが運轉うんてんしましたねい」
カール「是これが所謂いはゆるカール口くちと申まをします。アハツハ、ハ、ハ」

末子姫すゑこひめを始はじめ三人さんにんは漸やうやく寢しんに就ついた。カールはどうしても眠ねむられぬが儘ままに森もりを立出たちいで、路傍みちばたに涼すずみ乍ながら、小聲こごゑに鼻唄はなうたを唄うたつて涼すずんで居ゐる。向むかうの方ほうより十曜とえうの

紋もんの印しるしの入いつた丸提燈まるちやうちんをブラつかせ乍ながら、二三人にさんひとの話聲はなしごゑ刻々こくこくと近寄ちかよつて来る。カールは透すかし見みて、

カール「ハハ、來きよつたなア。ウツの都みやこから松若彦まつわかひこのお使つかひとして末子姫すゑこひめ、捨子すてこひ姫様めさまを御迎おもむかへの爲ため、出張しゅつちやうしたのでらしい。一つ此木蔭このこかげに潜ひそんで、からかつて見みてやらう。餘あまり暑あつくつて寝ねる譯わけにも行ゆかず、三人さんにんの連中れんぢうさまは寝ねて了しまふなり、俺おれ一人ひとり斯かうしてブラついてをつても仕方しかたない。狐きつねでも狸たぬきでも來きやがたら、一つ相手あひてになつて見みようと思おもつて居をつた所ところだ。どうやら向むかうも三人さんにんと見みえる、ヤア面白おもしろい面白おもい」

と獨言ひとりごとを云いひ乍ながら、三人さんにんの通とほりかかると待まつて居あた。三人さんにんはカールがこんな所ところに潜ひそんで居をるとは夢ゆめにも知しらず、行過ゆきすぎむとする。カールは俄にはかに女をんなの作つくり聲ごゑ、カール「モシモシ旅たびのお方かたさま、あなたあなたの提燈ちやうちんには十曜とえうのお印しるしが入はいつて居をります。もしや三五教あななひけうのお方かたでは御座ございませぬか？ 妾わらはははるばると海原うなばらを渡わたり参まゐつた者もので御座ございます。餘あまりの急坂きうはんで思おもひの外ほか、暇取ひまどりまして、此處こゝで一いち夜やを明あかさむと主従しゅじゆ二人ふたりが心安こゝろやすき雨宿あまやどり、珍うづの都みやこへはまだ餘程よほど里程みちのりが御座ございますかなア？」

提燈持った男「ハイ、お察しの通り、私は珍の都の松若彦様の身内の者で御座います。そう仰有る貴女様は失禮乍ら、素盞鳴大神様の御娘子、末子姫様では御座いませぬか？」

カール「御察しの通妾は末子姫で御座んす。さう云ふあなたは何方へお越し遊ばすので御座いますか？」

甲「ハイ、良い所でお目にかかりました。實は御神勅に依つて貴女様主従、ウツの都へお越し下さる事を教主様がお伺ひ遊ばされ、吾々三人に……サア是からお迎ひに参れキツとテル山峠の近邊でお出會ひ申すであらう……と仰せられましたので、實は足の達者な者ばかりお迎へに参りました。……サア是からお伴を致しませう」

カール「それはそれは御親切に有難う御座います。併し乍ら妾は生れ付き一方の足が長過ぎますので、あなた方の御伴は到底叶ひませぬ。何程カールでも草臥果てて、お足が重くなりましたして、森蔭に休息………否安眠致して居ります。どうぞ明日にして下さいませ」

乙「それは又妙な事を仰せられます。安眠して御座るお方が立つてもものを仰有るとは、少しく合點が参りませぬ」

カール「所變れば品變る、お家變れば風變る、嬪が變れば顔變ると申しまして、妾の國では立つた儘安眠を致し、寢乍らものを申すのが國の習慣で御座います」

乙「何と妙で御座いますなア。さうするとあなたは女であらつしやいます共、嚴の御靈の御守護で御座いますか？ 瑞の御靈の守護神とか申して、靈界物語を作る男は、横にねたまま、軒をかき乍ら話をするとか云ふ事を聞きましたが、ヤツパリそんな、國に依つて風俗があるので御座いますかなア」

カール「それはいろいろと國に依つてカール……オツトドツコイ、アールさうで御座いますワイ。何分三人の連中が白河夜船で森の中にお休みになつたものですから、仕方なしに一寸此處まで、末子姫様の守護神が出張店を開いてゐられる所で御座います。アハ、ハ、ハ」

甲「ヤア其聲はカールさまぢやないか」

カール「カールだから、聲もカール、末子姫様に一寸カール（代る）と云ふ言葉

だ、オツホ、、、

甲「何だチツト可怪しいと思つて居つた。一方の足が長すぎると云つた時から、チと臭いと考へて居つたが、まさか貴様がそんな洒落をするとは思はなかつた」

カール「足引のチンバのカールが、したり顔、中々甘く人をたばかる……アハ、、、。これが新派の百人一首だ……否悪人一首だ。アハ、、、」

甲「さうして、姫様はどこに休んで御座るのだ。案内して「呉れないか」」

カール「馬鹿云ふな。とうに暮れて了つて、最早子の刻だ。【くれない】……なんて、何を言ふのだ」

乙「相變らず馬鹿口を叩く男だなア。早く御所在を知らして呉れぬか」

カール「御知らせ申したいは山々なれど、何分御存知の通り、暗夜の事とて御行方を見失ひ、どこにどうして御座るか、暗にさまよふ、いぢらしさ、せめて提燈一つあつたなら、そこらブラブラブラついて、見付け出したいとは思へ共、何を云つても、畜生ならぬ人の身は、悲しや夜は目が見えぬ、推量あれや旅の人」

甲「何を吐かすのだ。眞面目に云はないか」

カール「折角お草臥になつて、お休みの最中だ。お前達がガサガサとお側へ寄らうものなら、お目をさましては濟まないから、俺が斯うして一息でも御安眠遊ばす様に、喰ひ止めてゐるのだ。マア茲でゆつくりしたらどうだ。お前は春に、幾に鷹の三人ぢやないか」

甲「オウさうだ。併し乍ら折角此處まで來たのだから、一寸御挨拶をしたいものだなア」

カール「分らぬ奴だなア。明日になつたら、いやと云ふ程御挨拶をさしてやる。今頃にお目をさまして安眠妨害をすると、警察犯處罰令でやられるぞ。夫れ共御挨拶がしたけら、お前達提燈を持つてるのだから、勝手に搜索隊を組織して捜した方がよからう」

四人は路傍に立つて喧ましく掛合うて居る話聲が、夜敏い末子姫の耳に響いた。末子姫はやをら身を起し、向うを見れば十曜の紋の記された丸提燈が一張、二三人の影が、森の中の木間をすかして見えてゐる。末子姫は折角能く寢入つてゐる捨子姫、石熊の兩人に眼をさまさしては氣の毒と思ひ煩ひ乍ら、明りを目當に探

り足あしにて、街道かいたうに漸やつやく姿すがたを現あらはした。

末子姫すゑこひめ「あなたはカールさまぢや御座ございませぬか。其そのお提燈ちやうちんのお光ひかりは何いづれのお方かた

で御座ございますかなア」

此この聲こゑに四人よにんは驚おどろき、

「ハイ只今ただいま松若彦まつわかひこ様の命令めいれいに依よつて、あなた様さま御一行ごいつかうをお迎むかへに參まゐつた使つかひの者もので

御座ございます」

末子姫すゑこひめ「それはそれは御親切ごしんせつに、遠方えんぱうの所ところ、能よくマア來きて下くださいました。どうぞ

此方こちうへお越こし下くださいませ」

カール「誠まことに御一同様ごいちどうさま、見みるもいぶせき茅屋あばらやなれど、カールの住宅ぢうたく、サア御遠慮ごゑんりよ

なうトツトと奥おくへ御通おとほり遊あそばせや」

末子姫すゑこひめ「ホ、、、」

三人さんにん「アハ、、、」

と笑わらひ乍ながら、末子姫すゑこひめの後あとに従したがひ、二人ふたりの眠ねむれる森蔭もりかげに探さぐり行ゆく。

(大正一一・八・一四 舊六・二二 松村眞澄録)

第八章 露の道〔八五〇〕

ひさかた 久方の天津御空の月も日も
あまつみそら つき ひ
いとうららかにテル山峠の

やま 山の麓の樟の森
ふもと くす もり
露の宿りの夢枕

よ 夜は漸くに明け放れ
やつや あ はな
かかさぎ 鶺鴒の聲、小雀の

さへつ 囀る聲に目を醒まし
こゑ め さ
あたりを見れば草も木も

かみ 神の恵の露にうるほひ
めぐみ つゆ ひる
あつ 晝の暑さに萎れたる

すがた 姿も水のしたたりて
みづ た
れうみ 涼味うるほふ夏の朝

き 氣もサヤサヤと勇み立ち
いさ た
かむすさのをのおほかみ 神素盞鳴大神が

やたりをとめ 八人乙女の末子姫
すゑこひめ あした
かぜ 旦の風にゆらぎつつ

やまゆり デリケートなる山百合の
やまゆり
はな 花の色こそ床しけれ

ゆり 百合の花にも擬ふなる
はな まが
をとめ 乙女の姿ユラユラと

くすのき 楠の森の下蔭に
もり したかげ
たたす 佇む姿は芍薬か牡丹の花か
すがた しやくやく ぼたん はな

菖蒲も薫る五月空 見るも涼しき優しの姿よ

末子の姫に近く侍りて まめまめしくも朝夕に

心の有らむ限りを盡し 身もたなしらに主の爲

舎身の活動續けたる 神の教の司人

捨子の姫のあだ姿 何れ劣らぬ花と花

色香も淡き濃きあり 雲突く計りの荒男の子

心も固く骨節の 巖の如き石熊が

足の運びもカールの司 心も口も身も共に

カールカールと鳴く烏 羽の色にも擬へたる

日に焼きつけられし黒面 あゝされどされど神の御前に只管に

盡す心も血も赤く 雲焼けたる東の空に

日の大神の豊榮昇りに昇ります如く 清き心ぞ雄々しけれ

アルゼンチンの宇都の國 其名も高き正鹿山津見の神の

永久に鎮まりぬましける 教の館を預りし

從僕しもべの神かみの國くに彦ひこが
御子みこと生うれし松若彦まつわかひこは

主あるじの君きみに三五あななひの
教をしへの道みちを任まけられて

謹つしみ仕つかへまつりつつ
日ひ々びに榮さかゆる言靈ことたまの花はな芳かむばしく

教をしへの林はやしも日ひに月つきに
茂しげり合あひたる宇都うづの國くに

道みちのほまれも高砂たかさこの
花はなと歌うたはれ來きたりける

あゝ惟かむながらかむながら神かみ々々
誠まことの神かみの功績いさをしに

集あつまり來きたる撫子なでしこの
汚けがれに染そまぬ神心かみこころ

誠まこと一つに身みを固かため
松若彦まつわかひこの教司をしへつかさに

左守さもりの神かみと仕つかへたる
心こころも清きよき正純彦まさずみひこや

魂たまも直すくなる竹彦たけひこの
朝あさな夕ゆふなの起おき伏ふしにも

心こころを配くばり大神おほかみの御爲おんため
世人よびとの爲ために村肝むらきもの

心盡こころつくすぞ雄を々をしけれ
宇都うづの館やかたの松若彦まつわかひこが

山海萬里さんかいばんりを越こえさせ玉たまひ
はるばる茲ここに出いでませし

珍つづの乙女をとめの神司かむつかさ
迎むかへむ爲ために遙々はるばると

春、幾、鷹の三人を 心も厚き出迎へ

赤き心は提燈の明りの如く 十曜の神紋唐紅の色に見えにける

末子の姫は捨子姫 石熊司、春、幾、鷹の大丈夫を

或は前或は後に 守らせ乍らしづしづと

晨の露を踏み分けて 宇都の國にて名も高き

巽の池に荒ぶる神を皇神の 生言靈に言向け和さむと

か弱き女の身にも似ず いそいそ進み出で給ふ

實にも尊き神人の 嚴の雄健び言靈の

如何に照るらむ如何に輝き渡るらむ あゝ惟神々々

皇大神の御經綸 仰ぐも尊し三十餘萬年の

清き神代の物語 嚴の御靈の名に負へる

伊豆の神國田方の郡 狩野の川の激流を

眺めて茲にあらあらと 述べ傳ふこそ樂しけれ

あゝ惟神々々 御靈幸はひましませよ。

樟くすの森もりを立出たちいでて、巽たつみの池いけの大蛇をろちの魔神まがみを歸順きじゆんせしめむと、末子すゑこの姫ひめに従したがひて、
一行いつかうは心こころもいそいそ、三里さんりの道程だうていを朝露あさつゆをふみしめ乍ながら、涼すずしき朝風あさかせに送おくられ、
霧きりこむる山野さんやを、南みなみへ南みなみへと進すすみ行ゆく。

カールはコンパスの長短ちやうたんの醜みにくさを隠かくす爲ため、又またもや歌うたを謠うたひ、ヤツコス踊をどりをし
乍ながら、大地だいちをドンドン威嚇あくわくさせつつ、先頭せんとうに立たつて進すすみ行ゆく。

☪ 惡魔あくまの大蛇をろちが潜ひそむなる 池いけの堤つみに立出たちいでて

動きうごの取とれぬ言靈ことたまを 遠慮ゑんりよ會釋ゑしやくも荒波あらなみの

おのもおのにもに發射はつしやして 神かみの力ちからを發揚はつやうし

霧立きりたちのほ 魔まの池いけを 限くまなく拂はらひ清きよめつつ

汚けがれ切きつたる曲靈まがみたま魂たま 心こころの底そこより歸順きじゆんさせ

榮さかえ久ひさしき松まつの世よを 治しるし召めします大神おほかみの

神素かむす盞さ鳴のの神かみの水い火き 世せ界かいの曲まがを拂はらひつつ

底そこひも知しれぬ此池このいけに 立籠たてこもりたる醜しこ大蛇をろち

力と頼む三五の

盡きせぬ神の御光に

照らし清めて潔く

良めを刺さむ此カール

七人揃ふ其中に

二人のナイスを別にして

抜き出て偉い此男

根底の國に潜むとも

望みの通り口銚に

屠り散らして暗の世を

日の出の御代と立直し

古き司や新しの

隔て構はぬ吾れ先に

屠り散らさむ今日の旅

魔神の猛ぶ此池を

見すて是が歸られうか

昔の神の神力に

目出たく大蛇を言向けて

百の人々平けく

安らかなれと只管に

祈る誠の宣傳使

雪より清き神心

選りに選りたる七人が

世人の爲に今茲に

ラリルレローと濁りたる

悪神共の棲處をば

一時も早く掃き清め

珍の國なる人々の

疫病災禍平らけく 鬼も大蛇も打拂ふ

あゝ惟神々々 五十鈴川の言靈に

汚れを洗ふ勇ましさ 神が表に現はれて

善と悪とを立別ける 巽の池に潜みたる

醜の大蛇を逸早く 誠の道の言靈に

服従ひ和し世の人の 曲をことごと拂拭し

カール司の腕前は 先づ先づ斯くの通りだと

宇都の都に立歸り 松若彦の御前に

法螺吹き立てる頼もしさ あゝ惟神々々

神の御靈の幸はひて 石熊さまの言靈に

必ず兆のなき様に カールが願ひ奉る

乾の瀧に現はれた 大蛇の牡に狙はれて

此世乍らの活不動 思ひ廻せばまはす程

あんな恥し事はない それでもヤツパリ石熊は

早慢心の登り口

末子の姫に打向ひ

巽の池の醜神に

向つて宣らむ言靈は

私に任して下されと

頼んだ心の可憐らしさ

それ程任して欲しければ

遠慮は要らぬドシドシと

大蛇に巻いてやりませう

まかれて石熊舌を巻き

尾を巻き乍ら鉢巻を

前に結んでスタスタと

生命カラガラ一散に

逃げて行くのは目のあたり

カールの歌ふ言靈を

聞いて恨むでない程に

お前の大事と思ふから

悪い事は言はないぞ

末子の姫の御座るのに

力も足らぬ石熊が

虎の威を假る古狐

池の大蛇を言靈に

服従へますとは何の事

身の上知らずも程がある

早く心を改めて

謙遜りつつ姫様の

御後に従ひ來るが良い

何程弱そに見えたとして

お前はまへ大蛇をろちに相対あひたいし 服従まつるひ和やはす資格しかくなし

あゝかむながらかむながら惟神かみ々々 神かみの心こころに省かへりみよ

昨日きのふが日迄ひまで三あな五なひの 神かみの教をしへに敵對てきたうて

千變萬化せんべんばんくわの計略けいりやくを 包つつみ來きたれる曲津神まがつかみ

お前まへの放はなつた醜犬しこいぬは 珍うづの館やかたにヤツと居をる

改心かいしんしたとは云いひ乍ながら 小前まへは神かみの罪人とがにんぞ

如何いかに末子すゑこの姫様ひめさまが 小許ゆるしありとて鼻高はなたかく

先頭せんとうに立たつは何事なにごとぞ 小前まへの前ぜん途とが案あんじられ

口くちがカールしか知らね共ども 友達ともだち甲斐がひに言いうておく

俺おれの誠まことの親切しんせつが ちとでも小前まへに分わかつたら

今日けふは遠慮えんりよをするが良よい 呉くれ呉ぐれ氣きを付つけおきまする

あゝかむながらかむながら惟神かみ々々 御靈みたま幸さちはひましませよ。

旭あさひは照てる共曇ともくもる共とも 月つきは盈みつとも虧かくる共とも

假令たとへ大地だいちは沈しづむとも 小前まへの様やうな魂たましひで

大蛇をろちが言こと向むけ和やはされよか
 控ひかえて居ゐるが第一だいいちだ
 くだい乍ながらも氣きを付つける
 必かならず必かならず俺おれのこと
 悪わるくは取とつて呉くれるなよ
 神々かみがみ様さまも見みそなはせ
 カールあかの赤あかき胸むねの内うち
 あゝ惟かむながらかむながら神々かみがみ
 神かみの心こころに立たち歸かへれ
 神かみの心こころに通かよへよや
 〇

と歌うたひつつ足あし拍べう子しを取とり進すすんで行ゆく。石熊いしくまはカールあかの此この歌うたに首かうべを傾かたむけ、手てを組くみ、
 思案しあんに暮くれ乍ながら、力ちからなげに従したがひ行ゆく。

(大正一一・八・一五 舊六・二三 松村眞澄録)

第三篇

神縁微妙

第九章 醜の言霊（八五一）

テル高山の百谷千谷より流れ集まる巽の大池は、紺碧の波を湛へ、底知らずの池と稱へられ、時々風もなきに、池中の此處彼處に、波の圓を畫き、鯨が潮を吐く如き水煙、天に沖する凄じさ、普通の池にあらざる事は之を見ても知らるるのである。

末子姫の一行は漸くにして、少しく街道を右に取り問題の巽の池の畔に着いた。今迄晃々と輝き玉ひし天津日の神は黒雲に包まれ、雲は次第に濃厚の度を増し、追々低下して暗の帳は池の近邊に下つて來た。形勢容易ならざる恐怖と暗澹の幕は下りた。波の音は轟然として、百雷の一時に轟く如く、身の毛もよだつ計りである。末子姫は言葉靜かに石熊に向ひ、末子「石熊さま、ここへ參る途中に於て、カールさまの周到なる御注意が御座いました。されど妾が口より一旦許した以上は取消す譯には參りませぬ。又あなたも折角の希望を中途に放棄遊ばすのも、御無念でせう。サアどうぞあなた、先陣

を勤めて下さいませ」

石熊は眞青になり、唇をビリビリ慄はせ、齒をガチガチと鳴らせ乍ら、

石熊「ハイ、ア、有難う存じます。實の所はさう思ひましたけれど、途中に於てカールさまの御意見を承はり、如何にもまだ身魂の研けない吾々、立派な宣傳使さまを差おき、先陣の功を贏ち得ようなどは、以ての外の不心得で御座いました。どうぞ是計りは御取消しを御願ひ申します」

と半泣きになつて斷つて居る。末子姫は可笑しさを咏へ、ワザと姿勢を正し、言

葉も莊重に、

末子「石熊さま！宣傳使の言葉に取消は御座いませぬ。三五教には難を見て退却すると云ふ事は御座いませぬ。又初一念を貫徹するのは、男子たる者の本分で御座いませう」

とまだ歳若き、花なれば苔の末子姫にきめつけられ、返す言葉もなく、頭を掻き

乍ら、

石熊「ハイ……左様ならば仰せに従ひ、言靈を……八、發射致しませう」

カール「アハ、ハ、ハ、面白面白、面白面白、石熊さまの拔群の功名、ドレ中立地帯に身を置いて、今日の戦闘を観戦致しませう……石熊さま！シツカリ頼みますよ。胴を据えてお掛りなさい、腹帯もシツカリ締めて居なさらぬと、産後は逆上の虞がありませんから、取上げ婆アでも呼んで來ませうか、モルヒネ注射の用意でもしておきませうかなア　アハ、ハ、ハ、ハ」

末子「コレ、カールさま！暫く御控えなされませ」

カール「ハイ、キツと謹慎致します」

捨子「大分に大蛇の方も戦闘準備が調ふたと見えて、黒雲四邊を包み、荒波

立さわぎ、大粒の雨はパラパラやつて來ました。第一此雲を打拂ひ、言靈によつ

て雨を止め次で大蛇の歸順と云ふ段取に願ひます」

石熊「ハイ、そんなら取つときの勇氣を放り出して、一つ奮戦激闘致して見ませ

う」

と轟く胸をジツと鎮め、大蛇の歸順歌を歌ひ始めたり。

異たつみの池いけに潜ひそみたる

醜しこの大蛇をろちよ能よつく聞きけ

今いまは昨日きのふの俺おれでない

乾いぬぬの池いけに巢すを構かまへ

貴様きさまの牡おすが瀧たきの上うへ

俺おれの水行みづげうを睨ねめつけて

野心やしんを企たくんで居をりよつた

バラモン教けうの神司かむつかさ

心こころも固かたき石熊いしくまは

腕節うでふしまでも固かたいぞよ

大蛇をろちの奴やつが口くちあけて

でかい目玉めだまを剥むき乍ながら

猪口ちよこざい才せい千せん萬ばん一ひと呑のみと

狙ねらつてゐよる可を笑かしさよ

直立ちよくりつ不動ふどうの姿勢しせいにて

大蛇をろちも出でて来こい鬼おにも来こい

假令たとへ千せん匹びき萬まん匹びき一いち度どに出いで来きり

俺おれに向むかつて攻せめ来く共とも

何なにをか恐おそれむ高照山たかてるやまの

流ながれも清きよき谷たにあひに

教をしへの館やかたを廣ひろく建たて

教主けうしゆの君きみと仰あふがれた

天下てんか無む雙さうの豪傑がうけつぞ

バラモン教けうの司つかささへ

是これだけ勇氣ゆうきが有あるものを

此世このよを造つくり固かためたる

三五教あななひけつの主宰神しゆさいしん

國治立大神くにはるたちのおほかみの

珍うづの御み弟子でしとなつた俺おれ 瑞みづの御み霊たまと現あれませる

神かむすさのをのおほかみ素す盞さん鳴なり大神おほかみの 珍うづの御おんこ子この末すゑこひめ子こ姫ひめ

言こと霊たますぐれさせ玉たまふ 貴たふときお方かたの弟でし子ことなり

只ただいま今こゝ茲こゝに向むかうたり 昨日きのふも強つよく出でたけれど

今けふ日は一いつ層そう強つよいぞや 神しんりき力むさう無む雙さうの石いしくま熊くまが

天あまの沼ぬほこ矛ほこを振ふりまはし 宣のる言こと霊たまを味あぢはひて

早はやく兜かぶとを脱ぬぐがよい 神かみが表おもてに現あらはれて

善ぜん神しん邪じゃ神しんを立たてわける 悪あくの企たくみは何い時つまでも

續つづきはせないと心得こころえて お前まへも心こころを立たて直なほし

早はやく解げ脱だつをするがよい あゝ惟かむながら神かみ々々

御み霊たま幸さちはひましまして 大をろち蛇まじゆつの魔まじ術ゆつに包つつみたる

八や重への黒くろくも雲うち打はら拂ひ 礫つぶての樣やうな此この雨あめを

早はやく晴はらさせ玉たまへかし 三あななひけう五ご教けうの宣せん傳でん使し

心こころも體からだも石いしくま熊くまが 鐵てつ石せき心しんを發はつ揮きして

大慈大悲の大神の 恵に救ひ與へむと

いよいよ此處に向うたり お前は大神の牝だらう

牡の大蛇は末子姫 宣らせ玉ひし言靈に

嬉し涙を流しつつ 畜生仲間を解脱して

天にいそいそ昇り行く さぞ今頃は天上の

神の御許に参上り 高天の原に安々と

皇大神の右に座し 下界を覗き居るであらう

あゝ惟神々々 神の力を蒙りて

言靈戦を開始する 俺の言葉が分らねば

お前の勝手にするがよい 心一つの持様で

此世に苦しう暮さうと 勇んで樂に暮さうと

天に昇つて神となり 世を安々と渡らうと

何時まで池の底に棲み 日に三熱と三寒の

悩みを受けて何時迄も 悩み暮さうとお前の心の胸一つ

早く改心するがよい
神が表に現はれて

善と悪とを立別ける
此世を造りし神直日

心も廣き大直日
直日に見直し聞直し

青人草は云ふも更
大蛇や鬼の靈まで

安きに救ひ助けます
神の恵を喜んで

吾言靈に服従へよ
朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも
假令大地は沈むとも

誠一つの言靈で
生命の續く其限り

俺はお前を助けにやおかぬ
俺の尊い眞心を

よく汲み取つて逸早く
天の八重雲吹きはらし

怪しき雨を降り止めて
再び天津御光りを

現はし奉れ醜大蛇
お前を救ふ眞心の

あふれて茲に池の水
深き恵を汲み取れよ

あゝ惟神々々
御靈幸はひましませよ

と歌ひ了つた。何故か雲は益々舞ひさがり水面はいよいよ波高く、雨は礫の如くポツリポツリと所まんだらに、池の面に小石を投げたやうな波紋を印して降り注いでゐる。されど不思議にも、一行七人の肉體には一粒の雨もかからなかつた。カール「アハ、ハ、なんとマアよう利く言靈ですなア。お前さまが言靈を發射する度毎に戦ひ益々酣なりといふ調子で、波は次第々々に高まつて来る、雲は追々濃厚となる、大粒の雨は刻々に繁く降つて来る、何と言靈も使ひ手に依つては、どうでもなるものだなア！　こんな男に言靈を發射させるのは、丁度氣違に松明を持たして、放り出した様なものだ、危険至極で見居られない。それだから俺が道々御遠慮したら宜からうと、忠告を與へてやつたのだ、いらぬチヨツカイを出して、いい恥をかいたものだなア。俺はどうかしてお前に失敗をさせともないと思つて、止めたのだよ。要するに抜かぬ太刀の功名をさせてやりたかつたばかりだ。世界一の力の強い角力の神さま、摩利支天にだつて、一度も負た事のない、此のカールの忠告、なぜ聞かなかつたのだ。假令姫様がお勧めなさつても、遠慮をするのが道ではないか」

石熊「さう責めて呉れない。今に言靈の效用が現はれるだらうから、暫く時間を與へて、俺の腕前を拜観するが良いワ。さうして、今御前はあの摩利支天様にも負たことがないと云つたが、どこで何時角力を取つたのだ」

カール「世界一の力強の角力の神でも、組合ひせなかつたら、負る例はないぢやないか。それだからお前も沈黙して、姫様にお任せしておけば、大蛇に負たと言はれて、末代の恥をさらすにも及ぶまいと思つたから、親切に云つてやつたのだ。良薬は口に苦く、諫言は耳に逆らうと云ふ事があるから、俺の露骨な忠告は、キツとお前に喜ばれさうな筈はない。けれ共俺は阿諛諂佞の徒ではないから、正々堂々と至誠を吐露して注意したのだ。併し乍らモウ斯うなつては取返しはつかない。あゝ困つたものだ、……それ見よ！　ますます波は高く荒れ狂ひ出したぢや

ないか！」

石熊「大方俺の言靈の威力に打たれて、大蛇の奴、地底に苦悶して、のた打廻つて荒れてゐるのだらう。さうでなくば、あれ丈浪が立さわぐ道理がないぢやないか。細工は流々マア仕上げを見てゐて下されよだ、アハ、ハ、ハ、ハ」

と空元氣を付け乍ら、心中不安の念に驅られて居る。

末子「石熊さま、どうもあなたの言靈は少し不結果でした。マ一度宣り直しなさいませ」

いませ」

石熊「ハイ、最早言靈の材料缺乏致しまして、何とも仕方が御座いませぬ。どうぞ

少し資本を御貸し下さいませぬか」

末子「ホ、ホ、ホ、あのマア氣樂なこと仰有つて、早くなさらないと、大變なこ

とが出来致しますよ。あなたが起した事は、あなたが結末をつけなくては、外の

者が如何ともする事が出来ませぬ。サア茲で早く天津祝詞を奏上し、天の數歌を

歌ひ上げ、更めて、心を清め、再び大蛇に向つて、言靈を御發しなさいませ」

カール「それ見よ……それだから、初から手出しをすなと云うたぢやないか。二

進も三進もならぬとは此事だ。丸でとりもち桶へ足をふんごんだ様な破目に陥つ

たぢやないか。サアお姫様の仰せの通り、シツカリ胴を据えて、ウンと息を臍下

丹田に詰め、圓満晴朗な言靈を發射せよ。そして大蛇に對し、餘り輕蔑的言辭を

用ゐてはならないぞ。善言美詞の神嘉言を以て、萬有を歸順せしむるのが神事の

兵法だ。サア早く、心の立替立直しをして、臍下丹田を押し開き、生言靈を發射せよ。

石熊は是非なく、又もや池の面に向つて一生懸命に言靈を宣り始めた。池の波は時々刻々に高まり、山の如くになつて來た。其光景の凄じさ、到底筆舌の盡す限りではなかつた。

(大正一一・八・一五 舊六・二三 松村眞澄録)

第一〇章 妖雲晴〔八五二〕

石熊は改めて姿勢を正し、再び水面に向つて、言靈を發射し始めた。此男は得意の時には無茶苦茶に威張るなり、少し弱り目になつて來ると、顔色迄眞青にかへる、精神の未だ安定しない男であつた。末子姫に再び宣り直しを命ぜられ、且又カールの忠言を痛く氣にして心を痛め乍ら、引くに引かれぬ因果腰を定めて又

もや歌ひ始めた。されど何處ともなしにハーモニを缺いた悲哀の情を遺憾なく
現はして居た。其歌、

仰げば高し久方の

高天原に現れませる

皇大神の御言もて

豊葦原の瑞穂國

造り固め玉ひつつ

世人の爲に御心を

配らせ玉ひし國治立の

神の命の御仕組

普く世人を助けむと

三五教の御教を

野立の神と現れまして

數多の神を呼びつどひ

開き玉ひし尊さよ

天照します大神の

弟神と現れませる

神素盞鳴大神は

仁慈無限の瑞御靈

鬼や大蛇や曲神の

日々に惱める苦みを

生言靈の幸はひに

清く見直し聞直し

宣り直さむと八洲國

雨あめのあした晨あしたやかぜ風かぜのよひ宵よひ
 遠とほきやまかは山やま河かは打うちわたり
 森しん羅ら萬ばん象しやう悉ごとく
 皇すめ大おほ神かみのうづ珍うづのこ子こと
 乾いぬのたき瀧たきにあ現あれまして
 大を蛇ろちのかみ神かみにねら狙ねらはれて
 三あな五な教ひけうのみ御こ心ころを
 大を蛇ろちのかみ神かみはい云いふも更さら
 合あせはてすてく救すくひたま玉たまひけり
 天てん地ちにお怖おぢず暗やみ雲くもの
 館やかたをかま構かまへて世よのひと人ひとに
 濁にごりけが汚けがれし言こと靈たまを
 知しらず知しらずにあく惡あく神がみの
 知しらず知しらずにあく惡あく神がみの
 あかむゝな惟な神がみ々な々な
 御み靈たまのさち幸さちをかづむ蒙かづむりて
 雪ゆき積つむの野の邊べもいと厭いとひなく
 大おほ海うな原ばらをこ越こえまして
 助たすけたま玉たまへる有あり難がたさ
 現あらはれませるす末こ子ひめ姫ひめ
 命いのちもあやふ危あやふきをり折をり柄からに
 完う美まらにつ委つ曲ばらにあ現あはして
 此この石いしくま熊まがみ身み魂たままで
 吾われは賤いやしき人ひとのみ身みの
 高たか照てる山やまのせい聖せい域みきに
 神かみのつかひ使つかひとほこ誇ほこりつつ
 打うち出だしみだ亂みだすよ四よ方ものくに國くに
 醜しこのとりこ擒とりことなりにけるける

天地に充ちし罪穢れ

末子の姫の言靈に

伊吹拂はれ救はれて

今は全く三五の

神の僕となりけり

巽の池の底深く

堅磐常磐に鎮まれる

大蛇の神の御前に

吾れは謹み畏みて

生言靈を宣りまつる

大蛇の神よ生神よ

汝も天地の皇神の

御水火に生れし神の御子

假令姿は變る共

尊き神の御心に

清き御目に照らしなば

いかで差別のあるべきや

汝も神の子神の宮

吾れも神の子神の宮

互に睦び親しみて

天地の教を傳へたる

三五教の神の道

開き玉ひし言靈の

珍の力を味はひて

一日も早く村肝の

心の岩戸を開きつつ

月日の影も美はしく

汝が心に照らせかし

吾れは賤しき人の身よ
汝は尊き神の御子

汝に向つて言靈を
宣り傳ふべき力なし

さは去り乍ら吾れも又
尊き神の御守りに

珍の柱と選ばれて
汝の靈を救はむと

遙々尋ねて來りけり
大蛇の神よ生神よ

心平らに安らかに
賤しき者の言靈を

さげすみ玉はず御心を
鎮めて深く聞き玉へ

これの天地はいと廣し
いかに御池は廣くとも

いかに水底深くとも
限りも知らぬ大空に

比べて見れば此池も
物の數に這入らない

斯かる處に潛むより
天地に充てる言靈の

力に心を清めまし
大空高く翔登り

尊き神の右に座し
雨をば降らせ風吹かせ

青人艸に露ひを
與へて神の經綸に

仕ふる神となりませよ

幸ひ汝の身體は

時を得ずして池底に

身を潛む共時津風

吹來る風は忽ちに

天地の間に蟠まり

風雨電雷叱咤して

神政成就守ります

素質のみます生神ぞ

あゝ惟神々々

神の心を推し量り

吾言靈を詳細に

聞き召しませ惟神

大蛇の神の御前に

三五教に仕へたる

神の僕の石熊が

謹み敬ひ八平手を

拍ちて勸告仕る

あゝ惟神々々

御靈幸はひまませよ

今度は最も叮嚀に善言美詞的に言靈を宣り上げた。され共水面の光景は依然と

して元の如くであつた。

末子姫 〆 今度のあなたの言靈は實に神に入り、妙に達したと云つても宜しい。併

し乍ら、其效果の現はれないのは、あなた如何御考へなさいますか」
石熊「ハイ、何と云うても過去の罪が深いもので御座いますから、大蛇の神様も馬鹿にして、あの汚らはしい小僧奴、何を猪口才な、殊勝らし事を言ひよるのだ！
……と云ふ様なお心持で聞いて下さらないのでせう。實にお恥かしう御座います」
末子「あゝさう御考へになりましたか、それは實に善き御考へで御座います。どうぞ其心を忘れない様にして下さい。さうしてあなたは別に三五教にお這入りにならなくても宜しい。又高照山とかの立派な館を三五教へ獻るとか仰有つたように記憶して居りますが、決してそんな御心配は要りませぬ。神さまの誠の御教は左様な小さい區別されたものでは御座いませぬ。三五教だとか、バラモン教だとか、ウラル教だとか、いろいろ小さき雅號を拵へ、各自に其區劃の中に詰め込まれて蝸牛角上の争ひをして居る様なことでは、到底大慈大悲の大神の御神慮には叶ひませぬ。誠の道は古今に通じ、東西に亘り、單一無雜にして、悠久且つ宏大な物、決して教會とか靈場とか、左様な名に囚はれて居る様なことでは、誠の神の御心は分るものでは御座りませぬ。あなたも三五教の中に宜しい點があるとお

認めになれば、そこを御用ゐになり、バラモン教で宜しいから、悪いと氣のついた所は削り、又良いことがあれば、誰の言つた言葉でも少しも構ひませぬ。長を採り短を補ひ、完全無缺の神様の御教を何卒天下に擴充されむことを希望致します。妾も三五教の宣傳使なぞと言はれる度毎に、何だか狭苦しい箱の中へでも押込められる様な心持が致しまして、實に苦しい御座います。すべて神の教は自由自在に解放されて、一つの束縛もなく、惟神的でなくてはならないものですよ。どうぞ其お積りで今後は世界の爲に、神様の御爲に力一杯誠を御盡し下さいませ。これが此世を造り玉ひし元津御祖の大神、國治立命様其外の尊き神々様に對する三五の道の真相で御座いますから……」

石熊は涙をハラハラと流し、

石熊「如何にも公平無私にして、理義明白なる姫様の御教訓、いやモウ實に今日は結構な御神徳を頂きました。今後はキツと今迄の様な小さい心を持たず、努めて大神様の御心に叶ひまつるべく、努力する考へで御座います。何卒御見捨てなく、愚者の私、御指導の程幾重にも念じ上げ奉ります」

と合掌し、感謝の涙に聲さへかすんでみた。

末子「もし捨子姫様！ あなた御苦勞ですが、大蛇の神様に言靈をお手向け下さ

いませぬか？ 石熊様があの通りの不結果に終られましたから、其補充として、

あなたに御奮戦を御願致します」

捨子「左様なれば、仰せに従ひ、言靈を宣らして頂きませう」

と云ひ乍ら、山嶽の如く、波立ちさわぐ水面に向つて、言葉涼しく清く言靈を宣

り始めたり。

「巽の池に永久に鎮まりゐます生神の

いづの御前に捨子姫 天と地との神々が

授け玉ひし言靈を 茲に愼み宣りまつる

あゝ惟神々々 神の造りし神の國

神の守りし神の國 成り出でませる人艸や

森羅萬象悉く 神と神との御恵を

受けざるものはあらざらむ 大蛇の神よ生神よ

神より受けし其身魂 時世時節と言ひ乍ら

底ひも知れぬ此池に 忍びぬますは何故ぞ

天津御空もいや高く 翔りて此世を守るべき

汝が身は實にも皇神の 珍の御楯と選ばれし

尊き身魂にあらざるか 森羅万象悉く

永遠無窮の生命を 與へ助くる言靈の

神の御水火を諾ひて 一日も早く片時も

御池の波を掻き分けて 天津御空の生神と

返らせ玉へ三五の 神の教に仕へたる

捨子の姫が眞心を こめて偏に請ひまつる

あゝ惟神々々 神の御靈を受けまして

限も知れぬ大空の 尊き神と現れませよ

神素盞鳴大神の 珍の御子なる末子姫

其言靈を蒙りて 汝が身に勧め奉る

汝が身に勧め奉る あゝ惟神々々

御靈幸はひましまして 捨子の姫の言靈を

空吹く風や川の瀬の 音と見逃し玉ふまじ

大蛇の神の御前に 心をこめて宣べまつる

心の文を明かしつる

と歌ひ終つた。捨子姫の言靈は極めて、簡單なれ共、天授の精魂清らかにして、

一點の汚點もなく、暗雲もなく、眞如の月は心の海に鏡の如く照り輝き居たれば、

其言靈の效用著しく現はれて、さしもに高かりし荒波は次第々々に静まり、四邊

を包みし黒雲は忽ち晴れわたり、マバラの雨は俄に降りやみ、天津御空には金色

の太陽晃々と輝き始め玉うた。あゝ惟神靈幸倍坐世。

(大正一一・八・一五 舊六・二三 松村眞澄録)

第一章 言靈の妙（八五三）

言靈の妙用は一聲よく天地を震動し、一音よく風雨雷霆を驅使し叱咤する絶對無限の權力あれ共、之を使用する人々の正邪に依りて、非常なる徑庭のあるものである。昨日迄バラモン教を開き、誤りたる信仰を續け、心は拗げ、魂は曇り、言靈の曇りたる者は、如何に完全に、能辨に善言美詞を述べ立つればとて、萬有一切に對し毫末も、其感動を與へざるは、實に神律の嚴として冒す可らざる所以である。又魂よく研げ慈愛に富み、心中常に寛容の徳ある捨子姫の言靈は、前者に比して極めて簡単なものであつた。されど暴惡無道の醜の大蛇も、嚴として動かす可らざる捨子姫の清明無垢の臍下丹田より迸れる萬有愛護の至誠より出でたる言靈には、如何に頑強なる邪神と雖も、到底之れに抵抗するの餘地なく、漸く心和らぎ、浪靜まり、雨は止みあたりを包む黒雲も次第に、言靈の權威に依つて拂拭されて了つたのである。これにしても神界の最大重寶たる言靈の神器は、混濁せる身魂の容易に使用し得可からざる事を知らるるであらう。あゝ惟神靈幸倍

坐世ませ。

末子姫すゑこひめは嚴然げんぜんとして立上りたちあが、漸やうやく風渡りなぎわたりし水面すゐめんに向むかひ言葉ことばさわやかに歌うたひ始はじめ
た。其歌そのうた、

誠まことの神かみの造つくらしし

此この天地あめつちの不ふ思議しぎさよ

天津御空あまつみそらは青雲あをくもの

底そこひも知しらぬ天あまの川かは

森羅萬象しんらばんしやう睥睨へいげいし

清きよく流ながれて果はてしなく

星ほしの光ひかりはキラキラと

永と遠はに輝かがやく美うるはしさ

天津日あまつひの神かみ東天とうてんに

昇のぼりましては又また西にしに

清きよき姿すがたを隠かくしまし

夜よは又また月げつの大御神おほみかみ

清きよき光ひかりを投なげ玉たまひ

下界げかいの萬ばん有いう一切いつさいに

惠めぐみの露つゆを垂たれ玉たまふ

月つき日は清きよく天渡りあまわた

濱はまの眞砂まさごの數かずの如ごと

光ひかり眩まはゆき百星ひやくせいの

或あるは白しろく又また赤あかく

淡あはき濃こき色いろ取とり交ませて

際涯も知らぬ大空を

飾らせ玉ふ尊さよ

眼を轉じて葦原の

瑞穂の國を眺むれば

山野は青く茂り合ひ

野邊の千草はまぢまぢに

青赤白黄紫と

咲き亂れたる樂しさよ

河の流れはいと清く

稲麥豆粟黍の類

所狭きまで稔りつつ

味よき木實は野に山に

枝もたわわに香りけり

天津御空の神國を

此土の上に相寫し

四方の神人木や草や

鳥獸や蟲族の

小さきものに至る迄

神の御水火をかけ玉ひ

尊き靈を配らせて

天と地とは睦び合ひ

影と日向は抱き合ひ

男子女子は相睦び

上と下とは隔てなく

互に心を打明けて

暮す此世は神の國

高天原の活映し

天地の合せ鏡ぞや

あゝ惟神々々かむながらかむながら 神の御靈の幸はひて

風吹渡り荒波のかぜふきわた あらなみ 巽の池に現れませるたつみ いけ あ

神の御水火に生れたるかみ みい き うま 大蛇の神よ活神よをろち かみ いきがみ

汝は神の子神の宮なれ かみ こかみ みや 吾れも神の子神の宮われ かみ こかみ みや

汝と妾とのみならずなれ わらは 山河木草鳥獸やまかはきくさとりけもの

大魚小魚蟲族もおほうをこうをむしけら 神の恵に漏れざらめかみ めぐみ も

況して尊き汝が姿ま たふと な すがた 人の體にいや優りひと からた まさ

いよいよ太くいや長くふと なが 陸にも棲めば水に棲みくが す みづ

雲にも乗りて大空をくも の おほぞら 翔りて昇る神力をかけ のぼ しんりき

生れ乍らに持たせつつうま なが も 何故狭き此池になにゆゑせま このいけ

鎮まりまして世の人にしづ よ ひと 悪き災なし玉ふやあし わざはひ たま

神素盞鳴大神がかむすさのをのおほかみ 八洲の國に蟠るやしま くに わだかま

八岐大蛇や醜神をやまたをろち しこがみ 稜威の言靈宣べ傳へいづ ことたまの つた

伊吹の狭霧吹棄てていぶき さぎり ふきす すべての物に安息をも あんそく

與へ給はる大神業

此神業の一つだも

補ひ奉り萬有に

惠の乳を含ませて

救はむものと末子姫

捨子の姫を伴ひて

まだ十六の苔の身をば

雨に曬され荒風に

梳づりつつ霜をふみ

雪を涉りてやうやうに

濱邊に着きて荒波に

猛り狂へる和田の原

漸く越えてテルの國

テル山峠の急坂を

登りつ下りつ膝栗毛

鞭うち進む二人連れ

かよわき女の身を持つて

天涯萬里の此島に

渡り來るも何故ぞ

顯幽神の三界の

身魂を助け救ふ爲

あゝ惟神々々

神の水火より生れたる

末子の姫の言葉を

完全に委曲にきこしめし

一日も早く此池を

見すてて天に昇りませ

如何なる罪のあるとても

千座の置戸を負ひ玉ふ
神素盞鳴の贖ひに

忽ち消ゆる春の雪
花は紅、葉は緑

吾言靈に汝が命
感じ玉はば今直に

此れのお巢を振棄てて
元つ御座に返りませ

あゝ惟神々々
御靈幸はひましませよ

と歌ひ終つた。不思議や池水は左右にパツと開けて、白龍の姿忽然として現はれ、末子姫が側近く進み来り、感謝の涙をハラハラと流し、頭首を垂れ、暫しは身動きもせず俯伏しゐる。稍あつて白龍は其體を縮小し、遂には目に止まらなくなつて了つた。頭上に聞ゆる音樂の聲、一同空を仰ぎ眺むれば、龍神解脱の喜びに數多の天人舞ひ下り来り、さも麗しき女神の姿と化したる巽の池の龍神を守りつつ、天空高く消えて行くのであつた。

(大正一一・八・一五 舊六・二三 松村眞澄録)

第一二章 マラソン競争（八五四）

茲に末子姫は捨子姫、カール、春公、幾公、鷹公、石熊の一行と共に芽出たく
異の池の大蛇を言向け和し、解脱せしめ、池に向つて感謝の詞を述べ、向後決し
て此池に、従前の如き龍蛇神の棲居して、世人を苦めざる様と深く鎮魂を修し、
災を封じおき、いよいよ珍の都に向つて進むこととなりけり。

此時不思議にもカールの足の長短は何時の間にか兩足相揃ひ、行歩極めて容易
になつてゐた。されどカールは少しも氣付かず、依然として跛の不具者と信じて
ゐるものの如くであつた。末子姫は天津祝詞を奏上し、天の數歌を歌ひ上げ、一
同に向ひ、

末子姫「サア皆様、御苦勞で御座いました。これからボツボツと参りませう」
と先に立つて進み行く。

石熊「モシモシ皆様！ 待つて下さい。どうしたもののか、チツとも足が動かなくなりました。どうぞ鎮魂をして下さいませ。何だか締つけられる様で、仕方が御

座ざいませぬん」

カール「もし、末子すゑこ姫様ひめさま、石熊いしくまの大將たいしやう、足あしが立たたないと云いつてゐます。困こまつた者ものですなア」

末子すゑこ「イエイエ決して御心配ごしんぱいには及およびませぬ。キツと時節じせつが参まゐれば、立たつ様やうになります……なア、カールさま、不言實行ふげんじつかうと云いふことを御存ごぞんじですか？」

カール「ハイ、分わかりました。どうぞ、そんなら姫様ひめさま、一足ひとあしお先さきへお越こし下くださいませ。捨子すてこ姫様ひめさまも御一ごいつしよ緒おねがひいたに御願おねがひいた致します……オイ春はる、幾いく、鷹たかの三公さんこう、お前まへはお二人ふたりさ

様まのお伴ともして歸かへつて呉くれ。俺おれは少すこし石熊いしくまの大將たいしやうの足あしを直なほしてから歸かへるから……」

春はる「オイ、カール、いい加減かげんにしとかぬかい。餘あまり今迄いままで悪黨あくたうなこと計ばかりやつて來きた酬むくいで神罰しんばつが當あたつたのだ。お前まへがどれ文だけ言こと靈たまが上じやうづ手づでも御祈おいのりが立りつ派ぱでも駄目だめ

だよ。神様かみさまが御許おゆるしがなければ到底たうてい足あしが立たつ筈はずがないワ。餘あまり汚けがれた身魂みたまだから、神様かみさまがウヅの聖地せいちへ來こないようと、不ふ動どうの金縛かなしばりをかけて御座ござるのだよ。いい加かげ

減へんに歸かへつたらどうだ」

カール「そんな譯わけに行くものか。人ひとの難儀なんぎを見て、それを救すくはずに歸かへる様やうなこと

で、如何して神様の取次が出来るものか。何は兔もあれ姫様の御命令だ。グツグツ云はずに早く姫様の御伴をして歸つて呉れ。すぐに俺は追ひ付くから……」

春「さうか、ソリヤ實に感心な心になつたものだなア」

と嘲る様に言ひ乍ら、二人の後に従ひ、ウツの都をさして歸り行く。

後に二人は稍少時、水面に向つて暗祈黙禱を續けて居た。

カール「オイ石熊の大將！ 今迄俺はお前の弟子となつて、エライお世話になつ

たものだ。今日は其御恩返しと罪亡ぼしの爲に、邪が非でもお前の足を直して、

やらねばならぬ。如何しても足が立たなければ、俺が背中を負うてもウツの都

へ連れて行く覺悟だからマア安心せよ」

石熊「ソリヤどうも有難い。苦勞をかけて濟まぬなア」

カール「世の中は相身互だ。さう病氣も直らない内から禮を云つてくれると、如

何云つて良いやら、俺も返答に困つて了ふ。マアゆつくりと氣をしづめたが良か

らう。マア待て、俺が是から新規時直しの言靈を奏上するから、キツとお前の足

が巽の池となるのは受合だ。さうなつたら二人手に手を取つて潔く宣傳歌を謠ひ、

ウヅの都をさしてサツサと【乾】の池だよ。水も洩らさぬ二人の仲だ。【池】ないことは互に【堤】かくさず、打明けて、兄弟の如く親切を盡し合はうぢやないか。此池の様に水がタツプリ過ぎて、水臭い交際は最早改めねばならないよ。サア是から一つカールさまの生言靈だ。マアそこへ足を二ヨツと出せ。一つ鎮魂を御願してやらう。さうして言靈歌を奏上することにせう。笑ふなよ！
石熊「勿體ない、祈念をして貰つて笑ふ奴があるものか。併し乍ら病氣が直つたら、餘り嬉しくて、笑ひ泣きをするかも知れないから、夫丈は前以てお斷りをしておく」

カール「嬉し笑ひなら、ドツサリ笑つて呉れ。俺も手を拍つて嬉し笑ひをするからなア」

石熊は池の畔の芝生の上に足を又ツと揃へ、突出してゐる。カールは例に依り、叮嚀に大腿骨の邊りから爪先まで、天の數歌を謠ひ乍ら、幾回となく撫でおろし、そろそろ祈願の歌を謠ひ始めた。其歌、

天津神様八百萬

國津神様八百萬

此奴は餘り惡が過ぎた故 最早運命は月照彦の

神様どうぞ此足を カールに直して下さんせ

高砂島を守ります 生國魂の神様よ

石熊さまの兩足が 一時も早く龍世姫

立つて踊つてシヤンシヤンと ウヅの國へと喜んで

勇んで參ります様に お守りなさつて下さりませい

一時も早く此璧 巽の池の龍神の

罪はほどけて天上に 立歸りました其如く

忽ち平癒さしてたべ 腰から上はどうもない

なぜ此足が悪いだろ ヤツパリあしき事をした

深いめぐりが來たのだろ 惡きを拂うて助け玉へ

轉輪王ではなけれ共 天にまします神様よ

地にまします神様よ カールが代つて御願

完美うまらに委曲つばらにきこし召めし 早くはや助たすけて下くださりませい

私わたしもこんな男をとこをば 連れつれにするのは厭いやなれど

旅たびは道伴みちづれ世よは情なさけ 神かみの戒いましめ恐こはい故ゆゑ

せうことなさに介抱かいほうする オツトドツコイ石熊いしくまさま

これは私わたしの冗談ぜうだんだ 瓢箪へうたんからは駒こまが出る

冗談ぜうだんからは隙ひまが出る 灰吹はひふきからは蛇じゃアが出る

一時いちじも早くはや石熊いしくまに 憑依ひょうい致いたした惡靈あくれいが

出でる様やうに守まもつて下くださんせ 此奴こいつの體からだに這入はいつた以上いじやう

キツと入口いりぐちあるである 出口でぐちの神かみさま一時いつときも

早くはや追おひ出だし下くださんせ 百人ひやくにん一首いっしゆぢやなけれ共ども

足あしを痛いためた足引あしびきの 山鳥やまどりの尾をのしだり尾をの

長々ながながしくも何時いつまで迄までも 斯かうしてゐては堪たまらない

どうで罪つみをば重かさねた男をとこ 御無禮ごぶれいの數々かずかずいつとなく

盡つくしましたで御座ございませう お腹はらの立たつのは尤もつともぢや

併し神様私の願を容れて腹立てず

足の立つよにしてお呉れ 夜明けに立つは ぢや

親と一度に生れたる 倅は見ん事立つなれど

此奴の足はどうしてか 容易に立たうと致さない

如何なる罪があらうとも 今度計りはお助けを

たつて御願申します くりや又不思議何時の間に

俺の一方の長い足 誰が盗んで歸んだのか

いつの間にやら兩足が 高低なしに揃うてゐる

かうなる上は俺とても 探長補短の融通は

コレから利かすこた出来ぬ いやまて暫し待てしばし

そんな不足は云はれない これも尊き神様が

一方の足を縮めたか 但は一方を伸ばしたか

何ぢや知らぬが嬉しいぞ 心もカールなつて来た

石熊さまよ！ これ見やれ 誠が天地に通じたら

一生病のド跛も 一つの間にやら神さまが

頼みもせぬのに氣を利かし チヤンと直して下さった

お前の足は眞直に 長い短い足だ

こんな所で腰ぬかし 立つも立たぬもあるものか

氣を引立てて立つてみよ 三五教の御教に

經と緯との御仕組 良鬼門金神の

氣勘に叶うたことなれば 錦の綾の機をあげ

天晴れ神の太柱 下つ岩根に立て通し

上つ岩根につきこらし 信仰の徳をつむならば

どんな悪魔もたてつかぬ 立てよ立て立て早く立て

立てと云うたら立たぬかい お前は餘程腰拔だ

巽の池の龍神の あの勢に辟易し

肝玉つぶして腰をぬき アタ恥かしい荒男

腰をぬかして何とする 俺のぬかすは口計り

何時もグツグツ吐す奴 黙つて居れよと何時の日か

俺を叱つたことがある

あゝ惟神々々

叶はぬなれば立あがれ

性のよくない此病

耆婆扁鵲が現はれて

忽ち直して呉れまいか

俺の言霊立所に

御兆候がなければならぬ筈

恥し乍ら是程に

言霊車を運轉し

きばつて見れどまだ立たぬ 立つた 立つた 立つた 立つた 立つたらツパ節

法螺貝吹いた其酬い こんな憂目に合ふのだろ

龍世の姫の神さまよ お前の水火に生れた子

なぜに立たして下さらぬ 私に痛うも痒ゆもない

さは去り乍ら心の中は ホンに齒痒い痛ましい

いたつて口のやかましい 此石熊も今は早

往生致して居りまする 最早慢心致すまい

改心記念に今一度 足が立つよに頼みます

衝つき立たつ船ふな戸どの神かみ様さまの御おん名なをお負おへる此この杖つゑを

力ちからにチヨツと立たつて見みよあゝ惟かむながらかむながら神かみ々々

どうして是これ程ほどお前まへの病やまひしぶとう直なほらぬ事ことだらう

未すゑ子のひめ姫ごの御ご一いつ行かう立たつて行ゆかれた其その跡あとで

氣きが氣きでならぬ二人ふたり連づれ神かみさまたつて頼たのみます

オイオイ石いし熊くま立たつて見みよ立たつて立たてない事ことはない

お前まへの心こころを引ひ立たてて誠まことの道みちを立たて通とほし

猜さい疑ぎの心こころを絶たつならばキツと此この足あし立たつだらう

たつからお前まへを眺ながめても横よこから見みても氣きにくはぬ

ハラの立たつよなスタイルだこれでは役やくに立たつまいぞ

ヤレ立たてソラ立たて早はやう立たてドツコイドツコイドツコイシヨ

轉こけつ輓まろびつ氣きを引ひ立たつてカールの後あとに跟ついて來こい

最も早はや俺おれさまは立たつ程ほどに石いし熊くまさまよ御ごゆつくり

そこで御ご隠いん居きよなされませお腹はらが立たつかは知しらね共ども

立たねばならぬ此場合

早く歸りて姫様の

お役に立つが俺の役

サアサア行かうサア行かう

ドッコイドッコイ ドッコイシヨ

ウントコ立つたり石熊さま

氣張つて立つたり石熊さま

左のお足を一寸屈め

右の御足を一寸屈め

神さま力に立つて見よ

立つに立たれぬことはない

心一つの持様だ

さらばさらばと立歸る

後に石熊只一人

石熊「オイオイカール待つて呉れ

俺達一人をこんな所に

捨てておくのは胴欲ぢや

こんな無情な事されて

腹が立たずにおかうかい

腹が立たずに濟むものか

残念至極思ひ知れ

無念の齒がみし乍らも

怒りにまぎれて兩足の

痛を忘れて立上がり

「コラコラカール一寸待て 貴様は誠に濟まぬ奴

コレから素首引抜いて 命を取らねばおかうか」と

尻ひつからげドンドンと カールの後を追うて行く。

あゝ惟神々々 神の御靈の幸はひて

カールの願も龍世姫 完美に委曲に聞し召し

助け玉ひし有難さ 足の立つたる石熊は

始めて天地の神徳を 悟ると共に逃て行く

カールの心を能く悟り 忽ち兩手を合せつつ

「コレコレカール待つて呉れ お前のおかげで立ちました

忽ち神徳現はれて 俺の體は此通り

決してお前を恨まない 一口お前に追ひついて

今の御禮が申したい たつて頼みぢや待つて呉れ

聲を限りにドンドンと 後おっかけて走り行く

カールは後を振返り

カール「ここまでムね早ムね 甘酒飲まして上げませう

ウヅの都に末子姫 捨子の姫の兩人が

首を伸して待つて御座る お前の様なヒヨツトコに

話する間があるものか 用があるなら従いて来い

ウヅの都でトツクリと お前の合點が行く様に

詳しく説明してやらう あゝ惟神々々

御靈幸はひましませ」と 二人はマラソン競争の

決勝點を競ふよに 大地を威喝させ乍ら

阿修羅の荒たる勢で 進み行くこそ勇ましき。

これぞカールが大神に 教へられたる神策を

實地に活用致したる 千變萬化の働きぞ

いよいよ茲に兩人は ウヅの都に安着し

互に胸を打割つて 慈愛の神の御心を

涙と共に語り合ひ 感謝するこそ畏けれ

あゝ惟神々々かむながらかむながら

御靈幸はひましませよ。みたまさち

(大正一一・八・一五 舊六・二三 松村眞澄録)

第一三章 都入〔八五五〕

巽たつみの池いけの曲神まががみを

神かみの伊吹いぶきの言靈ことたまに

言ことむ向やはけ和すゑこひめし末子すゑこひめ姫

捨子すてこの姫ひめを従したがひて

焼やきつく如ごとき炎天えんてんを

かよわき足あしを運はこびつつ

春はる、幾いく、鷹たかに送おくられて

草野くさのをわたり河かはをこえ

再ふたび山やまを乗越のりこえて

又またもや谷間たにまを辿たどりつつ

旅たびの枕まくらも數重かずかさね

桃上彦ももがみひこの鎮しづまりし

あななひけつ
三五教の神館

ウツの聖地の間近まで

やうや
漸く進み來りける。

まつわかひこ
松若彦は馬に乗り

みこしにちやう
御輿二挺を昇つがせつ

あまた
數多の國人引率し

かむすさのをのおほかみ
神素盞鳴大神の

うづ
珍の御子なる末子姫

すてこ
捨子の姫を迎へむと

あま
威儀を正して白旗に

あか
赤き十曜の紋を染め

かせ
風に靡かせ堂々と

ちやうだ
長蛇の陣を張り乍ら

みやこ
ウツの都の町外れ

さと
カリナの里に現はれぬ

まつわかひこ
松若彦の一行は

すゑこ
末子の姫の一行と

さと
カリナの里に出會し

たちま
忽ち馬を飛び下りて

すゑこ
末子の姫の前に寄り

まつわかひこ
松若彦 珍の都の國彦が

みこ
御子と生れし神司

まつわかひこ
松若彦は今茲に

みたま
瑞の御靈の末の御子

すゑこ
末子の姫や捨子姫

おんふたかた
御二方の御出ましを

かみ
神の御告に知らされて

あらた
新に御輿を造り上げ

茲にお迎へ申したり

殊更暑きウツの國

尊き御身を持ち乍ら

神の御爲道の爲

世人の爲とは云ひ乍ら

よくも御出まし下さつた

指折り數へて國人が

瑞の御靈の御降臨

今か今かと待侘て

喜び勇んで居りまする

尊き珍の姫様よ

從ひませる捨子様

茲にてお休み願ひます

いと慇懃に宣りつれば
末子の姫も會釋して

末子姫 尊に高きウツ館

松若彦は汝が事か

吾等一行を親切に

テル山峠の麓まで

春、幾、鷹の御三方

迎への爲に遙々と

よくも遣はし玉ひしぞ

おかげで道中恙なく

いよいよ此處へ着きました

あゝ惟神々々

尊き神の引合せ

はてしも知らぬ白雲の

メソポタミヤを立出でて 教を開く折柄に

吾等が姉妹主従は バラモン教の司等に

虐げられて棚無ししへたの 寄るべなきさの捨小舟すてをぶね

さも恐ろしき荒波あらなみに つき放されし苦しさよ

妾は幸ひ天地の 神の恵を蒙ぶりて

捨子の姫と諸共に ハラの港に安着し

テル山峠やまたうげを乗越えて 巽の池いけに潛ひそみたる

大蛇をろちの神かみを服従まつろはせ 心こころも勇いさみ身みも勇いさみ

松若彦まつわかひこの現あれませる ウヅの都みやこを當途あてどとし

いよいよ此處ここに現あらはれぬ 松若彦まつわかひこの神司かむつかさ

妾わらはは未いまだ手弱たをやめ女の 力ちから少すくなきまな娘むすめ

何卒なにとぞ宜よろしく頼たのみ入いる あゝ惟かむながらかむながら神かみ々々

神かみの教をしへに服従まつろへる 教司をしへつかさの御前おんまへに

始めて述のぶる御挨拶ごあいさつ 完美うまらに委曲つばらに聞きし召めせ

言葉静かに宣りつれば

松若彦は腰屈め

揉手し乍ら喜んで

末子の姫の御手を取り

力の限り握りしめ

松若彦「あゝ姫様よ姫様よ
いよいよ是よりウヅの國

汝が命の降臨に
いと平けく安らけく

戸ざさぬ御世と治まりて
鬼も大蛇も荒風に

吹かれて散りて影もなく
神の御稜威はいやちこに

輝き渡り玉ふべし
あゝ惟神々々

神の御末の末子姫
珍の身魂の御前に

松若彦が赤誠を
捧げて感謝し奉る

と互に挨拶を終り、麗しき森蔭に立入りて、少時息を休むる事となつた。

松若彦は詞丁寧に、末子姫、捨子姫に向ひ、腰を屈め乍ら、

松若彦「噂に高き瑞の御霊、神素盞鳴大神様の珍の御子と現れませる末子姫様、竝

にお付添ひの捨子姫様、よくマア遙々と此熱國へ御降臨下さいました。私は申すに及ばず、ウツの都の神殿に仕へ奉る神司を始め、數多の國人はどんなに喜ぶこととで御座いませう。全く私は救世主の御降臨と欣喜雀躍の餘り、二三日以前から、餘りの嬉しさに夜も碌々に休むことも出来ませなんだ。餘り俄に拵へました此御輿、お粗末では御座いますが、どうぞ是から、これにお乗し下さいまして、御入城の程偏に希ひ上げ奉ります』

と頼み入る。末子姫は首を左右に振り、

末子『折角の思召、無に致すは誠に濟まない譯で御座いますが、勿體ない、結構な神様より、足を頂戴致し乍ら、どうしても輿なんかに乗ることが出来ませう。折角乍ら是計りはお許し下さいませ』

捨子『姫様もあの様に仰せられますから、どうぞ是計りは御無用にして下さいませ。又妾は姫様の侍女として、お側近く、朝な夕なに御奉公致す婢女なれば、假令姫様が御召しになつても、妾は左様な勿體ないことは、到底出来ませぬから、悪しからず御收め下さいませ』

松若「左様では御座いませうが、あなた様の御降臨を國人が喜び、寄つて集つて晝夜の別なく作り上げた御輿で御座いますれば、どうぞ國人の至誠に免じ御乗用し下さいます様、一同に代り、たつて御願申上げます」

末子「頑固のようで御座いますが、妾の様な若い女、神徳もない者が、如何して此様な立派な、神様の御召し遊ばす御輿に乗せて頂くことが出来ませうか」

松若「貴女様は神様の御經綸に依つて、ウヅの國の司として御出で遊ばしたので御座いませう。貴女様に取つては左様な事は御考へ遊ばさないでせうが、正鹿山津見の神様が、黄泉比良坂の戦ひに、御出陣の際、私の父の國彦に向つて仰せらるる様……神素盞鳴大神様の姫御子が此國へ降臨遊ばして、宇都の國一圓をお治め遊ばす時が来るから、それ迄は汝國彦、吾館を預り能く守り居れよ、珍の御子降臨の時は、是を奉じて國の司となし、汝は左守右守の神となつて、神業に奉仕せよ……との御教示で御座いました。吾父は最早國替を致しましたが、其後を繼いだ此松若彦、父の言葉を無寐にも忘れず、珍の御子の降臨あるまでは、大切に守らねばならぬと、今日まで力の及ぶ限り守つて参りました。貴女はいよいよ此

國の女王となつて、國民を治め、又教主となつて國人を尊き神の御道に教へ導き下さらねばならぬ御役目で御座います」

末子「及ばぬ乍ら、其使命は妾も父大神より承はつて居りました。何卒宜しく御輔導の程を御頼み申します」

松若「御勿體ない其お言葉……松若彦身に取り、實に無上の光榮に存じます。至らぬ愚者なれ共、宜しく御指導下さいまして、永くお使ひ下さりませ。偏に願奉ります」

末子「御互様に宜しく願ひます」

松若「あなた様は父大神より、此國の女王とならせ玉ふことを御存じとあらば猶更の事此御輿に御乗し下さらねばなりません。決して御輿にお召し遊ばすのは贅澤の爲でも、又は樂に道中を遊ばす爲でも御座いませぬ。此世界は天地の御恩に依つて造られた以上は、天はさて置き、地には至る所に國魂神の神靈宿らせ玉へば、大地の上を踏み歩くも、吾々人民は恐れ多い次第で御座います。ぢやと申して、國人一般が大地を踏むことを恐れて居りましては、道行くことも出來ず、

耕し一つすることも出来ませぬ道理、そこで國の司と現はれます女王様は、萬民に代り、天に跼まり、地に踏して、神祇を尊敬遊ばし、國民の代表となつて、お土を御踏み遊ばさないのが御天職で御座いますから、どうぞ此處の道理を聞分け下さいまして、これより先は城下で御座いますれば、せめて城下丈なりと、お土をふまない様に、吾々に代つて御苦勞に預りたう存じます。又捨子姫様も御近侍の役、どうぞ姫様に御伴遊ばすので御座いますれば、此御輿に是非是非御乘しを願はねばなりません。此儀偏に御願申し上げます」

末子「さう承はらば、否むに由なきことで御座います。左様ならば仰せの通り、御世話になりませう。……捨子姫殿、妾が許します、否命令します、あの輿に乗つて妾が後に従ひ來られよ」

と漸く末子姫の言葉は何處となく權威を帯びて來た。捨子姫は否むに由なく、素直に「ハイ」と答へて、末子姫の輿の後より外の輿に乗せられ、數多の國人の歡呼の聲に送られ、賑々しく入城することとなつた。

ウヅの都の入口には非常な立派な門が建てられてある。末子姫は此表門より輿

に昇つがれ、行列勇ましく本城さして進み入る。通路は白砂を布き詰め、道の左
右には數多の國人、地上に跪き、救世主の降臨と涙を流し、感喜の眞情に暮れて
ゐる。いろいろの音樂の音に送られ黄昏前、奥殿に安着した。
カールは途中に石熊に追つ付かれ、茲に兩人は手に手を取つて、白砂の布きつ
めたる道を、息もせきせき城内指して進み入る。

(大正一一・八・一五 舊六・二三 松村眞澄録)

第四篇 修理固成

第一四章 靈とパン(八五六)

テルの港に安着した高島丸を乗すてて、言依別神、國依別は北へ北へと進み行く。此處には御倉山と云ふ高山があり、國人の信仰に依りて、龍世姫命を奉齋したる可なり立派な社が建つてゐる。之を御倉の社と云ふ。テルとヒルとの國境に秀立せる大山脈の最もすぐれて高き峰である。祠は御倉山の麓にあつた。さうして清き廣き谷川が飛沫を飛ばして唸りを立てて居る。言依別命は國依別と共に、先づ第一に此處に參詣した。

此谷川に限つて、御倉魚と稱する、長さ五六尺のいろいろ雑多の斑紋ある美しき魚が澤山に棲んで居る。されど國人はこれ全く御倉の社の御使と信じて、之を捕獲せむとする者は一人もなかつた。もしも此魚を取り食ふ者ある時は、忽ち口歪み、唾となり、顔面全部に青赤白黄紫萌黄などの斑紋が現はれるので、誰も之を捕獲する者なきのみならず、此魚を見れば神の如くに尊敬し、手を合せて吾願望を祈願するを常としてゐた。

此頃ヒルとテルとの國境に於ける殆んど五十里四方の地域は連日雨降らず、草木は殆んど枯葉の如く、果物は實入らず、五穀も亦一粒も取れなかつた。夫れが

爲路傍に餓孚充ち、其慘状目も當てられない計りであつた。數多の國人は御倉山の山麓に集まり、此御倉魚に向つて、饑饉を免れむことを祈願する者引きも切らず、此谷間は殆ど人を以て埋もれてゐた。

言依別命は國依別と共に此有様を眺め憐愍の情に堪へかね、如何にもして彼等が飢を救ひ、大切なる生命を保たしめむと、首を傾けて思案に暮て居る。谷底深く見渡せば、白衣を着たるウラル教の宣傳使四五人現はれて、切りに天國の福音を説き諭して居る。人々は宣傳使の前に蝟集し、空腹を抱へて、いろいろと質問を試みてゐた。

甲、細き聲にて、

甲「宣傳使様、どうして此様な饑饉が參つたので御座いませう？ 吾々等は最早生命は旦夕に迫り、死を待つより途なき者、兩親は四五日前に餓死し妻は乳兒を抱いたまま、之れ亦餓死し、後に私一人取殘されましたが、最早三日の壽命もむづかしくなつて來ました。此世を救ひ給ふ神様、眞におはしますならば、なぜ斯様な罪のない子供までが、饑餓の苦みを受けて居るのに、どうもして下さらない

のでせうか？ 私等は今日に至つて、神様の存在を疑はねばならなくなりました。
私の村は最早七八分まで、ウラル教を信じて居乍ら、餓死してしまひました。斯う
やつて此處に參つて居る人々は、御存じの通り瘦せ衰へ、何程達者な者でも、こ
こ十日の間には一人も残らず餓死をせなくてはならぬ運命におかれてる者計りで
す。どうか此苦みをお助け下さる譯には參らぬものでせうか？
宣傳使「迷へる者よ！ 汝等ウラル教の神の福音を聞け！ 人の斯世に生れ來る
や、幽窮無限の天地に比ぶれば、旦の露の短き命のみ。現世は假の浮世なるぞ、
苦みの家なるぞ、火宅なるぞ。何を苦んで現世にあこがれ、苦みを求めむとする
か。時は近づきたり、審判の時は……汝等、わが前に悔い改め、盤古大神の前に
今迄の重き罪を謝せよ。然らば汝が生命は假令飢餓死にする共、其靈魂は永遠の
花咲きみのる天國に救はれ、無限の榮樂を受け、常世の春を樂む事を得む。悔い
改むるは今なるぞ。あゝ愚なる者よ、汝等は神の國の尊きことを知らず、物質上
の欲に囚はれて、焦熱地獄の消えぬ火に焼かれて、身を苦まむとするか。天國は
近づけり、悔い改めて、救世の福音をきけ！ 神は汝と俱にあり、汝は清き神の

僕として、日夜に神をほめ稱へよ！
」

と諄々として説いてゐる。

乙 「宣傳使様、あなたの御話は誠に結構で御座いますが、吾々五人は今や瀕死の境に陥り現に地獄の苦みを受けてをります。現在目の前に戀しき父は飢に倒れ、妻亦倒れ、兄弟姉妹幼兒に至る迄、飢饉の爲に斃れ亡び行く此有様、天國に救ひ給ふは有難しとは思へ共、パンを與へ給はずば、吾等は生くるを得ず、如何なれば此慘状を神は救ひ給はざるか！」

宣傳使 「吾れは天國の福音を汝等に傳ふる聖職なり。汚れ、濁り切つたる此現世に執着せず、神の御召しの手に曳かれて、現世を後に天國に至るこそ、最上至極の樂みならむ。汝等神の國の真相を悟らば、現世を厭ひて、直に死を見ること、眠るが如く且つ甘露を嘗むるが如き法悦の喜びに充たされむ。信仰淺き者よ！汝等神に來りて神を稱へよ、神は汝と俱にましますぞ、神の御手にひかれて天國淨土に至るはこれ人生の最大目的の遂行であるぞよ」

乙 「何卒一塊の食物を與へて下さることは出來ますまいか？ あなたは神の福音

數多の信徒に向ひ、天國の福音を宣べ傳へ居たる前に宣傳歌を歌ひ乍ら進み行く。

言依別 神が表に現はれて 善と惡とを立わける

此世を造りし神直日 心も廣き大直日

只何事も人の世は 直日に見直せ聞直せ

過ちあれば宣り直す 仁慈無限の三五の

教を守らす百の神 此國人の慘状を

完美に委曲に見そなはし 飢に惱める民草の

生命を助け給へかし 其生魂は天國の

恵を如何に受くる共 今目のあたり身體の

悩みを救ひ與へずば 心は拗け魂くもり

神の御國に昇るべき 珍の身魂も忽ちに

根底の國に陥らむ 此谷川を見わたせば

所狭き迄泳ぎ居る げに美はしき御倉魚

彼等かれらに與あたへ給たまへかし
 神かみは靈界れいかいのみならず
 此世このよに住すめる人々ひとびとを
 一人ひとりも殘のこさず御惠みめぐみの
 露つゆにうるはせ永久とこしへの
 命いのちを守まもらせ給たまふなり
 三あな五な教ひけうの神司かむつかさ
 言依別ことよりわけや國依別くによりわけの
 教司をしへつかさは今いまここに
 國魂神くにたまがみに詣まうで來きて
 これの谷間たにまに寄より來きた
 飢うゑになやめる人々ひとびとを
 視みるに忍しのびず天地あめつちの
 神かみの御前みまへに請こひまつる
 神かみの使つかひの魚うをならば
 世人よびとの命いのちを保たもつ爲ため
 神かみよ！ 吾等われらに賜たまへかし
 吾われはこれより諸人もろびとに
 谷間たにまの魚うをを生捕いけどらせ
 命いのちを助たすけ與あたへなむ
 あゝ惟神かむながらかむながら々々
 御靈幸みたまさちはひましませよ』

と歌うたひ乍ながら進すすみ來きたる。此この宣傳歌せんでんかを聞きいて、ウラル教けうの宣傳使せんでんしは眼めを釣つりあげ、言こと
 依別よりわけの前まへにツカツカと進すすみ寄より、

宣傳使せんでんし「わたしはウル教けうの宣傳使せんでんしブルと申まをす者もの、只今ただいまあなたの宣傳歌せんでんかを承うけたまはらば、實じつに怪けしからぬことを仰あぶせらるる様やうで御座ござる。神かみは一切いっさいの生物せいぶつを殺ころす勿なかれと諭さとさせ給たまふ。然しかるに神かみの使つかはせ給たまふ谷間たにまの魚うをを生捕いけどり、數多あまたの人々ひとびとに食くはしめ、命いのちを助たすけやらむとの御言葉おことば……天則てんそく違反ゐはんも實じつに甚はなはだしと申まをさねばなりません。それだから三五教あななひけうの教をしへはいつ迄までも世よを暗黒あんこくに導みちびくもので御座ござる。速すみやかに神かみに向むかつて宣のり直なほしをなさるが良よからう。吾々われわれは其言葉そのことばを聞きいては聞捨ききずてなりませぬ。サア返答へんたふを承うけたまはりませう」

言依別ことよりわけ「なるほどかみ至仁しじん至愛しあいにましますれば、其御心そのみこころより生物せいぶつの命いのちを取とることを嫌きらはせ給たまふは、當然たうぜんの理りで御座ござる。さり乍ながら人ひとの生命いのちが大切たいせつか、魚うをの命いのちが大切たいせつで御座ござるか？ 能よく御考おかんがへになれば分わかるでせう」

ブル「人間にんげんは罪つみの塊かたまりなれば、生き乍ながら、地獄ぢごくの苦くるみを受うくるは當然たうぜんで御座ござる。夫それ故ゆゑに無限むげん絶對ぜつたい力りよくのおはします世界せかいの造つくり主盤ぬしばん古神こしん王わうの御德みとくを贊美さんびし、苦くるしみ、惱なやみ災わざはひ多おほき現うつし世よを捨すてて、一時いちじも早はやく天國てんごくに上のほるを以もつて、人生じんせいの本領ほんりやうと致いたすでは御座ござらぬか？ 罪つみもなき神かみの御使おんつかひの御倉魚みくらうをを取とり食くらひ、汚けがれたる人間にんげんの腹はらに葬はつむ

らむか、神罰立所に至り、永遠に地獄の苦みを受くるは、神教のきめさせ給ふ所で御座る。あなたは天が下の人民を眞に愛し給ふにあらざ、神の心に背かせ、永遠に地獄の苦しみを受けさせむとし給ふ無慈悲の御仕打、吾々は天下萬民の爲、飽く迄もあなたと主義の爲に戦はねばなりません。論より證據、此谷川の魚を取食ふ者たまたまある時は、神の怒りにふれて、天罰立所に至るは國人の既に既に知悉する所、あなたは此國の風習をも知らず、又神の掟をも辨へず、左様な亂暴な事を仰せらるるは、甚以て惡虐無道の御精神と申さねばなりません。言依別、今日は人民將に餓死せむとする危急存亡の場合なれば、如何に神の御使なればとて、仁慈無限の神の之を許させ給はざる道理がありませんか？ モシ左様な神ありとせば、取りも直さず八岐大蛇の醜神か、或は金毛九尾の惡狐か、又は曲鬼の所爲でムらう。吾々はあなたの御言葉こそ、神の御子たる人間を魔道に導き苦むる、惡虐無道の行方と思はねばならなくなりました。決して決して此魚を取り食へばとて、神罰の當るべき理由は毛頭ありません。私は斷言致しますよ。ブル、三五教の教は實に無道極まる無慈悲の教では御座らぬか。然らばあなた

試みに、斯の如く澤山な魚の中、假令小魚の一匹でも吾目の前にて捉へ食つて御覽なさい。忽ち神罰至ることは火を睹るよりも明らかかな事實で御座る。何程理窟は立派に立つても、事實其物には勝つことは出来ませぬ……サアこれでもお食りになる勇氣がありますか？」

國依別「ウラル教のブルさまとやら、何とあなたは、譯のわからぬことを云ひますなア。ウラル教はそんな狹義な教で御座いますか？ それでは誠の神様とは申されませぬ。論より證據、私が今、目の前にて、神の使と稱する御倉魚を捉へ、茲にて作り身と致し、食つてお目にかかせう。其代り萬々一、私の身の上に對し、此場に於て神罰至ることあらば三五教全部を擧げてウラル教の軍門に兜を脱ぎませう。之れに反して、私が此魚を取り食ひ何の反應もなしとせば、あなたは如何して下さる考へですか？ 先づこれから第一にお約束をして置かねばなりません。御返答は如何で御座いますか？」

ブル「それは面白う御座らう。サア美事、神の使の御倉魚、私の目の前で捕獲して取り食つて御覽なさい。何の反應もなければ、吾々はウラル教全部を引率し

て、貴教の軍門に兜を脱ぎませう」

國依別「確かですか？ キット間違はありますまいなア」

ブル「苟くも宣傳使の言葉に二言があつて堪らうか。サア早く御決行なされよ」

國依別「ヤア有難い！ 同じ事なら一つ、一番大ききさうな奴から取つて、舌鼓を

打たうかなア。ズイ分甘さうな魚だ。何を食つてゐるのか知らぬが能くマア肥太

つてゐよるワイ。……モシモシ教主様、面白い事になつて來ました。あなた能く

ブル宣傳使の言葉を腹へ入れておいて下さいませや。あゝ面白い面白い！」

と云ひ乍ら國依別は、谷川に下り立ち、水と魚と殆ど等分になつて居る數多の魚

の群に飛んで入り、三尺計りの澁漑たる斑紋の美はしき御倉魚を一尾抱えて、ブー

ルの前に現はれ來り、

國依別「どうも此奴は最も尤物と見えます。同じ神のお使でも、一寸師團長格と

云ふ代物ですから、同じ殺して食つて神罰が當るのなら、大きな甘さうな奴を平

げる方が利益ですからなア。何程靈主體從だと云つても、肉體のある限り、胃の

腑の蟲が食物を請求する。ジツとして泳へ切れるものではない。……サア、ブー

ルさま始めそこに居竝ぶ數多の人々、今三五教の宣傳使國依別が、神さまの禁じ給うたと云ふ此魚を叩き殺して作りとなし、皆さまの目前に於て、ムシヤムシヤムシヤとやつて見ませう。私が食つて神罰が當らなければ、皆さまにもキツと神罰の當るものでない。人はパンのみにて活くる者に非ずとか言つて威張つて居るどこやらの宣傳使の様に、私はそんな氣樂なことは出来ませぬよ。人は靈のみにて活くる者に非ずと、反對に云ひたくなつて來るのです。……パンなくて何のおのれが人間かな……だ

と云ひ乍ら、短刀を取出し、澆刺たる此大魚を、喉のあたりをグサと刺し、一思ひに殺し、手早く肉片を取つては頬張り頬張り、

國依別「アハ、何とも云へぬ甘い味が致すワイ。これ丈魚が無盡藏に居る以上は、五十萬や百萬の人間を養ふのは易いことだ。あゝ早く口が歪まぬかいなア、物が云へぬようにならぬかいなア、眼がつぶれさうなものだ、顔一面に斑紋がなぜ出来てくれぬのだ。出来ぬ筈だよ、神様が人間に與へて生命をつながさうと思召し、此國に限つて此魚をお造り遊ばしたのだ。斯う云ふ饑饉が來た時の用

意に、神様が食つてはならないと云つて、平素はワザとお差止めになり、蓄へておいて下さつたのだ。……モシ、ブルさま、どうで御座います。氣の毒乍ら、ウラル教は三五教の軍門に降服をなさるにやなりますまい……ヤアヤア皆の方々、決して決して驚くには及びませぬ。此通り私がお手本を示しました。神様の與へて下さつた、此餌さを頂きもせず、餓ゑて死ぬとは何の事でせう。サア早くお食りなさい」

此聲に數多の人々はヤツと安心したものの如く、矢庭に川に飛び込み、手頃の魚を抱き上げ、其場で嬉しさうに舌鼓をうつて食つてゐる。ウラル教のブル始め四五の宣傳使は何時の間にか、コソコソと此場より姿を隠して了つた。

これより、此國人はウラル教に愛想を盡かし、國魂の神の社を日夜に崇敬し、且つ三五教の固き信者となつて了つた。

言依別命は國依別に向ひ、

「私は是からテルの國を越え、直ちにウツの都に直行致しますから、あなたは此處に暫く止つて、國人に教を宣べ傳へ、それよりヒルの都に渡りハルの國を一巡

りしてウヅへ廻つて下さい。其上でゆつくり、改めて御相談を致しませう」

國依別「委細承知しました。左様ならば、是非に及びませぬ。ここでお別れ致

します。どうぞ御健勝にて御神務に御奉仕遊ばします様祈ります」

言依別「ハイ有難う」

と宣傳歌を谷の笏に響かせつつ、ウヅの國を目當てに進み行く。

國依別は御倉の社に暫く足を止め、詣り来る國人に教を傳へ洗禮を施した。是

より三五教の教は旭日昇天の勢ひとなりける。

(大正一一・八・一五 舊六・二三 松村眞澄録)

第一五章 花に嵐(八五七)

言依別命、國依別の宣傳使の理解に依りて、此地方一帯の住民は殆ど全滅せむ
としたるを、御倉魚を食することを許されてより、忽ち元氣恢復し、且つ言依別

命を始め國依別の宣傳使を神の如く尊敬し、直に救世濟民の教は三五教に若くも
のなしと、數十萬人の人々はウラル教を脱退して悉く三五教に入信して了つた。
併し乍ら言依別命は早くも此地を去りたれば、跡に國依別只一人、御倉の社を中
心として教勢忽ちに振ひ、猫も杓子も、三五教にあらざれば救はれ難し、又正し
き人間には非ざるべしとまで崇拜するに到りける。

國依別は三五教の教理を諄々として説きさとし、且つ天津祝詞や神言を教へ、
御倉の社に國治立命、豊國姫命其他の諸神靈を合祀し、崇敬の的と定めた。國依
別は、又一種の宣傳歌を作り、國人に平素高唱すべく教へ導きける。

國依別 高天原に現れませる 國の御祖の大御神

國治立大神は 普く世人を救はむと

天の御柱つき固め 國の御柱つきこらし

瑞の御靈と現れませる 豊國姫大神と

力を合せ玉ひつつ 神世を開かせ玉ひけり

あだるのひこ 天足彦や 胞場姫の 醜しこの靈みたまに現あれませる

やまたをろち 八岐大蛇や 醜狐しこぎつね 曲鬼共まがおにどもがはびこりて

よ 世は常暗とこやみとなり 果はてぬ 皇大神すめおほかみは是非ぜひもなく

ちくろ 千座の置戸おきどを負おひ玉たまひ 天教山てんけうざんの火坑くわかうより

ねそこ 根底の國くにに落ち玉たまひ 豊國とよくにひめ姫ひめと諸共もろともに

ふか 深く其身そのみを忍しのばせつ 此世このよを守り玉たまひけり。

ひめ ウラルの彦ひこやウラル姫ひめ 大國おほくにひこ彦ひこや大國おほくにの

みこと 姫の命みことの枝神えだがみは 天地四方あめつちよもの國々くにぐにを

しこ 醜しこの煙けぶりに包つつまむと 曲まがの教をしへを開ひらきつつ

よ 世を曇くもらせし 忌々ゆゆしさよ 天津御空あまつみそらに現あれませる

かむいざなぎのおほかみ 神伊奘諾大神かむいざなぎのおほかみは 妹伊奘册いもいざなみの大神おほかみと

おほぞら 大空おほぞら高く渡わたしたる 天浮橋あめのうきはしに立たち玉たまひ

どろ 泥どろに沈しづみし海原うなばらを コオロ コオロに搔かき鳴ならし

かみう 神生かみうみ國生くにうみ人ひとを生うみ 天教山てんけうざんにまします

日の出神や木の花姫の 貴の命に神業を
 授け玉ひて葦原の 瑞穂の國を開きけり
 あゝ惟神々々 神の御稜威のいや高く
 教の道のいや廣く 埴安彦や埴安姫の
 神の命と身を變へて 黄金山下に出現し
 三五の月の御教を 完美に委曲に説き玉ふ
 これぞ誠の三五の 錦の機の御教ぞ
 あゝ諸人よ諸人よ 尊き神の御光りに
 一日も早く目を覺ませ 朝日は照る共曇る共
 月は盈つとも虧くるとも 假令大地は沈むとも
 三五教の御教を 夢にも忘ること勿れ
 神を忘れし其時は 身に苦しみの來る時
 心の悩みの來る時ぞ 如何なる事のありとても
 神を忘れな三五の 道の誠に離れなよ

神は汝と俱にあり

神の御水火を受つぎし

人は神の子神の宮

神に次での第一に

尊き者ぞ人の身は

決して賤しき者ならず

曇り汚れし人の身と

教へて諭す御教が

ありと知るなら逸早く

互に心を注ぎ合ひ

邪道に陥ること勿れ

國魂神を齋りたる

御倉の山の龍世姫

大地の主と現れませる

金勝要大神の

珍の御靈の分靈

高砂島に永久に

鎮まりゐまして國人の

幸を守らせ玉ふなり

如何なる教の來る共

國魂神を餘所にして

心を曇らす事勿れ

龍世の姫を祀りたる

御倉の山の社こそ

國治立大神に

次で尊き神なるぞ

あゝ惟神々々

神の心に立返り

すべての物を慈み

互に争ふこと勿れ

神を尊び國の君

敬ひまつり世の人に

神の恵を隈もなく

輝き渡すは神の子と

生れ出でたる人草の

朝な夕なに守るべき

誠一つの務めなり

三五教の神司

國依別が此地をば

去るに臨んで國人に

記念の歌を作りおく

ア、國人よ國人よ

暇ある毎に讀み慣ひ

歌に踊りに音楽に

合して心を慰めつ

此世を守り玉ひます

皇大神の御心を

和めまつれよ此歌に

歌は天地の神靈を

感動さする神祕ぞや

世間話や無駄話

云ふ暇あらば一時も

夢にも忘れず此歌を

神の御前は云ふも更

山の上行くも又河へ

浸る時しも村肝の

心長閑に歌へかし　あゝ惟神々々

御靈幸はひましませよ　此世を造りし神直日

心も廣き大直日　只何事も人の世は

直日に見直せ聞直せ　過ちあれば宣り直す

三五教を呉々も　忘れざらまし何時迄も

世人の爲に残しおく

斯く歌を作りて、最も熱心なる信者の中にて氣の利いたるパークスと云ふ男に、
足彦と云ふ名を與へ、宣傳使の列に加へ御倉の社を守りつつ、國人に三五の教理
を説き諭すべく命じおき、國依別は又もやここを立出でて、ヒルの國の都を指し
て進み行く。

チルの里の荒しの森に差かかる時しもあれや、黄昏の暗に紛れて現はれ出でた
る四五人の男、國依別の前に大手を擴げ、

甲　其方は三五教の宣傳使、よくも吾々に恥を見せよつたなア。かく申さば別に

名乗らずとも、此方の名は分つて居る筈、サアどうぞや。如何に其方、辨舌巧なりとて、實行力には叶ふまい。尋常に手をまはすか、但はチルの溪谷に、吾々監視の下に身を投げて自滅いたすか、それも不服とあらば、吾々一同氣の毒乍ら、劍の錆となし呉れむ。いかに汝勇猛なればとて、數百人の味方を以て、十重二十重に取巻あらば、いつかないつかな、身を逃るるの餘地なかるべし。吾れは云はずと知れたウラル教の宣傳使、ブル、ユーズ、アナンの面々だ。御倉の谷間に於て神の禁じた神魚を食ひ、剩つさへ國人に残らず食はしめたる憎くき天則違反の張本人！ウラル教が數百年の努力を一朝にして水泡に歸せしめたる惡人輩、サア覺悟を致せ！

と叫ばはる聲に、自然に集まる數十人の人影、
「ワイワイ」とどよめき來る騒々しさ。國依別大口あけて高笑ひ、
「アツハ、卑怯未練な汝等が振舞、御倉山の谷あひに於て、猫に追はれし鼠の如くチウの聲さへ得あげず、コソコソと逃げ歸りたる卑怯者、かかる爲體にて、いかで神の御子たる人草を教化せむ事、思ひもよらず。汝等卑怯にも衆を恃んで、

只一人の宣傳使を苦めむとする腰拔共、見事、相手になるならなつて見よ。吾言
靈の神力に依つて一人も残さず誠の道に言向け和し、汝が奉ずるウラル教を根底
より改革しくれむ。あゝ面白し面白し

と又もやカラカラと打笑ふ。ブル、ユーズ、アナンの大將連は寄り來れる數十
人の味方に何事か合圖をなすや、一齊にバラバラと國依別に向つて武者ぶり付か
むとする其可笑しさ。國依別は「ウン」と一聲息をこめ、右手の示指を以て、彼
等一同に速射砲的に左から右へ振りまはせば、球の玉の神力を身に納めたる國依
別の靈光は一しほ光強く、何れも眼眩み這う這うの體にて逃げ去るもあり、其場
に打倒れて苦悶するもあり、恰も嵐に花の散る如く、ムラムラパツと逃げ散る可
笑しさ。國依別は此淺ましき敵の姿を見て、又もや大聲に、

「アツハ、面白し面白し」

(大正一一・八・一五 舊六・二三 松村眞澄録)

第一六章 荒しの森（八五八）

頭に淡雲を頂き 腰に霞の帯を引まはし

ヒルとテルとの國堺 大山脈の其中に

屹然として立ち 青葉の衣纏ひたる

御倉山の麓の溪流は 涼々として天然の琴を弾じ

涼風常に新鮮の空気を送る 天國淨土の此仙境も

百日百夜雨降らず風吹かず 木々の梢は萎れて

恰も枯葉の如し あゝ如何なる天の戒めか

國魂神の御怒りに出でたるか 實に恐ろしき残酷の中に

陥りし如き國人の悲哀の聲 晨に父に死に別れ

夕べに母を見えぬ境に送る 幼兒はかわける慈母の乳にすがり

悲しげに泣き叫ぶ あゝ天地の間に

神はまさずや、おはさずや

御倉山の谷川水清く

魚は澗瀨として激流を泳ぎ

人間の此苦める惨状を

夢にも知らぬ人の身の

あゝ神の子と生れし人間の

饑餧の幕に包まれて

餓鬼道の巷に迷ひ

苦める此憐れさ

人は飢に苦み

魚は洋々として清流に遊ぶ

果して何の天意ぞや

あゝ此矛盾、あゝ此悲惨よ

天地の神も見そなはせ

國魂神も國人を

守りまさずや朝夕に

空打仰ぎ地に俯し

祈りし甲斐もあらざりしや

今は手を束ね眼は閉ぢて

黄泉の國よりうとび來る

死の手に任すより

詮術もなき此悲惨さよ。

國人は老若男女の隔てもなく

國魂の社を指して

家路を後に龍世姫

谷川の邊に跪き

聲も弱りて蟲の音の

秋野にすだく如くなる

目も當られぬ悲惨の幕 切つて下ろした時しもあれや

時を窺ひ隙狙ひ 待ちに待ちたるウラル教の

神の司のブール アナン、ユーズの三人

外に二三の伴人と共に 忽ち此場に現はれて

輕生重死の教理を説きぬ されどされど人々は

今日のあたり飢に泣き 玉の緒の命も切れなむとする

今や此時この際は 如何に尊き神の教なればとて

パンを離れて神の慈愛の心 いかで肯定し得む

否定の暗は谷川の 空気を濁して物凄し

あゝ天道は人を殺さず 人生一期の九分九厘

早玉の緒の切れなむとする 其時もあれ

仁慈に充てる神の司 言依別の大教主

國依別を伴ひて 鳩の如くに降りまし

あゝ死か生か大神の心 老若男女の胸の内

谷川の水音ならで 胸のとどろき

喜びの飛沫、悲しみの波 漲りおつる瀧津瀬の

否定の涙ぞ憐なる。 ウラルの教の神司

熱辨を揮ひ 口角飛沫をとばし

切りに天國の福音を宣示す 神は靈なり人はパンのみにて

活くるものにあらず。 あゝ靈なる哉靈なる哉

生命の水にかわける者よ かわく事なく盡くる事なき

靈の眞清水に活きよ 天國は汝のものなり

大三災や小三災 ともども來る暗の世に

暇を告げて神の御國に 今や救はれむとする

審判の御手は下されたり あゝ汝等神の慈愛に活き

混濁せる下界に 心を置くなと教ゆ

あゝ何たる悲惨ぞ残酷ぞ 人はパンのみにて生る者に

あらざると共に又人の身は 靈のみにて活くる者にあらず

靈れいと肉にくとは陰陽いんやうの如ごとく

夫婦ふうふの如ごとし

ウラル教けうは靈れいを偏重へんぢゆうし

天てんに墮落だらくし、神かみに苦くるむ

現幽げんいう一致いつち、靈肉れいにく同根どうこんの

教理けうりを説とき

先まづ肉にくの惱なやみを救すくひ

靈れいを救すくふ

三五教あななひけうは是これ救世きうせいの眞理しんり

瑞みづの御靈みたまと現あれませる

言依別ことよりわけの神司かむつかき

國依別くによりわけの慈愛じあいの言葉ことば

同情どうじやうの涙なみだに

かわきたる人ひとは甦よみがへり

其肉そのにくは榮さかえ、靈れいは笑わらひ

枯野かれのの如ごとく地獄ぢごくの如ごとく

荒すさみし土つちの上うへも

此谷川このたにがはの水みづにうるほひ

肉にくに飽あき

忽たちまち地獄ぢごくは天國てんごくと化くわする

神かみは必かならずしも遠とほきにまさず

高たかきにあらず

天國てんごくの樂たのしみは眼がん前ぜんにあり

身みの内うちにあり

心こころの内うちに法悦はふえつの花はなは開ひらき

歡喜よろこびの水みづは永とこ久しへに湧わく

あゝ何なんたる神かみの慈愛じあいぞ

御惠みめぐみぞ

言依別の慈愛の涙

暗澹たる天地の暗をてらし

國依別の世を思ふ

赤き心は森羅萬象を

天津日の光りに染む

あゝ惟神々々

目のあたり天國を眺め

浄土を樂しむ

三五教が善か

ウラルの教が善か

靈に活きむとして體に死し 體に生きむとして靈に死す

かかる悲惨を天地の 神はいかでか看過せむ

靈に生き肉に活き 靈肉一致、顯幽一本の眞諦を説く

經と緯との綾錦 織り成し玉ふ栲幡姫の

操る絲のいと長く いや永久に神の榮光と

恵は神の御子と生れ 神の生宮と現れます

人々の上に下れかし あゝ惟神々々

神の御前に齎伏して まだ來ぬ先の世の中の
世人の爲に祈り奉る。 國依別は御倉山の溪間に

神かみの教をしへを説ときさとし

飢うゑに苦くるしむ國くに人の命いのちを救すくひ

永とこ久しへに變かはらず動うごかず

惱なやみもなく滅ほろびもなき

神かみの御み國くにの眞しん相さうを説とき

娑しや婆ば即そく寂じやく光くわう淨じやう土との眞しん諦たいを

人ひと々びとの眼がん前ぜんに顯けん示じし

神かみの威ゐ徳とくと慈じ光くわうに浴よくせしめ

國くに人びとの中なかより

いと秀すぐれたる

パをーとこクをスとこなる男おとこに

詳くはしく教をしへを説とき示しめし

名なも足たる彦ひこと改あらためさせ

御み倉くらの宮みや司つかさとして

數あまた多ひとの人びと々に暇いとまを告つげ

宣せん傳でん歌かを歌うたひ乍ながら

山やま傳つたひに惟かむ神ながらに身みを任まかせ

やうやうチルむらの村むら

荒あらしの森もりに差さしかかる

折をりしもウけうラルかむづ教かきの神かき司かき

御み倉くらの山やまの谷たに川がはにて

言こと依より別わけや國くに依より別わけに

神かむ退やらひに退やらはれたる

遺い恨こんを晴はらさむと

宣せん傳でん使しブせんールとつを先せん頭とつに

アかむづナかきンかき、ユかむづーかきズかきの神かき司かき

數あまた多しんの信しん徒とを使し喚そつし

天てん國こくの破はく壊わい者しやとして

十重二十重に取巻き

玉の緒の命を奪はむと

猛り狂ふ其可笑しさ

國依別は鍛え切つたる魂の

光に加へて球の玉

其靈光に身を浸し

今や神徳の現はれ時と

衆に向つて右手の指頭より

さも強烈なる

五色の靈光を發射したれば

ブル、アナン ユーズを始めとし

生命カラガラ逃げて行く。

國依別はウラル教の寄せ手の、蜘蛛の子を散らすが如く、四方に散亂した間に、暫く息を休め、荒しの森の木蔭に腰打かけて、しばし瞑想到に耽りつつ、國依別は

獨語、

「ア、宣傳使も實に愉快な者だワイ。三五教の御教に、宣傳使は一人の者と定められてある。言依別様が御倉の谷間に於て、すげなくも袂を別ち玉ひし時、何となく淋しみを感じ、且つ命の冷酷を恨んだ。併し乍ら、大教主の言葉を深く謹み、

只一言の反問さへせなかつた。併し乍ら今になつて見れば、實に一人旅位愉快なものはない。否々決して吾は一人旅にあらず、神は汝と俱にありとの神示は、炳乎として日星の如く輝き給ふ。正義に敵する仇もなく、誠を傷つくる刃もなし。あゝ面白き哉宣傳の旅！ あゝ勇ましき哉宣傳使の職掌！ 廣大無邊の大宇宙に住處とし、天地の間を跋渉する心の愉快さ！ ねぢけ曲れるウラル教の神司、信徒を、いざ是れよりは救ひ助けて、娑婆即寂光淨土の眞諦を説きさとし、現代を面白く、楽しく勇ましく、過させ、又靈魂に喜びと安きを與へ、以て神の御國を地上に建設せむ。ア、惟神、御靈幸はひましまして、天が下の青人草を、夏の木草の青々と榮ゆるが如く、笑み榮えしめ玉へ！ 國依別、天に跼まり、地に踏して、大神の御前に祈願し奉る」

と兩手を合せ、法悦の喜びを味はふ。

此時慌だしく此場に向つて走り來る二つの影があつた。國依別は此影を星明りにすかし眺め、

「ヤアそれなる人よ、吾れは三五教の宣傳使國依別なり。慌だしく何れに向つて

行き玉ふか？^{ゆ たま}」

と突然に森の木蔭より聲をかけられ、二人は忽ち大地に蹲がみ乍ら、

「ハイ私はあなたに救はれました、キジと申す者で御座います、……私はマチと

申す者で御座います。……兩親は餓死し、妻子亦饑餓に迫られて歸幽、今は吾々

兩人共、兩親妻子を失ひし不運の身の上、最早此世に生きて何の樂しみもなしと

死を決し、御倉の山の谷川に横はり死を待つ内、有難くも、あなた様御二人、何

處よりか現はれ玉ひ、吾々國人の生命を助け玉ひし有難さ。かかる尊き神恩に浴

し乍ら、其御恩も報せず、のめのめと醉生夢死するに忍びず。吾々が救はれし如

く亦世の人を救ひまつり、神恩を報ぜむと、お後を慕ひ遙々参つた者で御座いま

す。どうぞあなた様の從僕となし、お伴をさして頂きたう存じまして、ここまで

参りました。幾重にも宜しく御許しの程を御願ひ致します」

國依別は心の中に、

「ハテ困つたなア、折角一人旅の愉快を覺り、天空海闊何の氣遣ひもなく、自由

自在に神の國を跋渉せむと喜び勇んだのも束の間だ。……折角ここまで遠き山坂

を越え、慕うて来た二人の男、無下に斷る譯にも行こまい。ア、仕方がない。これも神様の御心だらう……」

と口の内に呟やき乍ら、思ひ切つた様に、國依別は二人に向ひ、

「三五教の宣傳使は一人旅するのが、神の掟である。されど今回に限り許しませう」

キジ「早速の御許し、有難う存じます」

マチ「何卒不束な者で御座いますが、宜しく御願ひ致します」

と嬉し涙に暮れる。之より國依別は、キジ、マチの若者を引連れ、ヒルの都を指して進み行く。

(大正一一・八・一六 舊六・二四 松村眞澄録)

第十七章 出陣(八五九)

秘露の國日暮シ山の山腹に廣大なる岩窟を掘り、ウラル教の靈場を作り、ロツキー山の本山と相應じて、一旦亡びかけたるウラル教も再び頭を擡げ、巴留の國の西北部よりヒル全體に其勢力を擴大して居る。此岩窟を日暮シ山の聖場と稱へてゐた。此處にはブールを教主とし、ユーズ、アナンの兩宣傳使はブールを助け、數多の宣傳使を四方に派し、大いにウラル教宣傳に力を盡しつつあつた。

奥の一間には教主のブールを始め、アナン、ユーズの二人、色麗しき香り高き林檎を堆く盛り、互に皮を剥き、舌鼓を打つて味はひ乍ら、幹部會議を開いて居た。

ブール「此ヒルの國には紅葉彦命の倅楓別命三五教を宣傳致し、其勢中々侮る可らず、加之バラモン教の石熊の一派、此頃又もや俄に頭を擡げ、吾々ウラル教の牙城に向つて突進し來り、數多の國人は去就に迷ひ、今は殆ど兩教の爲に數百年のウラル教の努力も、根底より覆へされむとしてゐる。吾々は何とかして、彼等兩教の徒を驅追せなくては、ロツキー山の本山に對し、申譯が御座らぬ。吾々が日頃唱道して居た、世の終りは近づけり、悔い改めよ、天國の門はやがて開かれ

むと、豫言せし神示空しからず、今年の此大旱魃、大饑饉、山河草木、殆ど枯死せむとする此慘状、如何なる頑迷不靈の徒と雖も、之を見て無情を感じ、現世を忌み天國を希求せざる者あらむ、此機逸す可らずとなし、國魂神を齋りたる御倉山の谷川に、數多の國人集まると聞き、遠路の所遙々宣傳の爲に、吾々出張し、大部分吾教理に服し、天國に救はれむとする折しも、三五教の宣傳使忽然として其場に現はれ、體主靈從的教理を説き、再びウラル教をして根底より轉覆せしめたる其腕前、かかる邪教を看過するは吾々ウラル教宣傳使として、教祖常世彦命に對し奉り、又ウラル彦の教主に對し、陳辨の辭なし。加ふるに、又もや荒しの森にて、昨日の如き大敗を取りしは、返す返すも殘念至極の至りではないか？…

…アナン殿、此類勢を如何にして挽回せむと思はるるか、腹藏なく述べられたいと覗く様にして問ひかけた。アナンは暫く雙手を組み、差俯向いて思案にくれてゐたが、ハタと兩手を打ち、ニタリと笑ひ、

アナン「教主殿、私に一切を御委任下さらば、三五教は申すに及ばず、バラモン教徒をして一人も殘らず歸順させて見ませう。併し乍ら此機を逸しては、到底其

目的を達することは出来ませぬ。やがてここ十日も過ぐれば、今日の天候より觀察するに、大雨沛然として降り来り、山河草木忽ちにして元の如く青々として蘇生するは鏡にかけて見るようで御座いますれば、今の内に宣傳使を殘らず四方に派遣し、國人の弱點につけ入り……汝等悔い改めざれば今や亡びむとす、今迄の心を悔い改め、ウラル教に身を任せよ、さすればやがて天に祈り慈雨をふり注ぎ、山河草木人類をして蘇生の喜びに酔はしめ、天國の樂みを再び地上に現はし與へむ、早く悔い改めよ、天國はウラル教を信ずる者の領分なり……と、此際獅子奮迅の活動を開始せば、數多の國人は今迄迷へるバラモン、三五の兩教を弊履の如く拋棄して吾教に先を争ひ、潮の如く集まり來るは目に見る如き感じが致します。どうぞ吾々に此れを一任なし下さいますれば、數多の宣傳使を使役し、宣傳使長となつて一肌脱いで見る覺悟で御座います」

ブル
成程、それも妙案だ。然らばアナン殿、宣傳の件に就いては、一切萬事御任せ申す」

アナン
「早速の御承知……否御信任、有難くお受け仕ります」

と喜色満面に溢れ、肩を怒らし、腕を振り、意氣揚々として、期する所あるもの如く雄健びしてゐる。ユーズは少しく首を傾け乍ら、

「教主殿、アナン殿の御進言は至極妙案奇策と存じますが、敵の末は根を切つて葉を絶やすとか申しまして、如何しても根本的に兩教を絶滅するには、幹部に向つて大打撃を與へなくては、到底駄目でせう。假令一時ウラル教に歸順する共、又もや、彼れ三五教の言依別、國依別の如き勇者ある上は到底完全に教義を宣布することは不可能でせう。先づ第一に焦眉の急とする所は、言依別、國依別の兩宣傳使を亡き者とし、ヒルの都の楓別命の本城に攻め寄せ、根底より轉覆絶滅せしめなくては到底駄目でせう。私の考へとしては、どうしても、枝葉の問題を後にし、此大問題たる根幹を芟除せなくてはならないと存じます」

ブル 「ユーズ殿の云はる通り、吾れも其戦法を以て最も肝要なる手段と心得る。……アナン殿、如何で御座らうか」

アナン 「然らば斯う致したら如何で御座います。此館に集まれる八十人の宣傳使を半割き、四十人を一先づヒル、カル兩國に至急派遣し、残り四十人の宣傳使

を吾々が引率し、教主殿は此聖場におはしまし、少數の役員信徒と共に、お守りを願ひ、吾々はユーズ殿と先づ楓別命の館に向つて、夜襲を試み、只一戦に滅亡せしめ、神の力を天下に現はしなば、素より體主靈從の事大主義に囚はれたる人々は、一も二もなくウラル教の權威に畏服し、歸順致すは明かな活たる事實で御座いませう」

ブル「然らば兩人にお任せ申す。何卒一切萬事に違算なき様頼み入る」
アナン「仰せ迄もなく、目から鼻へつき抜けた、智謀絶倫のユーズ殿、私が後に控えさせられての作戦計畫なれば、水一滴の遺漏も御座いませぬ。御安心下さいませ」

ブル「いやいや斯く迄勢力を四方に張つたる、楓別命又言依別、國依別のあの腕前、到底一通りにては往生致すまい。何とか神策を考究致さねば、軽々しく進んで敵の術中に陥るやうな事あらば、それこそ挽回の道がつかぬ。此點に於てブル、甚だ心許なく存ずる。一例を擧ぐれば、御倉山の溪谷に於て、數多の宣傳使が居乍ら、脆くも吾々は敗走致せし苦き經驗に徴し、容易に侮る可からざる強敵

なれば、吾々は最も深く神を念じ、神力を身に充實して進まねばなりません。智謀絶倫と聞えたるユーズ、アナンの兩將迄が只一言の言靈をも交へず、雲を霞と逃げ歸つたる無態さ、吾れは只一人ふみ止まるに忍びず、止むを得ず引返せし様な仕末なれば、果して兩人に於て、確固不拔の成算が御座るかなア。ユーズ「アハ、ハ、ハ、吾々の神算鬼謀は敵に向つて弱しと見せかけ、ワザとに敗走の體を装ひ、彼等兩人を版圖内に深く入り込ませ四方より取圍み、袋の鼠と致して本教に歸順せしむるか、但は滅亡せしめむかとの考へより退却を致したので御座る。假令三五教の宣傳使慄悍決死にして、鬼神を拉ぐ勇あり共、たかの知れた一人や二人、何の恐る所が御座いませう。これもユーズが一つの計略で御座れば、必ず必ず御煩慮なく、ユーズ、アナンの實力を御信任あらむことを希望致します。」

と諄々として愉快氣に述べ立てたり。

ブル「荒しの森の味方の敗北、たかが一人の宣傳使に對し、實に何とも形容の出来ない無念さではなかつたか。今思ひ出しても、實に腹立たしい。汝等兩人、

吾前わがまへにのみ強く、敵てきの影かげを見れば忽たちまち軟化なんくわし、所謂いはゆる陰辨慶かげべんけいの徒とにはあらざるやと、聊いささか懸念けねんせざるを得えなくなつた」

アナン「アハ、は、是これに就ついても天機てんき洩もらす可べからざる深遠しんえんなる吾々われわれの戰略せんりやく、必ずかならず御心配ごしんぱいなさいますな。キツと大勝利だいしょうりを現あらはし、お目めにかけるで御座ございませう」

ブール「然しからば、汝兩人なんぢりやうにんを信任しんにんし、一切いっさいを委託あたくする。随分ずぶん氣きを付けて呉くれ」と一ひと間まに入いつて了しまつた。後あとに二人ふたりは顔見合かほみあして、思案しあん顔がほ、

アナン「オイ、ユーズ、實じつに困こまつたことになつたものだないか。楓別命かへでわけのみことは實じつに古今ここん無雙むさうの神力しんりきを具備ぐくびする大神將だいしんしやうなり、言依別ことよりわけ、國依別くによりわけは之これ亦また不可思議ふかしぎなる力ちからを持もつてゐる。彼等かれら兩人りやうにんが放射ほうしゃする五色ごしきの靈線れいせんは、到底たうてい吾々われわれ近寄ちかよる可べからざる威力あきよくがある。又またバラモン教けうの石熊いしくまも中々なかなかもつ以ちういて注意周到しうたうな奴やつ、決して油斷ゆだんは出来できない。如ど何うしたら、千騎せんき一騎いつきの此場合このばあひ、彼等かれらを殲滅せんめつすることが出来できようかと心配しんぱいでならな

いワ」

ユーズ「それだから、俺達おれたちはユーズを利きかして、教主様けうしゆさまの前まへでいろいと言葉ことばを構かまへ、威張みばつて見みせ、教主けうしゆの心こころに力ちからを與あたへたのだ。勇將ゆうしやうの下もとに弱卒じやくそつなした。弱將じやくしやう

構かまへ、威張みばつて見みせ、教主けうしゆの心こころに力ちからを與あたへたのだ。勇將ゆうしやうの下もとに弱卒じやくそつなした。弱將じやくしやう

をして能く勇將たらしむるは、兩人の任務である。サア、アナン殿、これより宣傳使を全部引つれ、又數百人の信者を以て、先づ第一に楓別の宣傳使の館を夜陰に乗じ、襲撃することにせう。大刀竹槍の用意は出來て居るであらうか？」

アナン「大刀竹槍を使ふは變事に際してのみ用ゐることを、神明許させ玉へ共、未だ武器を以て立向ふべき時ではあるまいぞ」

ユーズ「さてユーズの利かぬ其お言葉、千騎一騎の此場合は即ち大變事のことでは御座らぬか？ 斯様な時に武器を用ゐざれば、何れの時に用ゐむや。假令敵は少數と雖も、古今無雙の勇者、到底、口先の辨舌を以て歸順せしむることは思ひも寄らざる事なれば、短兵急に暴力を以て彼等の牙城を屠むらなくては、ウラル教の休戚に關する大問題だ。危急存亡の分るる所、ウラル教國家の興亡此時にあり。……サア、アナン殿、早く決心あれ」

アナン「智謀絶倫と聞えたるユーズ殿の言葉、アナン賛成致しませう」

ユーズ「早速の御承諾、實に有難し」

と座を立ち、別室に入り、宣傳使の溜り所に在る宣傳使を吾居間に呼集め、ヒル

の館の夜襲に時を移さず着手せむ事を嚴命した。一同は一も二もなく、ユーズの言葉に服従し、武装を整へ、ヒルの都の楓別命が館をさして、數百人の部下と共に、旗鼓堂々と進み行く。

(大正一一・八・一六 舊六・二四 松村眞澄録)

第一八章 日暮シの河〔八六〇〕

あななひけう
三五教の宣傳使

くによりわけ
國依別は御倉山

やしろ
社を後に立出でて

やまかはわた
山河涉り野路を越え

やつや
漸くチルの村外れ

あら
荒しの森に辿りつき

いき
息を休むる折柄に

ひぐら
日暮シ山に岩窟を

かま
構へて教を開きたる

ひこ
ウラルの彦の其一派

ブール教主けうしゆを始めはじとし ユーズ、アナンりやうにんの兩人を
 左右さいうの力ちからと頼たのみつつ 數多あまたの部ぶ下かを引連ひきつれて
 荒あらしの森もりに出いで來きたり 國依別くによりわけを取圍とりかこみ
 只ただ一ひとつ討うちにせむものと 群むらがり來きたる可笑をかしさよ
 國依別くによりわけは泰然たいぜんと 心豐こころゆたかに口くちの内うち
 生言靈いくことたまを宣のり終をへて 琉球島りうきうたうに打渡うちわたり
 龍たつの顛あぎとの寶玉ほうぎよくを 受取うけとり球たまの神力しんりきを
 己おのが身魂みたまに納をさめつつ 天下無雙てんかむさうの神人しんじんと
 成り濟なすましたる今日けふの旅たび 數多あまたの敵てきに打向うちむかひ
 右手みぎての拳こぶしを握にぎりつめ 示指ひとさしゆびを差さし伸のべて
 押寄おしよせ來きたる敵軍てきぐんに 向むかつて靈光發射れいくわうはつしゃせば
 威力ゐりよくに打うたれて一同いちどうは 雪崩なだれをうつて逃にげて行ゆく
 國依別くによりわけは只ただ一人ひとり 脆もろくも逃にげ行ゆく敵てきの影かげ
 目送もくそうしつつ 高笑たかわらひ 神かみの威德あどくを感謝かんしゃする

時しもあれやスタスタと

現はれ来る人の影

マチ、キジ二人の信徒は

國依別の前に寄り

両手をついて語る様

私はチルの國人で

ウラルの神を奉じたる

マチとキジとの兩人ぞ

饑饉の厄に苦みて

玉の命は今日明日と

迫り来れる苦さに

國魂神を祀りたる

社の下の谷川に

神の使の御倉魚

姿を眺め手を合せ

無事安全を祈る折

ウラルの道の宣傳使

數多引つれ出で來り

輕生重死の教を説く

さは去り乍ら吾々は

肉の命のある限り

パンをば外に神の道

上なく尊くあればとて

現當利益あらざれば

やはか諾ひまつるべき

如何はせむと、とつおいつ

否定の暗に悩む折

實にも尊き宣傳使

三五さんごの月げつの御教みをしへを
御空みそらも清きよく明あきらかに

宣のらせ玉たまひて神代かみよより
神かみの禁きんぜし御倉魚みくらうを

捕とらへて食くらひ玉たまの緒をの
命いのちをつなぎ此世このよをば

天國てんごく淨土じやうどと相見あひみ做なし
尊たふとき命いのちを永ながらへて

現世げんせに永ながく働はたらけと
思おもひもかけぬ天來てんらいの

救すくひの道みちの福ふくいん音に
吾等われら一同いちどう甦よみがへり

歡喜くわんきの雨あめは忽たちまちに
涙なみだとなりて谷川たにがはに

流ながれ注そそぎし尊たふとさよ
あゝ惟かむながらかむながら神々々

かかたふとる尊しんじんき神人を
吾等われらはいかでおめおめと

此儘このまま見逃みのがしまつらむや
命いのちの限かぎり御後おんあとを

慕したひて君きみの教言をしへごと
さし許ゆるされて天國てんごくの

清きよき教をしへを四よ方もの國くに
草くさの片葉かきはに至いたる迄まで

惠めぐみの露つゆを與あたへむと
吾等われら二人ふたりは謀しめし合あひ

故郷こきやうを後あとにしとしとと
御後おあとを慕したひ來きたりけり

國依別の神司くによりわけ かむつかさ 何卒吾等が願をばなにとぞわれら ねがひ

清く許させ玉へかしきよ ゆる たま 大御恵みの萬分一おほみめぐ まんぶいち

酬いまつらむ吾々がむく かわれわれ 固き心は千代八千代かた こころ ちよちよ

五六七の世まで變らじとみろく よ 心定めし益良夫のこころさだ ますらを

誠受けさせ玉へよとまことう たま 涙と共に頼み入るなみだ とも たの い

國依別は稍暫しくによりわけ ややしほ 思案にくれて居たりしがしあん みる

あゝ是非もなし是非もなしあゝ ぜひ ぜひ 神の教の取次はかみ をしへ とりつき

一人の旅と大神のひとり たび おほかみ 定め玉ひし道なれどさだ たま みち

汝が切なる其願ひなれ せつ そのねが 無下に斷る由もなしむげ ことわ よし

然らば吾に從ひてしか われ したが 三五教の御爲にあななひけう おんため

皇大神の御尾前にすめおほかみ みをさき 仕へまつれよマチ、キジよつか

天津大神國津神あまつおほかみ くにたまがみ 國魂神に相誓ひあひちか

汝が願ひを許すべしなれ ねが ゆる あゝ惟神々々かむながらかむながら

御靈幸はひましませとみたまさち 生言靈を宣りつればいくことたま の

マチ、キジ二人は雀躍し
神に任せし此體

假令野の末山の奥
千尋の海の底迄も

神に仕へし神司
國依別の宣言は

一つも背かず村肝の
心に銘じて守らなむ

あゝ惟神々々
神の御蔭に預りて

今日は嬉しき旅の空
國依別の生宮が

御弟子となりて仕へ行く
天地開けし始めより

誠の神に巡り合ひ
恵の露にうるほひて

夜露に宿る月影を
伏し拜みつつ進む身の

吾等は如何なる果報ぞと
喜び狂ふぞ勇ましき。

キジ、マチの新人信者は國依別に従ひ、ヒルの都を指して、涼しき夜の道を喜び
び勇んで進み行く。日暮シ山の溪谷より流れ來る大河の邊に辿り着いた。廣き河
中に清流ゆるやかに流れて居る。されど永日の早魃に河水は細り、今は川の一方

のみ帯の如く、水が、お定目的に流れて居た。國依別は立止まり、
國依「ヤア、之が有名な日暮シの河だなア。随分に廣い河だが、此頃の大旱魃に
て河水も餘程減じたと見える。これ許りは人間として如何ともすることが出来な
いなア」

キジ「宣傳使様、此川上には日暮シ山の靈場と云つて、ウラル教の一派が大なる
岩窟を掘り、其處に盤古神王の靈を祀り、非常な勢力で御座いました。が、テルの
國の高照山の麓にバラモン教の石熊と云ふ宣傳使が現はれ、非常な勢力にて、ウ
ラル教の勢力範圍に喰ひ入り、數多の信徒を作りました爲、此頃では餘程衰頹し
た様子で御座います。此間御倉山の谷川に現はれ、あなたの言靈に辟易して逃歸
りたる教主のブルと云ふのが、此水上なる靈場に割據して居ります」
國依「あゝさうであつたか。随分難所だらうな」
キジ「非常な難所で御座いますが、いつも此日暮シ川は清い水が深くゆるやかに
流れて居りますので、其山麓まで帆かけ舟が参ります。さうして交通を圓滑にや
つてみました。が、斯う川に水がなくなつては、大變に不便で御座います。私も一

二回、ウラル教の信者として参拜した事が御座いますが、それぞれは實に立派な岩窟で、目も届かぬ様な廣いもので御座います」

國依「一度探険に往つて見たいものだなア」

マチ「そりや餘程面白いでせう。あなたを桃太郎とし、キジ公が雉子の役をつとめ、私はマチと云ふ名のついた犬になつて御案内を致しませう。併し猿の役をつとめる者がないので、一つ困りましたなア」

國依「アハ、ハ、ハ、そりやよい思ひ付きだ。併し随分遠いだらうな」

マチ「里程は人の噂に依れば、八里だとか、十里だとか、中には十三里あるとか、マチマチの噂ですから、其中を取つて先づ九里位にして置いたら如何でせうなア」
キジ「そんな道寄りをやつてゐますと、ヒルの都へ行くのが遅くなります。何れヒルを済まして、ゆるゆるお越しになつたら如何でせう、猿の役を勤める者が又ヒルの都で出来ませうから……」

國依「あゝそれも良からう。どつさりと金銀珠玉、珊瑚樹、瑪瑙、【しやこ】などあらゆる寶玉を満載して、桃太郎の凱旋も面白からう」

と笑ひ話に耽つてゐる。

斯かる所へ川上の方から、月の光に瞬き乍ら、幾十旒とも知れぬ白旗に、三葉葵の紋を赤く染め抜いて、夜風に靡かせつつ、幾百とも知れぬ人影、蜈蚣の陣を張り乍ら川に沿ひ、足許騒がしく、忙しげに此方に向つて進み来る一隊があつた。これぞアナン、ユーズの引率せるウラル教の宣傳使、信徒の一團がヒルの都に向つて攻め行く途中である。

(大正一一・八・一六 舊六・二四 松村眞澄録)

第十九章 蜘蛛の兒(八六一)

幾十旒とも分らぬ白旗を夜の風に翻し、旗鼓堂々と、川の堤の兩方より進み来る數百の集團を眺めて、國依別は打笑ひ、

「アハ、ハ、ハ、マチさま、キジさま、面白くなつて來たぢやないか。昨夜荒しの

森で數百人のウラル教の連中、吾々一人を十重二十重に取巻乍ら、脆くも國依別の言靈に吹散らされて、雲を霞と逃去つたウラル教の手合が、今度はどうやら武裝を整へ捲土重來の擧に出よつたらしい。なんと愉快な事が出て來たものだ。お前達兩人は、入信記念の爲に一つ南北に分れて、兩方の敵に當り、縦横無盡にかけ悩まして見たら如何だ。其代りに國依別が無限の神力を與へるから、萬々一お前達の不利を見たならば、球の玉の神力を以て、敵を射倒して了ふ成算が十分に

あるから、試験的にやつて見やうではないか？

キジ「願うてもなき其お言葉、私もテルの國に於ては相當に、神力はなければ、腕力並ぶ者なしと言はれて居る豪傑ですから、こんな面白い機會はありますまい。如何なる武器を以て攻め來る共、此腕一つあれば大丈夫です。何卒私を其任に當らして下さい」

マチ「私はキジの様な力は有りませぬが、氣轉を利かす段に於ては、決して人後におちない積りです。そんなら兩人が此川の南北に分れ、一つ奮戦激闘をやつて見ませう。あゝ面白い面白い、天運循環し來つて、優曇華の花咲き匂ふ春に會う

たる心地がする」

と力瘤だらけの腕をまくり、ブンブンと振りまはし、撚をかけて居る。

國依「そんなら兩人、一つやつて見よ……國依別は司令長官になつて、此丸木橋

の上から戦況を調べる事にせう。あゝ良い月だ。こんな愉快な事は、滅多にある

ものぢやない。併し乍ら成るべくは、兩人敵の生命をとらない様にしてくれ」

キジ「宜しい、一人も残らず此空川へ放りこみ、人間の山を築いてお目にかけま

せう」

斯く云ふ間、ウラル教の大部隊は最早間近くなつて來た。マチは北側を、キジ

は南側の草の中に身を潜めて、敵の近付くのを今や遅しと、腕を唸らせ、片唾を

呑んで控えてゐる。

南の一隊はアナン之を率ゐ、北側の一隊はユーズ之に將として、勢ひ凄まじく

川邊を下り來る物々しさ。マチは忽ち敵前に塞がり大音聲、

マチ「ヤアヤア、ウラル教の宣傳使、それに従ふ小童共、よつく聞け！ 吾こそ

は三五教の宣傳使、言依別命、御倉山の谷間に於て、此方が言靈の神力に泡を吹

き、脆くも逃げ去つたる弱武者共、サア吾々は神勅に依つて、汝が茲に數多の人々を引きつれ、武器を携へ、攻め下り來る事を前知せしを以て、汝等一人も残らず素首を引抜き、汝の最も希求する靈の國、天國へ引導を渡してくれむ。覺悟を致せ！」

と唝鳴り立てた。ユーズは藪から棒の、どこともなく權威に充された此言靈に辟易し、數多の部下を率ゐ、堂々とここまで進み來れる手前退却もならず、轟く胸を無理に押へ、

ユーズ「ナ、何と申す。汝は體主靈從の邪教を奉ずる言依別命なるか。如何に獅子王の勢あればとて、雲霞の如き大軍に向つて、如何に孤軍奮闘すればとて、汝の力の及ぶ所にあらず、要らざる事を致して、命をすてるよりも、神妙に吾軍門に降れ」

マチ「ナニ猪口才千萬な、汝こそ某が前に閉口頓首して罪を謝し、貴重なる生命を無事に持つて歸れ。汝等は天國に至る事を無上の光榮とする者ならば、一人も残さず、靈の國へやつてやるのはいと安き事なれ共、さう致しては懲戒にならぬ。

汝の最も忌み嫌ふ娑婆世界に置いて苦めてやらむ、覺悟を致せ。アハ、ハ、ハ、ハ、
ユーズ「何と其方は妙な事を申す奴、人間は生命が大切だ。肉體なくして神業が
勤まると思ふか。馬鹿を申せ、汝こそ今某が、生命をとり、地獄の引導を渡して
くれむ、覺悟致せ……ヤアヤア者共、言依別に向つて斬つてかかれよ」
と采配ふつて下知すれば、數多の部下はマチ一人を取まき、斬つてかかる。向う
は大勢、此方は只一人、すばしこくも體を躲して、草の茂みに隠れて了つた。大
勢はあわてふためき、互に刃に火花を散らし、ケチンケチンと同士打を始めてゐ
る其可笑しさ。

又一方南岸に向うたキジは、アナンの引率せる一部隊に向ひ、叢より忽然と現
はれ、大音聲、
キジ「ヤア其方はウラル教の宣傳使であらう。吾こそは三五教の神司國依別なる
ぞ。飛んで火に入る夏の蟲、能くマア出て來よつたなア。サア是より此方の發射
する言靈の彈丸を浴びて、汝の最も忌み嫌ふ現界を棄て天國に救ひ與へむ。どう
ぢや嬉しいか」

と嗚鳴り立て、大聲で人もなげに笑ひ出した。アナンは國依別と聞いて、心戦き乍ら、空元氣を出し、

アナン「アハ、ハ、何と申す、國依別、敗けたと見せかけ御倉山の谷川に於て逸早く姿をかくし、又荒しの森に於てワザと敗軍を装ひ、汝をここにおびきよせむとの吾等が計略、うつかりと出てうせた癡呆者。モウ斯うなる上は百年目、神妙に吾軍門に降るか、ゴテゴテ吐さば、汝が素首引抜いて天下の害を絶ち、汝が身魂を地獄に追ひおとしくれむ……サア部下の者共、國依別に向つて斬りつけよ」と下知すれば「オウ」と答へて數多の人數、竹槍をすぎき、キジ一人を目當に突込み來る。キジは大手を擴げ、來る奴來る奴、ひつ掴んでは日暮シ川にドツと許り投げ込み、瞬く間に數十人の人山を築いた。

此方のユーズの部下は何れも長劍を以て戦ひ、南方のアナンの部下は何れも竹槍を以てキジ一人に向つて戦つてゐる。されどキジの手に掛つて、最早數十人は河中に投込まれ、腰を打ち、足を推き、痛さに身動きも得せず、慄ひ戦いてゐた。國依別は丸木橋の上より指をさし伸べ、サーチライトの如き靈光を發射して、此

域を射照らしてゐる。アナンは最早叶はじと思ひきや、采配を打ふり打ふり、
アナン「退却！ 退却！」
と連呼し乍ら、散り散りバラバラに算を亂して敗走する。
此方ユーズは味方の同士打に度を失ひ、止むを得ず采配を打振り、又もや南方
のアナンに倣つて「退却！ 々々！」と號令する。此聲にユーズの部下は思ひ思
ひに元來し道を先を争ひ逃げて行く其可笑しさ。マチは之を眺めて高笑ひ、
マチ「アハ、ハ、ハ、脆いものだなア。俺もこれ丈の神力が出るとは思はなかつた
が、實に不思議だ。これも全く三五教の神様の御神徳、次いで神様のお使ひに
なる神魚を食つた爲でもあらう。實に有難いものだなア。ドレドレ國依別様に戦
況を詳さに報告せねばなるまい。それに付いても何處ともなく、強烈なる光の現
はれた時、敵の光に打たれて狼狽する様は實に痛快であつた」
と獨言ちつつ、國依別の傍に意氣揚々として歸つて來た。
南方に向うたキジも亦勝ち誇つたる面色にて、力瘤だらけの腕を打ふり乍ら歸
り來り、

キジ 「宣傳使様、實に有難う御座いました。生れて以來、斯様な愉快な事は御座
いませぬ。戦ひの最中、あなたより強烈なる靈光を送つて下さつた時の其氣強さ、
面白さ、いやモウ終生忘る可らざる愉快な印象を與へられました。アハ、ハ、ハ、」
國依 「ヤア兩人共、天晴れ天晴れお手柄だつた。あれ丈の勇氣があれば、最早三
五教の布教者としても大丈夫だ。國依別も幸福だ。何と良い弟子が出来たものだ
なア」

キジ 「本當に仰有る通り、古今獨歩の神力充實せるあなたに對し、斯様な英雄豪
傑がお弟子になるのも全く神様のお引合せでせう」

國依 「アハ、ハ、ハ、隨分吹く事も吹きますねえ。ヤア面白い面白い、それ丈の氣
概がなくは駄目だ」

マチ 「私だつて、ヤツパリあなたの御家來として餘り不適當な者ではありませんま
い。どうです宣傳使様、あなたの御感想は……」

國依 「アハ、ハ、ハ、何ちらも擔いだら棒が折れる様だ。力に甲乙が無くて面白い。
マア是からは慢心をせない様に心得て、神界の爲にドシドシと盡して貰はうかな

マチカ神カミが表オモテに現アラはれて 善ゼンと惡アクとを立タテ別ワける

三五アハナヒケウ教カウの御教オンカウ 實地ジツチの誠マコトを居イ乍ナらに

味アヂはひ見ミたる嬉うれしさよ ウラルの神カミの御教オンカウは

人ヒトの弱ヨワきに附ツけ入イりて 神カミの天國テングク楯タテとなし

或あるは脅おどし叱しかりつけ 吾國わがくに人を無理むりやりに

彼かれが教カウに引ひ入いれる 四方よもの國人くにびとおどろ驚おどろいて

何いづれも心こころに合あね共ども 止やむを得えざれば入い信しんし

心こころを詐いつはる偽にせ信しん仰かう 池いけに浮うかべる浮草うきくさの

昨日きのふは向むかうの岸きしに咲さき 今日けふはこちらの岸きしに咲さく

無理むり往生わうじやうの此教このカウ いかでか花はなの開ひらくべき

何時いつか木實このみの結むすぶべき 吾國わがくに民たみは飢うゑに泣なき

咽喉のどもかわきて朝夕あさゆふに 此世このよを歎かこつ折柄をりからに

靈主れいしゅ體たい從じゆうを標榜へうぼうし 苦くるしき此世このよは假かりの世よぢや

至美しびと至樂しらくの天國てんごくへ 災多わざはひき現世うつしよを

捨てて神國へ昇り行け などと教へる醜の道
困りぬいたる時もあれ 恵みの雨は降り來り
吾等國人一同は 蘇生の思ひをなしにけり
其神恩に酬いむと 荒しの森に驅け來り
神の柱と現れませる 國依別の御前に
心の誠を明かしつつ 今日嬉しき弟子の數
喜び勇み進む折 ウラルの教の神司
ユーズ、アナンが數百の部下を引つれ降り來る
あゝ惟神々々 限りある身の吾力
試すは今や此時と 日暮シ河の北堤
ユーズの率ゆる一隊に 向つて珍の言靈を
いと爽かに宣りつれば 敵は怒つて劍太刀
月の光に閃かし 前後左右に攻めかくる
心得たりと身をかわし 草葉の蔭に身を忍び

敵の様子を伺へば 心の曇りし盲共

味方と味方の同士打 剣光閃く面白さ

折しもあれや國依別の 貴の司が靈光を

天津日の如射てらせば 流石のユーズも辟易し

總體崩れて蜘蛛の子を 散らすが如く逃げて行く

此有様を打眺め 吾れは思はず吹出し

心も勇み腕は鳴り 悠悠騒がず橋の邊に

歸り來りし面白さ 國依別に從ひて

丸木の橋を打渡り 夜露に月の宿る道

涼しき風に送られて 夜なきヒルの神館

楓の別の現れませる 聖地へ進む嬉しさよ

あゝ惟神々々 御靈幸はひましまして

マチとキジとの兩人が 心を清め身を淨め

神の御爲國の爲 世人の爲に眞心を

盡させ玉へ天津神

國津神達八百萬

國魂神の龍世姫

御倉の宮の御前に

赤き心を現はして

遙かに感謝し奉る

あゝ惟神々々

御靈幸はひましませよ

キジは又もやマチの歌に勵まされて、足拍子に合せ歌ひ始めた。

キジ 『俺の在所はチルの國 御倉の山の峰つづき

村の難儀を見るにつけ 神の恵みを蒙りて

飢に苦む人々を 救ひ玉へと谷川に

現はれ祈る折柄に 天の八重雲掻き分けて

降りましたる神人の 生言靈に助けられ

瀕死の境に陥りし 數多の人々忽ちに

飢を充たして甦り これぞ誠の救世主

吾等の父か母神か

此高恩の萬分一

報い奉らでおくべきか

御後を慕ひ逸早く

御目にかかり鴻恩の

萬分一に報いむと

マチと語らひ山坂を

一散走りに乗越えて

木々の花さへチルの村

荒しの郷に来て見れば

實に有難き宣傳使

天津祝詞を宣らせつつ

木蔭に憩ひ玉ひたる

其御姿を伏し拜み

歡喜の涙にくれ乍ら

御弟子の數に加へられ

心勇みて日暮シの

河の畔に来て見れば

思ひがけなきウラル教

ユーズ、アナンの宣傳使

劍抜き持ち太刀槍を

林の如く立て竝べ

三葉葵の白旗を

風に靡かせ堂々と

進み来るぞ面白き

國依別の御許しに

われはアナンの一隊に

喜び勇み立向ひ

生言靈を宣りつれば 頑迷不靈の曲神は

情容赦も荒風に 旗を靡かせつきかかる

工、面倒と四五の 敵を忽ち驚掴み

日暮シ河に投げ込めば アナンの司を始めとし

ウラルの教の一隊は 總體亂れ崩れ出す

折柄照らす靈光に 旭に露の消えし如

命カラガラ失せて行く あゝ惟神々々

神の力を目のあたり 目撃したる尊さよ

日暮シ河を打渡り 神の司に従ひて

物騒至極の夜の道 互に戦功誇りつつ

露ふみしめて進み行く 東の空は茜して

心の空も照り渡り いと爽かな朝風に

吹かれてヒルの神館 靈地を指して進み行く

身の上こそは楽しけれ あゝ惟神々々

御靈幸はひましませよ
朝日は照るとも曇るとも
月は盈つとも虧くるとも
キジの命のある限り
三五教の御爲に
不惜身命どこ迄も
神の教に従ひて
普く世人を惟神
尊き教に救ひなむ
天と地との大神は
吾等を深く守ります
吾は神の子神の宮
なりとの眞理聞きしより
此世に人と生れたる
其天職を悟りけり
神の御爲世の爲に
盡さにやおかぬキジの胸
マチの心も其通り
國依別の神様よ
完美に委曲に聞き召し
いや永久に吾々を
正しき神の御教に
厚く導き玉へかし
あゝ惟神々々
御靈幸はひましませよ
』

と歌うたひ乍ながら、ドシドシと白しろみかけた空そらを、勢いきほひよくヒルの都みやこを指さして立たち向むかふ。

(大正一・八・一六 舊六・二四 松村眞澄録)

第五篇 山河動亂さんかどうらん

第二章 神王の祠しんわうのほら (八六三)

國くに依より別わけ一いつ行かうは足あしに任まかせて、旭あさひを浴あび乍ながら、東とう南なんに向むかひ前ぜん方ぼうに突つき當あたつたアアラシカ
山やまの大おほ峠たつげをソソロソソロと登のぼり始はじめた。此この地ち點てんは最も早はや今こん年ねんの早かん魃ぼつにも遭あはず、極きはめて安あん
全ぜんにして、山やま々やまの草さう木もくは色いろ美うるはしく、旭あさひに照てり輝かがき、活いき々いきとして居ゐる。一いつ行かうは心こころ
も勇いさみ、何なんとなく愉ゆ快かいげに此この急きふ坂はんを知しらず知しらずの間あひだに半はん日にちを費つひやして、峠たつげの頂ちやう

上に達した。

東北を眺むれば、ヒルの都は細く長く帯の如く人家が竝んで居る。戸數に於て殆ど二三千計りの、此時代に取つては大都會である。又西南を瞰下すれば、ウル教のブールが立籠りたる日暮シ山は手に取る如く、青々と緑の衣を被り、八合目以上は雲に包まれてゐる。

キジは國依別に向ひ、

「モシ、宣傳使様、あの未申の方向に當つて白雲の帽子を着てゐる高山が、例の日暮シ山で御座いますよ。随分景勝の地點を選んだものですなア。三方山に圍まれ、一方に日暮シ河の清流を控え、四神相應の地點だと云つて、ウル教の連中が非常に誇つて居る所で御座いますよ。ヒルの都はあの通り、茫茫たる原野の中に築かれてありますから、大變に便利は宜しいが、要害の點に於ては、日暮シ山に比ぶれば、非常に劣つて居る様ですなア」

國依「成程ウル教も恰好な地點を見付け出したものだなア。併し此頃の様に肝心の日暮シ河がああの通り涸切つて了つては、交通の點に於て最も不便であらう。

何事も一利あれば一害ある世の中だから、吾々なれば矢張り都の方が餘程氣に入るよ」

マチ「氣に入ると云つたら、此涼風、暑い坂を汗タラダラと流して登り詰め、山上に息を休めて四方の景色を見晴らし、浩然の氣を養ふ吾々は、實に天國へ登りつめた様な心持になつて來ました。何と云つても人は高山に登り下界を見下すに限りまずなア。コセコセと狭い谷間に潜んで、日々何とかとか云つて騒いで居るよりも、時々山登りも又愉快なものです」

國依別は、

「サア皆さま、参りませうか」

とスタスタと坂路を降り行く。二人は「もう少し休みたいなア……」と小聲に囁き乍ら、已むを得ず後に従ひ、急坂を下りて行く。

見れば坂路の傍に一つの祠が建つて居る。樟の大木は二三本天を封じ此祠に對し、雨傘の役を勤めて居る。ふと見れば、面やつれのした妙齡の女、社前に跪き何事が切りに祈願をこめてゐる。マチ、キジの兩人は早くも之を認め、

「ヤア宣傳使様、アレ御覽なさいませ。あすこには常世神王を祀つた祠が御座います。さうして何だか一人の女が荐りに祈願して居るやうですが、一つ立寄つて様子を聞いて見ませう。此淋しい山路、若い女の身として、此祠へ参つて來るのは何か深い曰く因縁が無けねばなりませんまい」

國依「ア、成程、古い社が立つてゐるなア。實に立派な楠が榮えて居る。これ位な大木にならうと思へば數千年の星霜を経て居るであらう。吾々の様に二百歳や三百歳で死んで了う弱い人間と違つて、數千年の壽命を保ち、尚青々として枝葉を繁茂させ、所在暴風雨に對し依然として少しも騒がず、此高山に生活を續けて居る楠は、實に偉いものだ。これを思へば植物位偉いものはない様な氣がするネ。樟の木に靈あり、且言語を發するならば、遠き神代の有様を聞かして貰ふのだけれど、併しそれも仕方がない」

マチ「モシモシそれはさうと、あの女を御覽なさい。随分瘦衰へて居るぢやありませんか？ 兔に角祠の前へ立寄つて調べて見たら如何でせう」
國依「兔も角神様に参詣した序に尋ねて見るもよからうよ」

と云ひ乍らツカツカと祠の前に進みよる。三人は祠の前に跪き拍手再拜、天津祝詞を清く涼しく奏上し終り、傍の長き石に腰打掛息を休めた。

キジは祠前に跪き何事か切りに、落涙と共に祈つて居る女の側近く寄り、いたいたしげに脊を撫でさすり乍ら、

キジ「モシモシ、何處の御方か知りませぬが、大變な御信仰で御座いますな。此

お社は、常世神王様の御神靈が御祀り申してあると云ふことで御座いますれば、

貴女がここへ御参りになつてることを思へば、大方ウラル教の御方でせうネ。か

よわき女の只一人、此高山の祠に詣でて御祈りをなさるのは、何か深き御様子

ある事と御察し申します。吾々の力に及ぶ事なれば、何とかして御相談に乗つて

あげたいと思ひますが、どうか御差支なくば、大略丈なりとお話下さいませ。及

ばず乍ら御力になりませう」

此同情のこもつたキジの言葉に、女は漸く顔をあげ、

「ハイ、私はアラシカ山の山麓に住居いたすエリナと申す者で御座います。私の父は、ウラル教の宣傳使でエスと申しますが、一ヶ月以前に三五教の宣傳使様が

御立寄りになり、いろいろと尊きお話を父と共に、夜中遊ばした結果、父も非常に喜びまして、四五日の間其宣傳使を吾家に止めおき、ウラル教の信者にも三五教の美點を説き聞かせ、神様の御神徳を受けて、大變に喜び勇んで居りました。所が此事忽ち日暮シ山の岩窟に聖場を立ててウラル教をお開き遊ばす、云はばヒルの國に於けるウラル教の總大將、ブールの教主の耳に入り、至急吾父のएसに參れとの御使、父は喜び勇んで、其靈地へ參りましたが、其後は何の音沙汰もなく非常に母と共に心配を致して居りましたが、四五日前にウラル教の宣傳使が尋ねて來られ、एसさまは三五教の宣傳使を自宅に宿泊させ其上ウラル教の信者に對して三五教を説き勧めたと云つて、日暮シ山の岩窟内の暗き水牢に投げ込まれ、大變な苦しみを受けて居られる、お前達も妻子たる廉を以て、何時召捕りに來るかも知れないから、氣を付けよと、祕密に知らして呉れた親切な方がありました。母はそれを聞くより忽ち癩氣を起し、重き病の床に臥し、日に日に體は弱り果て、見る影もなく瘦衰へ、一滴の水も食物も喉を越さず、此まま死を待つより外に途なき悲運に陥つて居ります。それ故私はウラル教の教祖常世神王様の祠に日々詣

でまして、父の危難を救ひ、母の病氣を助け玉へと、祈つて居るので御座います
と涙片手に包まずかくさず事情を物語る。

キジ「それはそれは、承はれば實にお氣の毒です。私も今迄ウラル教の信者で日
暮シ山の靈場へは、二度計り参拜した事もある位で御座いますが、實にウラル教
は、今となつて考へて見れば殘虐な教ですよ。人の死ぬ事を何とも思はず、天國
へ救はれるのだから、無上の光榮だなんて、譯の分らぬ事を教へるのですからた
まりませぬワ。併し乍らあなたの御父上が三五教の宣傳使を四五日も御泊めにな
つたと云ふのは、ウラル教に愛想をつかし、三五教の美しい所をお悟りになつた
結果でせう。コリヤ、キツと因縁があるに違ひない。こんな所でこんな御話を聞
くのも、神様のお引合せに違ひない。必ず必ず御心配なさいますな。キツと吾々が
御父上や御母アさまを助けて上げませう」

エリナ「どこの御方か知りませぬが、初て會うた此私に、御親切によく云つて下
さいます。何分にも憐な私の今日の境遇、どうぞ御助け下さいませ」

と手を合せて、涙乍らに頼む憐れさ。

國依「モシ、エリナさまとやら、必ず御心配なさいますな。吾々一同がキツとお父さまを、如何な水牢の中からでも、日ならずお助け申して、あなたの宅へ送り届けませう」

エリナ「ハイハイ、有難う御座います。何分宜しう御願致します。……あなたは、さうしてウラル教の宣傳使様で御座いますか」

國依「イエイエ、吾々は三五教の宣傳使國依別と申す者、今此處に居る兩人は、チルの國の方で、キジ、マチと云ふ非常な豪傑ですよ。キツと助けて上げますから、機嫌を直して早く家路に歸り、お母アさまにも安心させて上げなさい」

エリナ「ハイ、有難う御座います」
と嬉し涙にくれ、地に伏して泣いて居る。

國依「キジ、マチの兩人、御苦勞だが、モ一度ウラル教の靈場へ引返し、モウ一戦を始め、エスさまを救ひ出して來ようぢやないか？」

キジ「ハイ、それは大變に面白いでせう。併し乍ら、たかの知れたブルやユーズにアナンの如き木端武者が大將株をして居る様なウラル教へ、宣傳使にワザワ

ザ往つて貰ふのは實に畏れ多いぢやありませんか。あんな者は吾々一人にて餘つて居ります。どうぞ私一人を日暮山に差向けて下さい。さうしてマチはエリナさまに従って行き、お母アさまの病氣を鎮魂して直して上げる役となり、宣傳使様は之よりヒルの都へお越しになり、吾々が芽出たく凱旋して歸る迄、待つてゐて下さいませぬか？」

國依「随分偉い元氣だが、必ず油斷は出来ないぞ。夜前大勝利を得たからと云つて、何時迄も勝つ計りにきまつたものぢやない。随分氣を付けて、兩人共一時も早くエスさまを救ひ出す様に御苦勞にならうかな。エリナさまは私がヒルの都へ行く途中だから、お宅迄送り届け、お母アさまの大病を治しておいて、ヒルの都へ行くことと致しませう」

キジはニタリと笑ひ乍ら、

キジ「宣傳使様、中々拔目がありませぬなア」

と心ありげに笑ふ。

マチ「きまつた事だ。神様のお道に一分一厘、毛筋の横巾も拔目があつて堪るか

い。お前こそ今度は拔目なく、氣を付けて行かないと、思はぬ失敗を演ずるぞよ
國依「マチさまも是非同道を願ひますよ。どうもキジさま一人では心許ないから
なア」

キジ「宣傳使様、餘りひどいですな。高が知れたウラル教の靈場、私一人にて喰
ひ足らぬ様な氣分が致して居ります。マチの様な男、連れて行くのは何だか足手
纏ひの様な氣が致しますけれど、あなたの御命令とあらば伴れて行きます。……
コレ、マチ、貴様は餘程果報者だ。征夷大將軍キジ公の副將となつて行くのだけ
ら、さぞ光榮に思つてゐるだらうなア」

マチ「アハ、何を吐かすのだ。餘り調子に乗つて失敗をせぬ様にせよ。……
そんなら宣傳使様、キジ公の後に従ひ、これより日暮シ山に立向ひ、ウラル教の
大將ブル其他の奴原を片つ端から言向け和し、エスの宣傳使を救ひ出し、日な
らず凱旋の上、ヒルの都の楓別命が御館に於て御面會申しませう。……サア、キ
ジ公の大將、早く出立遊ばせよ」

と、からかひ乍ら、早くも此場を後に、先に立つて元來し坂路を歸り行く。

キジ「オイオイ大將を後にして、先へ行くと云ふ事があるものか。待つた待つた」と呼はり乍ら、
キジ「宣傳使様、エリナ様、左様なら、後日お目にかかりませう」と言葉を残し、マチの後を追っかけ行く。

これより國依別はエリナと共にアラシカ山の山麓エスの宅に至り、エリナの母テールの病を癒やさむと祈願し、數日逗留の後ヒルの都を指して進み行く。
(大正一一・八・一六 舊六・二四 松村眞澄録)

第二二章 大蜈蚣(八六四)

マチとキジとの兩人は 三五教の宣傳使
國依別に從ひて 夜道を辿りやうやうに

夜も明け放れ露の道よあけはなつゆのみち 勢込んでスタスタといきほひこ

下らぬ歌をうたひつつくだうた アラシカ山の麓までやまふもと

来りてここに息休めきたここにいきやす 又もや乗出す膝栗毛またのりだひざくりげ

険しき坂を潔くけはさかいさぎよ やうやう頂上に登りつめちやうじやうのぼ

涼しき風を浴び乍らすずかぜをあなが あゝ面白い面白いおもしろおもしろ

四方の國原見渡せばよもくにほらみわた 山野は青く河清くさんやあをかはきよ

西南方に屹然とせいなんぼうきつぜん 雲の冠を頂きてくもかむりいただ

聳り立ちたる日暮シのそそたちたるひぐら 山の麓の聖場をやまふもとせいぢやう

指さし乍らウラル教ゆびなが ブールの教主が立籠るけうしゆたてこも

靈地は彼處と國依別のれいちあこくによりわけ 貴の司に指し示しうづつかささしめ

問はず語を始めつつとがたりはじ 又もや東北指さしてまたとうほくゆび

廣袤千里の平原にくわうぼうせんりへいげん 長く築きしヒルの町ながきづまち

楓の別の鎮まりてかへでわけしづ 三五教を開きますあななひけうひら

神の館は目の下にかみやかためした 薨も高く聳えつついらかたかそび

確たしかにそれと分わからねど

風かぜに閃ひらめく旗印はたしるし

勝利しょうりの都みやこは足許あしもとに

近寄ちかよりたりと勇いさみ立たち

心こころのままに涼風すずかぜを

味あぢはふ折柄をりから國くに依別によりわけの

貴うつの司つかさは先さきに立たち

早はやく行ゆかうと驅かけだせば

二人ふたりは名残なごりを惜をしみつつ

是非ぜひなく後あとに従したがひて

險けはしき坂さかを下くだりゆく

路みちの片方かたほうに楠くすの木きの

老木ろうぼく茂しげりウラル教けう

教をしへの祖おやを祀まつりたる

神王しんわう祠ほこらを發見はっけんし

近寄ちかより見みれば妙齡めうれいの

女をんなが一人面ひとりおもやつれ

髪かみもおどろに手てを合あはせ

祠ほこらの前まへに俯うつむいて

何なにかヒソヒソ祈いのり居をる

怪あやしき様子やうすにキジ公きじこうは

側そばに寄より添そひ背せなをなで

言葉ことば優やさしく勞いたはりて

事ことの様子やうすを尋たづぬれば

女をんなは漸やうちく顔かほをあげ

アラシカ山やまの山麓さんろくに

ウラルの教をしへの宣傳使せんでんしと

仕つかへまつれるエスの子こよ

妾が父は三五の神の司を呼止めて

吾家に泊めし罪に依り日暮シ山の聖場に

引立てられて仄暗き残酷無情の水牢に

閉され玉ひ朝夕に苦しみ歎き玉ひつつ

此世を果敢なみ玉ふらむ父の災聞くよりも

妾の母は驚いて持病の瘵氣再發し

水さへ飲めぬ重態に瘦衰へて玉の緒の

命盡きむとする場合いかで妾は此儘に

のめめ眺めて居れませうウラルの教を開きたる

教祖の神の御前に父の危難を逃れしめ

母の病を一日も早く治させ玉へよと

心の誠を捧げつつ一心不亂に神の前

朝夕祈る吾心推量あれと答ふれば

キジ公涙に暮れ乍ら心配なさるなエリナさま

神かみに仕つかへしキジ公こうが とつとき力ちからを現あらはして

お前まへの父ちちのエスさまを キツと助たすけて上あげませう

マチ公こうお前まへは此方このかたに 従したがひエスの家いへに行ゆき

病やまひに苦くるしむ母親ははおやを 鎮魂ちんこん歸神きしんの神業かむわざで

早はやく助たすけて上あげて呉くれ 國くに依別よりわけの神様かみさまは

一時いちじも早はやく楓別かへでわけ 神かみの司つかさの鎮しづまれる

ヒルの館やかたに出いでまして キジが凱旋がいせんする間あひだ

ゆるゆる御待おまち下くだされと 勇いさみ切きつたるキジ公こうの

言葉ことばにマチは擦すりよつて オイオイキジ公こうそりや無理むりだ

何程なにほど弱よわい敵てきだとして お前まへ一人ひとりぢや險吞けんのんだ

國くに依別よりわけの命令めいれいに 従したがひ俺おれもついで行ゆく

國くに依別よりわけの神様かみさまよ 次ついではエリナの娘むすめさま

天晴あつぱれ凱旋がいせんした上うへで 後日ごじつにお目めに掛かりませう

云いふより早はやくマチ公こうは 尻しりひつからげアラシカの

峠を^{たうげ}上り下り^{くだ}つつ 一目^{いちもく}散^{さん}に驅^か出^だせば

オイオイ待^まつたマチ公^{こう}と キジ公^{こう}も尻^{けつ}をひつからげ

韋駄^{ゐだ}天走^{てんぱしり}に進^{すす}み行^ゆく あゝ惟^{かむ}神^な々々^{がら}

御靈^{みたま}幸^{さち}はひましませよ。

キジ、マチの兩人^{りやうにん}は漸^{やうや}くにして、日暮^{ひぐら}シ河^がの丸木橋^{まるきばし}の袂^{たもと}に辿^{たど}り着^ついた。

キジ「オイ、マチ公^{こう}、夜前^{やぜん}のキジ公^{こう}が奮^{ふん}戦^{せん}激^{げき}闘^{とう}の結果^{けつぐわ}、大功^{だいこう}名^{みやう}を現^{あら}はしたる古戦^{こせん}

場^{やう}へやつて來^きた。此邊^{このへん}は死屍^{ししる}累^い々^いとして横^{よこ}たはり、地^ち下一^{いっしやく}尺^ほを掘^ほれば、白骨^{はくこつ}現^{あら}は

れ、夜^よは鬼哭^{きこく}啾^{しゅう}々^{しゅう}として寂寥^{せきれう}身^みに逼^{せま}ると云^いふ記憶^{きおく}すべき印象^{いんしやう}の深^{ふか}き地^ち點^{てん}だ。一^{ひと}

敵^{てき}の亡靈^{ばうれい}を吊^とつてやらうぢやないか。アハ、ハ、ハ、南無^{なむ}アナン、ユーズ大^{だい}居^い士^{こじ}、

頓生^{とんしやう}菩^ぼ提^{だい}だ、どうだ一^{ひと}つ宣^{せん}傳^{でん}歌^かでも手^た向^むけてやらうぢやないか？」

マチ「何を云^いふのだ。古戦^{こせん}場^{じやう}所^{ところ}か、極^{きは}めて新^{しん}戦^{せん}場^{じやう}だ。吾^{われ}々^{われ}が大^{だい}勝^{しょう}利^りを得^えた聖^{せい}地^ちだ

から、神^{かみ}様^{さま}に御禮^{おれい}の爲^{ため}神饌^{しんせん}を獻^{たて}まふべき神饌^{しんせん}場^{じやう}だよ。あゝ新^{しん}鮮^{せん}の空^{くう}氣^きは水^{みづ}の如^{ごと}く流^{なが}

れ來^{きた}り、吾^{われ}等^らが汗^{あせ}を拭^{ぬぐ}ふ。勇^{ゆう}なる哉^{かな}。壯^{さう}なる哉^{かな}。どれどれ一^{いっ}服^{ぶくろ}仕^{かま}らう」

と云ふより早く、芝生の上に大の字を描いた。

キジ「ヤア、早から大勝利を祝つて、大の字になつてゐるのか。さう背部を下にして居ると、キツと大敗の憂目に會はなくてはならないよ」

マチ「何、敵をして大敗せしむると云ふ縁起を祝つてゐるのだ。俯むいて見れば

敵を大に屈伏さすると云ふ大腹となるのだ。アハ、ハ、ハ」

と罪なき事を喋り散らし乍ら、餘り勢込んで走つて來た體の疲れに、何時の間に

か兩人共熟睡して了つた。

何處よりともなくガサガサと這うて來た大蜈蚣に、耳の一方を刺され、痛さに

目を醒まし起上つたキジ公は、矢庭に蜈蚣に向つて唾を吐きかけた。蜈蚣に對し

大禁物の唾に忽ち、大蜈蚣はピンと體を伸ばし、青くなつて其場に倒れて了つた。

キジ公は耳の痛さに何氣なく、唾を指につけ、之を疵所に塗つた。不思議や痛み

は忽ち止まり、耳の腫も瞬く間にひすぼつて了つた。マチ公は此騒ぎに目を醒ま

し、四邊を見れば、大蜈蚣が唾の毒にあてられて、殆ど蟲の息になつてゐる。マ

チは之を眺めて、

マチ「オイ、キジ公、殺生のことをするな。貴様は蜈蚣の敵薬たる唾をかけたのだな、生物を殺すと云ふ事は天則違反だぞ。早く蜈蚣を助けてやらないか」

キジ「俺だつて別に無益の殺生を好んでする者ではない。安眠中を窺ひ、俺の耳を咬よつた悪い奴だから、此奴こそ唾棄すべき悪蟲だと思つて吐きかけたのだ。俺の唾は偉いものだらう。一口吐くが最後、こんな大蜈蚣が忽ち寂滅爲樂、頓生菩提となるのだからなア。アハ、ハハ、ハハ、武士と云ふ者は變つたものだらう」

マチ「グズグズして居ると、蜈蚣公、本當に縋切れて了ふぢやないか。早く川へ連れて行つて水を吞ましてやれ。さうすれば忽ち全快して、元の通りシヤンシヤンと活動する様になるワ」

キジ「此蜈蚣の歩く姿を見ると、夜前アナンの奴、澤山の竹槍隊を連れ、單縦陣を作つてやつて來た時の姿にソツクリだ。これも何かの前兆だ。此儘に捨てておかうぢやないか。蜈蚣が蘇生した様に、ブールの奴、餘り元氣付きよると、一寸此方は少數黨だから險呑だよ」

マチ「アハ、ハハ、ハハ、ヤツパリどつかに不安を抱いてみると見えるなア。國依別様

の前ではズイ分吹いたぢやないか。こんな所でこんな弱音を吹く位だつたら、肝腎要の戦場に向つては、如何することも出来なくなつて了ふよ」

キジ「何さ、働く時に働きさへすれば宜いのだ。今は斯う弱さうにして力を蓄へ、潜勢力を養つておくのだ。エ、邪魔臭い、蜈蚣の奴、助けてやらう」

と云ひ乍ら、川の中の流れを目がけて、手に掴んで投げ込んだ。蜈蚣は水に陥ると共に、毒は消え、水中を辛うじて泳ぎ乍ら、岸に登り、二人が足許に勢能く、百本の足に馬力をかけ、大速度で突進し来る。二人は何となく、怖氣つき、トンと逃げ出した。不思議や蜈蚣は何處までもと云ふ調子で追つかけて来る、厭らしさ、とうとうウル教の靈地と聞えたる日暮シ山の岩窟の前迄追つかけて来り、忽然として姿を消して了つた。此蜈蚣は言依別命が球の玉の靈力を以て、二人の出陣を勵ますべく顯現せしめたのであつた。

(大正一一・八・一六 舊六・二四 松村眞澄録)

第二三章 ブール酒（八六五）

日暮シ山の靈場、岩窟館の教主ブールの奥の間には、アナン、ユーズの二人、悄然として控え、ブールが岩窟内の神前に額づき、ヒルの都に向つて派遣したる部下一同の大勝利を得、一日も早く凱歌を奏して歸ります様と祈願をこめ終りて、しづしづと吾居間に歸つて見れば、豈計らむや、昨夜堂々として出陣したる二人の勇將は、悄然として吾居間に待つて居る。どこともなく元氣の無ささうな影うすき二人の姿を見て、不安の念に驅られ乍ら、ブール「ヤアお前はアナンにユーズの兩人、えらう顔色が冴えて居ないぢやないか。何か途中で失敗を演じ、女々しくも、おめおめと歸つて來たのだらう」

此聲に二人は教主の前に現はれたるを悟り、俄に空元氣をつけ、アナン「これはこれは教主様で御座いましたか、エー實は、その中々以て、何で御座いましたよ。非常な何々で、實に不愉快……オツトドッコイ壯快な事で御座いました。なア、ユーズ、お前もチツとユーズを利かして、戦況を、そこはそれ、

うまく、遺漏なき様に御報告を申すのだよ」

ユーズ「申し上げます。此處に伊奘册大神は、御子迦具槌神を生み玉ひて、みまかりましき。伊奘諾大神いたく怒り玉ひて、御子迦具槌神の御首を切り玉へば、ユーズ（湯津）石村たばしりつきてなりませる神の名は、サツパリコンと岩拆の神、根拆の神」

ブル「コリヤコリヤ何を言つてゐるのだ。戦況は何うだと問うてゐるのだ。詳さに報告せないか」

ユーズ「ハイ報告も報告、赤心【報國】、あなたの爲に所在ベストを盡し、數多の部下を黒死病否酷使し乍ら、選挙運動を開始致しました所、残念乍ら一騎當選はまだ愚か、次點者となりました。イヤもう戦ひは時の運とか申しまして、ウンと敵を屁古ませ、ヒルの都に攻め寄するに先立ち、脆くも敗走致しまして御座います」

ブル「どちらが敗走したのだ」

ユーズ「ハイさうですなア。すべて戦ひはどちらか一方が負なくては、平和克復

は到底出来ませぬ。甚だ以て不名譽千萬な悲惨な目に會ひましたよ」
ブル「貴様の云ふ事はチツとも分らない。……オイ、アナンの大將、ユーズは
どうかして居る様だ。其方詳しく、一伍一什を報告せよ」
アナン「御尋ね迄もなく、吾々勇士を引率し、轡を竝べて堂々と、日暮シ河の兩
岸を、長蛇の陣を張り乍ら、旗鼓堂々と攻め下る。時しもあれや、幾十百とも知
れぬ十曜の神紋馬印、高張提燈、數限りもなく、堂々として丸木橋を越え、此方
に向つて攻來るヒルの都の楓別命が部下の者共、總勢殆ど三千有餘人、日暮シ河
の兩岸に人垣を作り乍ら攻上り來る其物々しさ。寡を以て衆に敵するは英雄豪傑
にあらざれば能はざる所、吾々兩人は僅數百の手兵を以て之に當り、先づ第一に
我部下の竹槍隊を兩分し、敵の不意を狙つて側面より、槍の穂先を揃へ、鬨を作
つて突貫すれば、敵は敗亡うるたへ騒ぐを、尚もおつつめ、一人も残らず日暮シ
河の急流につきおとしたり。不意を喰つた數多の敵は忽ち北岸に驅上り、遁走せ
むと先を爭ひ、川土手に上り行くを待構へたるユーズの拔刀隊は、好敵御參なれ
と采配打振り、僅か部下三百の味方に向つて下知すれば、味方の勇士は、劍の切

先を揃へ、片つ端から切りたて雑立て、忽ち血河屍山の大勝利、日暮シ河は忽ち血潮の洪水氾濫し、數多の敵の屍は一人も残さず血流に漂ひ、太平洋を指して流れ行く、其壯烈さ。語るも中々愚かなりける次第でゐる」

ブル 随分針小棒大的の報告ではないか？ 僅三千人の敵の血潮に依つて、日暮シ河は血潮の濁流氾濫し、三千の屍が一つも残らず流失したとは、合點の行かぬ汝の報告、人間の血液は肉體の幾百倍もなくては、左様な事が出来ない筈だ。コリヤ何かの間違いだらう」

アナン 「ハイ、マチ……：ガイではなくて、マチとキジと……：エー、何だか、ウン、一寸マチマチになつて、餘りの嬉しさで、大勝利で、申上げる事も後や先、支離滅裂のやうで御座いますが、實の所は餘りの大勝利、意外の好結果で、手の舞ひ、足の踏む所を知らず、嬉し逆上せに、逆上せの幕が下りた所です。今ヤツと戦況の報告に歸つたまでの所、何が何だか頭のまとまりがついてゐませぬ。暫く沈思黙考の時間をお與へ下さいませ。其代り數百の部下、一人も負傷もなく、凱歌をあげて、只今廣殿に休息致し居ります。何卒御褒美と凱旋祝の爲に、お酒をド

ツサリ吞ましてやつて下さいませ。人に將たる者は部下を愛さなくてはなりません。吾々は部下あつての大將で御座います。あなたも吾々あつての教主で御座いますから、少々の瑕瑾があつても、見直し聞直し、慈愛を以て望まることが、仁慈無限の教主の御天職で御座います。三五教の何事も直日に見直し聞直し、身の過ちは宣り直すと云ふ事は、ウラル教に取つても結構なことだと思ひます。吾々に取つても甚だ御都合のよき教理かと存じます」

ブル。何は免もあれ、非常な激戦だつたと見える。三千有餘の敵を皆殺しにしたら、味方は一人の負傷者も出さなかつた其方の手柄、さぞ氣をつかつたであらう。逆上するのも無理もない。サアサア倉を開放し、葡萄酒を出し、一同に飽く迄吞ましてやつてくれ。吾は是れより大神の御前に凱旋の御禮を申上ぐる爲、參拜致して來るから、ゆるゆると酒でも飲んで、一同に休養を與へるが宜からう」と云ひ棄て、又もや神殿にいそいそとして進み行く。

後見送つて二人は互に顔見合せ胸なでおろし、舌を出し乍ら小聲になり、アナン「ア、漸うにして虎口を逃れた。サア是から皆の奴に口止め料として、葡

葡萄酒をドツサリ振れまつてやらう。是もヤツパリ俺の知識の致す所だ。ブルの
教主も此頃はチツと度呆けてみると見える。何分御倉山の谷間で肝をつぶし、荒
しの森で二度ビツクリを致し、ビツクリ蟲が増長して脾疝を患ひかけてゐる様
矢先だから、木に竹をついだやうな支離滅裂な吾々の陳辨でも、勝つたと云ふ一
聲が嬉しかつたと見え、うまうまと騙されよつただないか。サア是から酒だ酒だ
と云ひ乍ら、アナンは先に立ち、一同の集まる大部屋に進み行き、稍高き所に停
立して、

アナン「部下一同に今日は凱旋の祝として、葡萄酒を飽く迄飲む事を、ブルの
大將より許されたに依つて、一同喜んだがよからう。今ユーズの副將が酒倉へ鍵
を持つて行かれたから、皆の者共は倉の前に往つて、葡萄酒を此處へ運び來り、
腹一杯呑んだがよからう。又下戸連中はアルコールの混ぜらない葡萄酒があるか
ら、それを飲んだがよからう。斯の如く取計らつたのも部下を愛するアナンの眞
心より出でたるものなれば、萬々一教主がここに現はれ、其方達に何をお尋ね遊
ばしても、一言も申上げてはなりません。一切萬事、アナン、ユーズの大將様

に御聞き下されと、其處は甘く【ごみ】をにごすのだ。要するに部下一同の捨身の活動に依つて、ヒルの都の楓別が假設敵と丸木橋の畔に吾部隊と衝突し、一人も残さず切り殺し、突殺し、河に投込み、屍は太平洋に流れ行きしと、事實を詳さに報告しあれば、一同も其考へで居らなくてはなりません。サア早く倉へ往つて、酒をお運びなさい。此葡萄酒は所謂一同の者の口に錠を卸す妙薬だから、無茶苦茶に口のあかめ様にして下さい」

と嵌口令を布いてゐる。暫くあつて、山の如く葡萄酒の瓶は運ばれた。アナン、ユーズの二人は教主の此場に現はれ来るを喰ひとめむ爲、神殿に詣で祈願の終ると共に、詞巧に教主室に這入らせ、いろいろと出鱈目話に教主の機嫌をとつて居る。酒は追々と酔がまはつて、彼方にも、此方にも、あたり構はず、昨夜の失敗談が語り續けられた。甲は舌をもつらせ乍ら、

甲「オイ、皆の奴、昨夜はどうだつた。随分惨々な目に會うたぢやないか。たつた一人や二人の敵に向つて、大勢の者が取圍み、取つては投げられ、取つては投げられ、川の中で散々な目に會はされ、膝頭をすり剥いたり、腰の蝶番を歪めた

り、随分苦しかつたなア。併し今日は何と云ふ吉日だらう。戦に負けて歸つたら首でも取られやせむかと心配して居つた。それに劫腹な、芳醇な酒を飽く迄喰へなんて吐しやがつて、サツパリ見當が取れぬ様になつたぢやないか。こんな事なら常時戦に従つて敗て來るのだなア」

乙「きまつた事だよ。負て勝とると云ふ事があるぢやないか、負たお蔭で、こんな甘い葡萄酒が鱈腹頂けるのだ。漆に負たり、角力に負たつて、こんなボロいことありやせぬぞ。何事も神様のマケのまにまに活動するのだなア、アツハ、ゝゝ」

丙「オイ、甲乙兩人、そんな事を囀るものだない。昨夜の敗戦をかくす積りで、アナン、ユーズの大將が、お前たちや俺たちに、アナンのかからないように、ユーズを利かして、甘く教主をゴマかし、葡萄酒をブルつて來たのだから、チツとは大將の御心も察して靜にせぬかい」

乙「ブルつて來たか、ボロつて來たか知らぬが、モウちつと甘くゴンベリさうなものだなア」

丙「二人の大將が力一杯ベストを盡して、ビヤクれる丈ビヤクつて來たのだから、

そんなに不足を云ふと罰が當るよ」

甲「喧しう云ふない。是からブルさまの所へ往つて、一つ思ひ切り、御祝ひに踊つて來うぢやないか。酒を飲んだら酔ふのは當り前だ、酔うたら踊るのは當然だ。泣酒もあれば笑ひ酒もあり、怒り酒もある。泣きたい奴は泣け、怒る奴は怒れ、笑ふ奴は精一杯笑つて樂むんだなア」

丁「笑ふと云つたら、俺も實は笑ひたうて、仕方がないんだ。十分笑はして呉れないか」

甲「笑へ笑へ、ドツと皆に分る様に、あの高座へ直立して、ニコニコ雑誌の相場が狂ふ程笑つて見よ。笑ふ門には福來りだ、サア笑つたり笑つたり」

丁は忽ち高座に上り、葡萄酒の瓶を片手に提げ、ラツパ呑みをし乍ら、
「アハ、ハ、ハ、阿呆らしい。戦ひに負て、河底へ放りこまれ、向脛打つて、痛かつたが、チツとは可笑しうて、笑ひが止まらなんだ。」

イヒ、ハ、ハ、ハ、融に最後屁を放りかけられたよな、臭い臭い言ひ譯をして、屁の音のよなブル教主を甘く屁煙にまき、屁の音の様なブードー酒をおごらして、敗

軍の將卒が得意になつて、酒を食らふ其スタイルの可笑しさ。

ウフ、、、、打つて、變つたアナン、ユーズのあの態度、教主の君に丸木橋の戦ひに腰を抜かし、肝を潰し、ウフ、、、、うろたへ騒いで逃げ歸つた二人のマイストロ（大將）がウマウマとうまい酒をボン倉からひっぱり出し、俺達をへーベレケに酔はしやがつて、口止めせうとしてゐる其可笑しさ。いつも自分計り酒を喰つて、良い氣になつてる大將株が今度は餘程マゴつきやがつて、キツウ閉口しよつたと見え態度が變つたぢやないか。

エへ、、、、エー怪體の悪い。こんな悪い悪い葡萄酒のうまい奴を、無茶苦茶に呑ましやがつて、俺達を酒に酔はして殺さうとは餘り蟲がよすぎるワイ。鱈なら酒で殺せるか知らぬが人間さまはさうはいかぬからなア。

オホ、、、、尾も白い尾も白い頭も白い、尾も白狸の腹鼓、腹がはぢけるとこ迄、呑んで腹を拍つて、尻からブルブルとお尻を弾じ、丹精こらして、踊ろぢやないか。

ハ、、、、、腹が立つて、臍がよれて、悲しくなつて來るワイ。酒と云ふ奴ア、

妙な奴だなア。オイ皆の奴、チツと笑はぬかい、酒が沈んで了ふぞ。

ヒ、ヒ、ヒ、日暮シ河でひどい目に會うた昨夜の事を思ひ出すと、腹が立つワイ、
よるよなか
夜夜中にひつぱり出され、石礫の一杯つまつた川中へ蛙をぶつけたよに投げられ
た時の事を思へば、悲しうなつて來た。さうかと思へば、こんな甘い酒をドツサ
リ飲ましやがつて、何程怒らうと思つても、面白く可笑しく嬉しくなつて、これ
が笑はずに居れるかい。

フ、フ、フ、降つて湧いたる儲け物だ。フルナの辨を揮つて、深く企んだアナン
とユーズの今日の働き、何と云つても、俺たちは酒さへ呑めば、至極御機嫌だ。

へ、へ、へ、屁を水の中で放つたやうな、便りない、氣轉の利かぬ弱蟲計りが、
ごひやくらかん
五百羅漢の様な醜いレツテルを陳列しやがつて、酒を喰ふ時の、其ザマつたら、
何の事だい。百鬼晝行と云はうか、千鬼夜行と言はうか、丸で餓鬼に水を與へた
よな、情ないザマ、何奴も此奴も口賤しい奴計りが、能くもマアこれ丈揃うたも
のだなア。こんな代物を飼つてゐる、屁こきのブルさまも閉口だらう。

ホ、ホ、ホ、本當に誠に、失敗してこんな甘い酒を頂くのなら、毎晩でも戦ひに

出て、負てみたいなア。なんと云うても、一人や二人の敵に大勢が當るのだから
勝つ氣づかひはないワ。もしも勝つて見よ、酒所の騒ぎぢやない。アナン、ユー
ズの大將計りが酒を食つて俺達は水を呑んで辛抱さされるのが落ち位なものだよ。
ワハ、、、、悪いことがあればキツとあとに善い事がある。それだから、酒に酔
ひ、煙に酔ひ、信仰に酔つぱらつて居るのだ。酔うて酔うて酔ひちらし、力一杯
ヨタリスクを竝べ立てて、今日の凱旋祝ひを完全に勤め上げるのだよ。此葡萄酒
は本當に善い事だらけだ。酔うて酔うて甘うてようて、腹にたまつてようて、力
がついてようて、氣分迄がよいと云ふのだから、酔ひがまはるのも當然だ、ウ
フ、、、、エへ、、、、オホ、、、、終りだ。誰か怒り上戸の奴か、泣上戸の奴
代つて呉れ。俺りやモウこれで幕切れだ
と云ひ乍ら、行歩蹣跚として高座を覺束なげに降り切りに喋りちらして居る。此
處へアナン一人やつて来て、
アナン、ヤアお前達、御苦勞だつた。随分骨が折れただらうなア
成、ズイ分甘い酒で、飲むのに骨が折れましたよ。流石アナンさまは人の水上に

立つ丈あつて偉いわい。ブルの大將を甘いことだまし、敗軍を勝たよな顔して、葡萄酒の倉まで開かしたお手際は、吾々の大將として實に適當だ。なア甲州、せめてこんなことが十日も續くと良いのだけどなア」

アナン「オイオイ靜かにせぬかい。教主のお耳に這入つたら大變だぞ。大きな顔して酒を飲む譯にも行くまい」

成「モウ何時大將や教主がやつて來て呑むなと云つたつて、構ふものか。呑む丈呑んで了つたのだから、此上呑んでくれたつて、こんな腐つたよな酒を誰が呑むものかい。始めの二三本は甘かつたが、後になる程、酒が悪うなつて、泥水を飲んでるようだなア、皆の奴、

酔ひみての後の心に比ぶれば 是程味ない酒とは思はざりけり

だ、アハ、ハ、ハ、」

此時「教主の御出場」と云ふ知らせに一同は俄に肌を入れる、坐り直す、襟をかき合はす、大騒ぎをやり出した。

悠然として現はれたるブルは一同に向ひ、

ブール「今岩窟の門前に三五教の強者が二人、襲ひ來りし様子、一同の者、注意を致されよ」

一同は「ハイ」と云つた限り、忽ち酒の酔も醒め、顔を眞青にして慄うてゐる。教主の命に依り、一同はバラバラと入口の方に驅出した。

（大正一一・八・一六 舊六・二四 松村眞澄録）

（昭和一〇・六・九 王仁校正）

第二四章 陷穽（八六六）

アナン、ユーズの領袖連はへべレケに酔ひ、足も碌に立たず、舌もまはらぬ連中を數多引率し、石門のふちに現はれ、アナン「其方は昨夜、丸木橋の畔に於て吾々に抵抗至した三五教の奴だらう。サア、良い所へ來やがった。今貴様と戦争したおかげで凱旋祝の酒宴を催し、俺達

は酔よが廻まつて氣分きぶんが好よい最中さいちゆうだ。何なに用ようがあつて來たきのか知しらぬが、そんなむづかしい顔かほをしないで、酒さけでもくらつてゆつくりと談判だんぱんをせうぢやないか？ 固苦かたくるしいこと許ばかり言いつてると命いのちが縮ちぢまるワ。たまには命いのちの洗濯せんたくや翠玉きんたまの皺しわ伸ばしをやらないと、人間にんげんの様な氣持きもちがせぬワイ。そんな野暮やぼな顔かほしないで、トツトと中なかへ這は入いつて機嫌きげんよく一杯いっぱいやらぬかい□

キジ□昨夜さくやは脆もろくも泡あわを食くつて逃にげ失うせ、到底たうてい正面しやつめんの戦たたかひにては、われわれを如何いかにもするずることが出來できないと思おもひ、毒酒どくしゆを吞のまして俺達おれたちをよわらせるず猾ずるき考かんがへだらう。そんな策てに乗のる此方このほうぢやないぞ。ゴテゴテ吐ぬかさずに、其方等そのほうらが押おしこ込こめて居をる宣傳使せんでんしのエスを牢獄らうごくから出だして、俺おれたちに渡わたせ！ グツグツ吐ぬかすと、岩屋いはや退治たいぢを始はじめようか□

マチ□サア、アナン、ユーズ其他そのたの奴原やつばら、早はやくエスを此處ここへ連つれて來こい！□

アナン□ヤイヤイ喧やかましう言いふない。そんなことどこかい。今日けふは貴様きさまに負まけたおかげで、結構けつこうな酒さけを鱈腹たらぶくのんで、精神恍惚せいしんくわつこうとし、何なにもかも忘わすれて了しまつて、極ごく愉快ゆくわいになつてゐる所ところだ。天あめが下したに酒さけさへあれば、別べつに敵てきだの味方みかただのと、せせこま

しいことは要らない。酒程親密なものはない。マア一杯這入つてやらぬかい。どんなエライ喧嘩でも和睦には酒だい。人と交際するのに小むつかしい牆壁を設けるものぢやない。世界同胞主義を盛に稱へられる今日だ。マア、エスはエスでエスとしておいて、奥へトツトと通つて呉れ」

キジ「貴様はどこまでもツーツーしい奴だなア。餘程俺達二人が恐ろしいと見えるな」

アナン「そりやツイ分恐ろしいよ。閻魔が亡者の帳面を繰るよな面付をして、やつて来るのだからなア。オイ、キジ公とやら、何と云ふ七六つかしいシャツ面をして居るのだ。今の内に美顔術でも施しておかぬと、年が老つて皮が固くなり、皺が深くなつてからは駄目だぞ」

キジ「エ、要らぬことを云ふな。これから俺が岩窟内へふみ込んで直接にエスの所在を調べてやらう。邪魔いたすと爲にならぬぞ。サア来い、マチ公！」

と云ひ乍ら、アナン、ユーズを始め、其他の者共を押分け、突倒し、窟内深く進み入り、遂には教主ブルの居間に侵入し、ブルブル慄ひて居るブルの素首を

グツと握り、

キジ「サア、モウ斯うなつては駄目だ。何をブルブル慄うてゐるのだ。早く
宣傳使のエスをここへ出さぬか」

マチ「ウラル教の親方、グツグツして居ると生首を引抜かれて了うぞ。お前は
時も此娑婆を穢土だと云ひ、靈の國を天國淨土と云つて、憧憬してゐるのだから、
今首を引抜かれて靈になり、天國へ行くのは満足だらうが、何程天國でも、首が
なくては駄目だ。サア早くエスの所在を白状せぬか」

ブルは慄ひ乍ら、

「ハイ今出させますから、一寸待つて下さい」

マチ「早く出せ、出し次第天國へ褒美として、昇れる様にしてやらう。どうだ首
を持つたなり、天國へ死んで行くのは嬉しかる、アハ、ハ、ハ。何と妙な教だなア。
人には死んでからの世界が結構だと云ひ乍ら、サア自分が死ぬと云ふ段取りにな
ると、ヤツパリ厭だと思えて、ビリビリ慄うてゐるワイ。さうすりやヤツパリ、
口と心と裏表のことを言つてゐるんだなア。俺達も今迄はウラル教の熱心な信者

であり、二度もここへ参り、お前をこんな腰拔とは知らずに、活神さまだと思つて跪き拜んで居つたかと思へば、馬鹿らしうなつて来た。サア俺達の案内をしてエスの所在を知らせ。隠し立てをすると最早了見はならぬぞ。俺達二人に夜前の様に數百人もやつて来て泡を吹き逃げ散る様な弱蟲計り、幾萬人連れて居つたつて、何なるか。どれもこれも酒にへべレケに酔ひ、今のザマは何だ。肝腎のアナシやユーズ迄が碌に舌も廻らず、腰はフラフラになつて、ひよるついてるぢやないか。こんな事で、三五教の吾々に對し、挑戦するとは片腹痛い」

ブル 「仕方ありません。吾々の命さへ助けて下さらば、エスを渡しませう」と先に立つて行く。二人はブルを見失はじと飛耳張目十二分の注意を拂つて岩窟内を進んで行く。向うよりアナン、ユーズの兩人はヒヨロヒヨロし乍ら巻舌になり、アナンはキジ公に、ユーズはマチ公にワザとにぶつかつた。其途端に、二足三足ヒヨロヒヨロとひよるつき、深き企みの陥穽に脆くも落込んで了つた。

「サア失敗つた！」とキジ、マチの二人は陥穽の中で無念の齒がみをなし、一生懸命に神言を唱へて居る。ブルは陥穽を覗き込み、さも愉快げに、

本館の湯煙りは谷川の上を靜かに靜かに渡つて行く。

猫兒川と狩野川との出會つた景勝の地點に、一廓を作つて居る天城山麓の温泉場湯ヶ島で、四週間を松村眞澄氏、出口宇知丸と俱に靈界物語を口述筆記しながら過したのは實に壯快であつた。見上ぐる猫兒峠の頂きは今朝日が射し初めた時で、大空には紺碧の繪衣を擴げて五色の光彩を照し、天城連峰の大きなうねりの太陽を背にしてコバルト色に長く續いて居るのが樓上から見えて、川の瀬に激する水音と峠を吹く風の音が耳につく。宿の主人や四五の信徒に伴はれて朝早くより危い釣橋を渡ると直に山田の畔を昇る。柿栗の葉は青々と繁り、未熟の果が秋待ち顔に蒼い顔を曝して吾等一行を目送して居る。少し登つて下田街道に出た。朝の風は何となく氣分良く涼しい風は谷底から吹き來たり、日光の届かぬ山路を辿る身は、夏の日を忘るる位である。杉の木立の多い山に添うて登つて行く。谷川を隔てて雑木の青葉が色々と濃厚の彩を見せるばかりで、風に吹かるる薄の刃が、さらさらと音を立てて波の打つやうに靡いて居る。一面に蒼黒い草の色がうねうねと續いて、右と左に高い山が山の上から上からと頂きを現はして來ると、

眞蒼に晴れた空にふわりふわりと白い煙のやうな雲が浮んで来る。新道から舊道へ外れる松の二三本ある處を上ると一面の原野で、萩や薄や龍膽の葉が元氣よく風にひるがへつて小ダンスを始めて居る。中に一筋の細い小道が通つて、それを四五町許り登ると清瀧近道の石碑が建つて居る。稍平坦な草原續きの露を分けて又もや四五町右に取つて行くと、ダラダラ下りになつた坂道に青々とした「くぬぎ」の林があつて、其下は深い谷川で物凄まじく木魂を返す水の音が山々に廣がつて居る。松の老樹が危げに谷に倒れかかつて居るのを飛び越えて進んで行くと、僅かに脚を入れる位の羊腸の小徑に團子石がゴロリゴロリと轉がつて居て、歩む度に谷川へ落ちて行く。木の根に縋り蔓を傳ひ下へ下へと二町計りも降ると、直に狩野川の上流の瀧で、一尺以上もあるヤマメの集まつて居る瀧である。安藤、杉山、福井氏等が二三日前に料理して差し上げたのは此瀧で捕獲したヤマメだと愉快氣に話しつつ行く。

此處は狩野川の上流の瀧で、二十丈に餘る飛瀑は薄曇りになつた大空の反射を受けて鼠色に崩れ落ちる勢で木の葉や枝が夏の谷風にあほられてひるがへるのが、

如何にも見事である。茲でしばらく休息して再び元來し道へ歸つて、それから又舊道を登る。山道の左右に雑草が茂つて風になびきつつ一行を招いて居るやうな心地がする。次第々々に、山の頂上から雨雲が出て來た。湯ヶ島新田の小村はモウぼつりぼつりと雨が落ちて居る。

委細構はずどしどしと山路を登る。松や樅が一面に生茂つた山を隔てて谷底の水音を耳にしながら木小屋を一つ通り越すと、道は眞直に果ても無く續いて雑木の先は雨に濡れて冴え冴えしい色をして居るのに、平素から蒼白い顔の宇知丸さまは一層蒼い顔になつて居る。林静子浪子の紅裙隊も今日は何となく元氣が薄いやうな感じがした。小禽の囀る聲に送られて、右滑澤道と書いた木標を右へ下を見下しながら行くと、粉の様な雨の中に水車をかけて木を挽き割る小屋が小さく霞んで、笈や水車や谷川の流れが面白い俯瞰圖を描いて居る。

二三町行くと出水の山道に出る所を通ると大川端と云ふ所に着く。これから先は天城山中の最も嶮しき所となる。檜の暗く茂つた谷間に一歩踏み入れると、何れの樹木も皆苔厚く蒸して木々の雫は雨よりも多く、生々しい草木の匂ひが濕つ

ぼく鼻を突いて来る。右も左も見上ぐる許りの絶壁に包まれ、曇つた空の雨雲が蔭のやうに頭上を走つて居る。道も口々に無い中を分けて行くと谷底に出た。此處には大きな岩と岩とに掛渡した丸木橋があつて、それを危く渡ると又もや這ひ上がるやうにして絶壁に登らねばならぬ。明治四十二年の山崩れに押し倒されたと云ふ大木が、未だに岩と岩との間に挟まつて居るのを傳つて、僅かに岩の上へ這ひ上ると、さつと吹き来る山風が峰の木々を吹き廻すので自然の舞踏が演ぜられる。

此山路を登り切ると天城山隧道の北に近いので、早幾重にも下になつた連山が雨雲の動いて行く間から頂上だけを出して空の灰色と雲の灰色と山の黒ずんだ色とで色は冴えて居ても、雨に霞んだ夢の様な木々の色が繪に描くには極めて面白さうに感じられた。北口の茶屋で一寸休息の後湯ヶ島に出立しようとした時、右も左も一面の霧で四五間さきの立木でさへもぼんやりとして谷は勿論空と山との境さへ見えず、只茫茫々たる霧の海を夢路の様に迷ふのであつた。一行は一日の光陰を有意義に費やして、夕方の空に湯本館側の大本臨時教主殿へと歸つて來

た。

大正十一年八月十五日

天津祝詞解

高天原に神留坐す、神魯岐神魯美の命以て、皇御祖神伊邪那岐命、筑紫の日向の橘の小戸の阿波岐原に、御楔袂ひ給ふ時に生坐せる被戸の大神達、諸々の枉事罪穢を拂ひ賜へ清め賜へと申す事の由を、天津神國津神八百萬の神達共に、天の斑駒の耳振立て聞食せと恐み恐みも申す。

【高天原】 全大宇宙。詳細は「大袂祝詞解」を見よ。

【神つまります】 陰陽二元が實相充實した上にも充實すること。

【神魯岐神魯美】 陰陽二系を司る神々。

【命もちて】 言靈によりての義。爰までは略ぼ大袂祝詞解中に説明して置く

つもりだから詳しくは述べない。

【皇御祖】 皇は統る也。澄む、住む等皆同一語源から出づ。水や空氣が澄むといふのは、混入して居た物體の間に統一が出来、安らかに鎮定する事である。人がこの世に住むといふのも矢張同一意義で大主宰者の統治の下に安住する義である。若しそれが現在の世界の状態の様に理想の大主宰者を失つて居ると、世は亂麻の如く亂れ、人の心は濁り、人民は流浪に立つて四散する、所謂住むに住まぬ事に成る。【御】(ミ)は體の借字、祖は祖神である。

【神伊邪那岐命】 【神】(カム)は酒を醸むの「カム」などと同義を有し、宇宙萬有を醸造し玉ふ伊邪那岐命様に冠したる形容的敬語である。伊邪那岐命様は、火系(陽系)の御祖神で、宇宙に於けるあらゆる活動の根源を司り、大修祓大整理は常に此神の御分擔に屬するのである。地の世界(顯の幽界)に於て伊邪那岐命の御仕事を分掌し賜ふのが詰り國常立尊で、神諭の所謂世の大立替といふのは大修祓決行の事なのである。宇宙間に起る事は地球の内にも起り、地球の内にも起る事は宇宙全體にも影響を及ぼす、兩々關聯不離の仕掛になつて居る。更に進んで小伊邪那岐命の御楔祓は一國一郡にも起り、一郷一村にも起り、一身一家

にも起る。【表面の字義に拘泥して伊邪那岐命様が九州の橘小戸の阿波岐原といふ所で、御禊を行はれ、そして被戸四柱の大神達をお生みに成つたなどと解釋すると、更に要領を得ない】。一層詳しく事は大被祝詞に出て居るから是非参照されたい。

【筑紫の日向】 古事記岐神禊祓の段と同一筆法である。『是以伊邪那岐大神詔。吾者伊那志許米志許米岐穢國而在祁理。故吾者御身之禊而。到坐筑紫日向之橘小門之阿波岐原而禊祓也。故於投棄御杖所成神名。衝立船戸神。……』云々とある是也。『古事記』が表面の字義の解釋で分らぬと同様、この祝詞も亦分らない。【筑紫は盡し】である、究極である。完全無缺、圓滿具足である。數で言へば九である。筑紫が九州に分れて居るのもそれが爲である。【無論筑紫とか九州とか云ふ地名が先きに起つたのでなく、地名は、後で附けられたので、本來は筑紫も日向も天地創造の際からの語である、地球の修理固成が出来ぬ以前から成立して居る言靈である】。【日向】は光明遍照の義で（ヒムカシ）と同一語源である。

【橋の小戸】 これも地名ではない。【夕チ】は縦の義、【ハナ】は先頭の義、即ち先頭の縦行たるアイウエオの五大父音を指す。【小戸】は音である、言靈である。宇宙間（うちうかん）は最初五大父音の言靈の働きによりて修理固成が出来たのである。

【阿波岐原】 全大宇宙間の事をいふ。一音づつ解すれば、【ア】は天地、

【八】は開く、【ギ】は大中心、【ハラ】は廣き所、海原の原などと同じ。

【御襖袂】 身體の大修祓の事。

【祓戸の大神達】 祓戸四柱神、即ち瀬織津比賣、速秋津比賣、氣吹戸主、速

佐須良比賣の四神である。凡て大修祓執行に際しては八百萬の神々は常に此四方

面に分れて活動を開始し、諸々の枉事罪穢を拂ひ清め給ふので、天津神たると國

津神たるとを問はず、又宇宙全體たると、地球全體たると、又一郷一村一身一家

たるとを論ぜずして、四方面の修祓が起るのである。地球の大修祓、世の大立替

が開始さるる時には、神諭の所謂雨の神、岩の神、風の神、地震の神の大活動と

なる。

【天の斑駒】 一音づつ解すれば【フ】は力、【チ】は靈、【コ】は體、【マ】

は全きの意。

【耳振立て聞食せ】 活動を開始し玉への意。單に耳で聞くといふよりは遙に深遠な意義が籠れる句で、【きく】は辨口が【きく】、鼻が【きく】、手が【きく】、眼が【きく】、幅が【きく】、融通が【きく】などの【きく】と同じく活用發揮の意味である。

【大意】 宇宙天地萬有一切の大修祓は、靈系の御祖神の御分擔に屬する。現在地の世界に於て執行されつつある國祖の神の大掃除大洗濯も詰まり宇宙全體としては伊邪那岐命の御仕事である。幾千萬年來山積した罪穢があるので、今度地の世界では非常な荒療治が必要であるが、これが濟んだ曉には刻々小掃除小洗濯を行へば宜しいので、大體に於ては嬉し嬉しの善一ツの世の中に成るのである。即ち伊邪那岐命の御袂祓は何時の世如何なる場合にも必要あるものである。これが必要なければ後の大立直し、大建設は到底出来ない譯である。

さて此修祓は何によりて執行さるるかと云ふに、外でもない宇宙根本の大原動力なる靈體二系の言靈である。天地の間（即ち阿波岐原）は至善至美、光明遍照、

根本こんぽんの五大言靈ごだいごことたま（アイウエオ）が鳴り亘なつて居わるが、いざ罪穢ざいくわいが発生はつせいしたと成なると、言靈ことたまでそれを訂正除去ていせいぢよきよして行ゆかねばならぬ。人は宇宙經綸うちうけいりんの重大任務ぢうだい にんむを帶おびたるものであるから、先頭第一せんとう だいいちに身靈みたまを磨みがき、そして正ただしき言靈ことたまを驅使くしすれば、天地てんちも之これに呼應こおうし、宇宙うちうの大修被だいしうばつも決行けつかうされる。其際そのさいにありて吾々われわれ五尺ごしやくの肉體にくたいは小伊邪那岐命せういざなぎのみことの御活用ごくわつようとなるのである。雨あめを呼よべば土砂降どしやぶりの大雨おほあめが降り、地震ぢしんを呼よべば振天動地しんでんどうちの大地震だいぢしんが揺ゆり始はじまる。これが即すなはち御襖被給みそぎ ほんひたまふ時ときに生坐なりませる被戸はらひどの大神達おほかみたちである。かくして一切いっさいの枉事罪穢まがごと つみけがれは拂はらひ清きよめらるる事ことになるが、かかる際に活動くわつどうすべき責務せきむを帶おびたるは、八百萬やほよろづの天津神あまつかみ、國津神達くにつかみたちでこれ以上の晴はれの仕事しごとはない。何卒確なにとぞしつかり御活動ごくわつどうを願ねがひますといふのが、大要たいえうの意義いぎである。何人なにびとも日夕にっせき之これを奏上そうじやうして先まづ一身一家いっしんいつかの修被しうばつを完全くわんぜんにし、そして一大事いちだいじの場合ばあひには、天下てんかを被清ほんじよきよむるの覺悟かくごがなくてはならぬのであります。

デモ國民歌こくみんか

日本人は日本人を

善悪正邪に拘はらず

賞讃すれば良民と

認めて呉れるが苟くも

缺點擧げて論ずれば

眼をば怒らせ肩を張り

非國民種と扱はる

是は果して日本人の

清き態度と云はれうか

公平無私で自分等の

身の缺點を批難して

自省せなくちや成らうまい

愛神愛民稱ふれば

直に赤化非國民

解放自由も其の通り

國民滔々自覺して

文化運動に共鳴すれば

是また直に非國民

日本に日本人なしと

慷慨悲憤を装ふなり

元來日本の神民は

寛仁大度同化力

なければならぬ神の裔

見よや國祖の大神は

皇運隆々天壤と

共永久と詔り玉ひぬ

天地を廣く開拓し

自國の短所を取り除き

他國の長所を採用し

六合を齊うすべきなり

決して内訌や小競合

なすべき時代に非ざらめ

吾が缺點は喜んで

根本的に改善し

民は君をば本として

誠を啓き人類を

愛撫し國利を興さしめ

世界共通の幸福を

一つにするは日本人の

天地自然の道ぞかし

國民外交の眞意義を

忘れむとする國人は

世界せかいの國くにより排斥はいせきを

受うくるも何なんの辭じかあらむ

七千餘萬しちせんよまんの同胞どうほうの

革正かくせいすべきは今いまなるぞ

ア、惟神かむながらかむながら々々

御靈みたち幸さちはへ坐ましませよ。

〵
〵
〵
〵
〵
〵
〵
〵
〵
〵

靈界物語 第三〇卷 海洋萬里 巳の卷

終り